

袋井市大畑遺跡

— 1951・1977・1978・1980年度の発掘調査 —

1 9 8 1

静岡県袋井市教育委員会

袋井市大畑遺跡

—— 1951・1977・1978・1980年度の発掘調査 ——

1 9 8 1

静岡県袋井市教育委員会

序 文

昭和26年度の明治大学による発掘調査は、遠州地方最東端の縄文時代貝塚、集落遺跡として、大畑遺跡を学界ならびに一般に知らせるところとなりました。

また昭和52・53年度と静岡大学により、昭和55年度には袋井市教育委員会が調査を進めてまいりました。

これらの一連の調査は遺跡の規模、性格等をかなりの部分明らかにできたと思います。このたび、それらの概要を発刊できるようになったことを喜んでいます。

近年各地で行われる発掘調査の成果には目覚ましいものがあり、原始古代の姿が次々と明らかにされております。おそらくそうした全体像の中に、大畑遺跡に住んだ人々の生活の様子が位置づけられることだろうと期待しています。

また多くの発掘調査が開発行為に伴う調査であることは現実の問題であります。当市もそれに違わず調査と開発の矛盾を解決してはおりません。文化財の保存か開発かという問題は東海道新幹線、東名高速道路の建設、開通の時期から長く続いてまいりました。

私どもはいまだその答えを出すに至っておりません。文化財が保護、活用されなくてはならないことは明白であります。そうした意味からもこの大畑遺跡の今後は茶園改植事業と並存したものにならなければならないと思っております。

ともあれ、袋井市の歴史を明らかにするために発掘調査に参加して下さった作業員、調査補助員、調査員の方々にお礼申し上げます。

そして現地調査から整理刊行に至るまで細かくご指導頂きました静岡大学文学部教授市原寿文先生、昭和26年度の調査についてご執筆頂いた浜松市博物館の向坂綱二先生、玉稿をお寄せくださった国立科学博物館の山口敏先生、早稲田大学の金子浩昌先生、また石材の同定を下下さいました静岡大学の伊藤通玄先生、昭和26年度の調査資料を快くご提供下さいました明治大学文学部考古学研究室ならびに戸沢充則先生に深甚の謝意を表し発刊のことばといたします。

昭和56年3月

袋井市教育委員会

教育長 鈴木 勲 一

例 言

- 1 本報告書の昭和55年度の調査は、国庫補助金、県費補助金を得て袋井市教育委員会が実施した大畑遺跡発掘調査報告書である。
- 2 調査は市原寿文（静岡大学人文学部教授）が調査団顧問、発掘担当者となり、山下晃（静岡県教育委員会文化課）吉岡伸夫（袋井市教育委員会社会教育課）永井義博（同前）を発掘担当者として行われた。
- 3 本報告書中に昭和26年度、昭和52・53年度の発掘調査概要を併載した。
- 4 本報告書の執筆分担は次のとおりである。

第1章	山下晃 吉岡伸夫
第2章	市原寿文 山下晃 吉岡伸夫
第3章	市原寿文
第4章	加藤芳朗（静岡大学農学部）
第5章	向坂鋼二（浜松市博物館）
第6・7章	市原寿文
第8章第1節	山下晃 吉岡伸夫
第2節	山下晃 吉岡伸夫 西井幸雄
第3節	市原寿文
第9章第1節	山口 敏（東京国立科学博物館）
第2節	金子浩昌（早稲田大学）
第10章	市原寿文

- 5 第1表「昭和55年度出土石器計測表・石材一覧表」のうち石材の同定は伊藤通玄（静岡大学教養部）による。その他計測等は松井一明（袋井市教育委員会）が行なった。
- 6 出土土器の整理については加藤賢二氏に骨身おしめぬ助言、協力を受けた。押図の作成については松井一明、西井幸雄両氏の努力に負うところが大きい。また千葉豊 羽二生保（静岡大学学生）鈴木敏則（奈良教育大学学生）平賀太（奈良大学学生）池田栄史（国学院大学考古学研究室助手）渡辺幸弘 岡本利秋（国学院大学学生）の協力を得た。
- 7 本報告書は市原寿文が編集責任者となり、吉岡伸夫が編集実務を行なった。編集の過程で寺田義昭（袋井市教育委員会 指導主事）が事務上の実務を担当した。
- 8 昭和55年度の発掘資料はすべて袋井市教育委員会が保管している。
- 9 本調査に関する事務は袋井市教育委員会社会教育課が担当した。

目 次

第1章 調査にいたる経過	1
第2章 発掘調査の体制・目的・調査方法	2
第3章 大畑遺跡発掘調査の歴史	5
第4章 大畑遺跡周辺の地学的背景と遺跡立地	加藤芳朗 8
第1節 遺跡をめぐる地学的背景	
第2節 遺跡の立地条件	
第5章 昭和26年度の発掘調査	向坂鋼二 16
第1節 発掘調査の端緒	
第2節 発掘調査の経過	
第3節 住居跡	
第4節 層位	
第5節 出土土器	
第6節 その他の人工遺物	
第7節 調査結果に関連して	
第6章 昭和52年度の発掘調査	27
第7章 昭和53年度の発掘調査	30
第8章 昭和55年度の発掘調査	32
第1節 遺構	
第2節 遺物	
第3節 まとめ	
第9章 自然遺物	83
第1節 昭和55年度出土の人骨	山口 敏 83
第2節 昭和55年度出土の動物遺体概要	金子浩昌 86
第10章 総 括	89

挿 図 目 次

挿図第1	大畑遺跡位置図	1
挿図第2	大畑遺跡地形図および発掘地点配置図	2
挿図第3	大畑遺跡周辺の地形・地質区分図	9
挿図第4	大畑遺跡周辺での小笠原群泥層の露頭分布と地質柱状図	10
挿図第5	大畑遺跡付近の湧水・湛水地	12
挿図第6	笠原台地（高位面）の模式断面図	13
挿図第7	昭和26年度発掘住居跡実測図	17
挿図第8	昭和26年度出土土器拓影（1）	20
挿図第9	昭和26年度出土土器拓影（2）	21
挿図第10	昭和55年度発掘区全体図	33
挿図第11	④B3・4, C4, D4, E4グリッド平面実測図	34
	⑤E4, F4グリッド平面実測図	34
	⑥-B9, A8・9グリッド平面実測図	34
挿図第12	①A8, B7・8・9, C7・8, D7・8グリッド平面実測図	35
	②G3・4, H2・3・4グリッド平面実測図	35
挿図第13	③F5, G5グリッド平面実測図	36
	④G5・6・7, H7グリッド平面実測図	36
	⑤O-2・-1, P-2・-1・0グリッド平面実測図	36
挿図第14	昭和55年度第1号住居跡実測図	37
挿図第15	昭和55年度第1号住居跡出土土器拓影	38
挿図第16	昭和55年度第2・3号住居跡実測図	39
挿図第17	昭和55年度第2・3号住居跡出土土器拓影	40
挿図第18	昭和55年度第4号住居跡実測図	41
挿図第19	昭和55年度第4号住居跡出土土器実測図および拓影	42
挿図第20	昭和55年度第5号住居跡実測図	43
挿図第21	昭和55年度第5号住居跡出土土器拓影（1）	44
挿図第22	昭和55年度第5号住居跡出土土器拓影（2）	45
挿図第23	昭和55年度第5号住居跡出土土器拓影（3）	46
挿図第24	昭和55年度第6号住居跡実測図	47
挿図第25	昭和55年度第6号住居跡出土土器実測図および拓影（1）	48
挿図第26	昭和55年度第6号住居跡出土土器拓影（2）	49
挿図第27	昭和55年度第1～4号人骨および骨粉を埋葬した土坑実測図	51
挿図第28	昭和55年度出土第I群土器拓影	60

挿図第29	昭和55年度出土第Ⅰ・Ⅱ群土器拓影	61
挿図第30	昭和55年度出土第Ⅱ群土器拓影	62
挿図第31	昭和55年度出土第Ⅱ群土器拓影	63
挿図第32	昭和55年度出土第Ⅲ群土器拓影	64
挿図第33	昭和55年度出土土器把手・注口部・底部実測図	65
挿図第34	大畑遺跡変遷図	67
挿図第35	昭和55年度出土土器実測図(1)	72
挿図第36	昭和55年度出土土器実測図(2)	73
挿図第37	昭和55年度出土土器実測図(3)	74
挿図第38	昭和55年度出土土器実測図(4)	75
挿図第39	昭和55年度出土土器実測図(5)	76
挿図第40	昭和55年度出土その他の遺物実測図および拓影	77

表 目 次

第1表	昭和55年度出土土器計測表・石材一覧表	71
第2表	昭和52・55年度土層対照表	78
第3表	昭和55年度発掘住居跡集成表	79
第4表	昭和55年度発掘埋葬人骨集成表	80

図 版 目 次

図版Ⅰ	大畑遺跡遠景(南沖積地より)	大畑遺跡遠景(北より)
図版Ⅱ	昭和26年度住居跡近景(西より)	昭和26年度住居跡近景(東より)
図版Ⅲ	昭和26年度貝層断面	昭和26年度住居跡炉跡
図版Ⅳ	昭和53年度D6-c2, d2・3, e2・3グリッド完掘状況(北より)	
図版Ⅴ	昭和55年度第1号住居跡近景(北東より)	昭和55年度第2・3号住居跡近景(北より)
図版Ⅵ	昭和55年度D4-b1, c~e1・2, E4-a1・2グリッド第Ⅲa層上面遺構検出状況(南より)	昭和55年度D4-b1, c~e1・2, E4-a1・2グリッド完掘状況(南より)
図版Ⅶ	昭和55年度第4号住居跡近景(西より)	昭和55年度第5号住居跡近景(東より)
図版Ⅷ	昭和55年度G3・4, H2・3・4グリッド第Ⅲb層上面遺構検出状況	昭和55年度第6号住居跡近景(西より)

- 図版 IX 昭和55年度H2-a3~5, b3~5 グリッド住居跡状遺構(基盤層表面)検出状況(北より) 昭和55年度第1・2号人骨出土状況(西より)
- 図版 X 昭和55年度第1号人骨頭骨部分露出状況 昭和55年度第1号人骨腰骨部分露出状況
- 図版 XI 昭和55年度第2号人骨出土状況 昭和55年度第3号人骨出土状況(北東より)
- 図版 XII 昭和55年度第4号人骨出土状況(北東より) 昭和55年度骨粉を埋葬した土壌(第5・6号土壌)完掘状況(北より)
- 図版 XIII 昭和55年度D4-c1グリッド第Ⅲa層上面貝塚検出状況(北より) 昭和55年度B7・C7・D7グリッド完掘状況(北より)
- 図版 XIV 昭和55年度F5-e1~4, G5-a1~4, b1~4, c1~4グリッド完掘状況(北より) 昭和55年度B4-a1, b1, c1~3, d1~3, e1~3グリッド完掘状況(北より)
- 図版 XV 昭和55年度O-2-a~e4・5, P-2-a~c4・5グリッド完掘状況(北より) 昭和55年度G7-c2・3, d2・3グリッド完掘状況(北より)
- 図版 XVI 昭和26年度出土土器
- 図版 XVII 昭和55年度第1・2・3号住居跡出土土器 昭和55年度第4号住居跡出土土器
- 図版 XVIII 昭和55年度第4号住居跡出土土器 昭和55年度第5号住居跡出土土器
- 図版 XIX 昭和55年度第5号住居跡出土土器 昭和55年度第6号住居跡出土土器
- 図版 XX 昭和55年度第6号住居跡出土土器 昭和55年度第Ⅰ群土器
- 図版 XXI 昭和55年度第Ⅰ・Ⅱ群土器 昭和55年度第Ⅱ群土器
- 図版 XXII 昭和55年度第Ⅱ群土器 昭和55年度第Ⅲ群土器およびその他の遺物
- 図版 XXIII 昭和55年度出土把手・注口部・底部 昭和55年度出土石器
- 図版 XXIV 昭和55年度出土石器

第1章 調査にいたる経過

1960年代のいわゆる高度経済成長に伴う大規模開発の波は、静岡県内の埋蔵文化財に対して
もかなり深刻な影響を及ぼしはじめた。

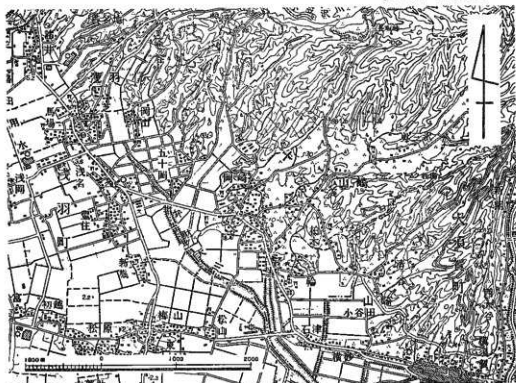
これに対応して静岡県教育委員会においても昭和49年ごろより改めて埋蔵文化財の保存対策
について検討を開始した。それは県内埋蔵文化財の現状と保存状況を把握することから着手さ
れた。

大畑遺跡は『静岡県史・第1巻』にも記載があり、古くから中遠地域における縄文時代後・
晩期の遺跡として知られていたが、昭和26年明治大学考古学研究室が行なった発掘調査によ
り、その学術的価値は高く評価されることとなった。それ以後四半世紀の間、大畑遺跡に学術
的な調査のメスは一度も入れられることなく時間を経過した。大畑遺跡一帯は、市内において
良好な茶園が経営されているために、茶の品種改良と農地の構造改善事業が進められ、遺跡は
周辺部より破壊の危機に直面するに至った。

こうした状況下、袋井市教育委員会は昭和51年度、大畑遺跡を市内重要遺跡として、その範
囲確認調査を計画するが実施にはいたらなかった。袋井市教育委員会は再度、昭和52年度から
遺跡の範囲確認などを含む調査を計画し、遺跡内に農地を有する地主10数人と調査の実施につ
いて交渉を重ねた。

こうして明治大学の発掘調査以来26年、地元の人々の理解と協力のなかで、昭和52・53年度
静岡大学考古学研究室の調査が行なわれ、再び昭和55年度の発掘調査が実施されるに至った。

(山下晃 吉岡伸夫)



押図第1 大畑遺跡位置図 (×印が大畑遺跡) 国土地理院 1:50,000 磐田使用

第3章 発掘調査の体制・目的・調査方法

調査体制 昭和52・53年度の発掘調査は、静岡大学考古学研究室が調査に当たった。その調査体制は次のような組織で行なわれた。

昭和52年度発掘調査体制

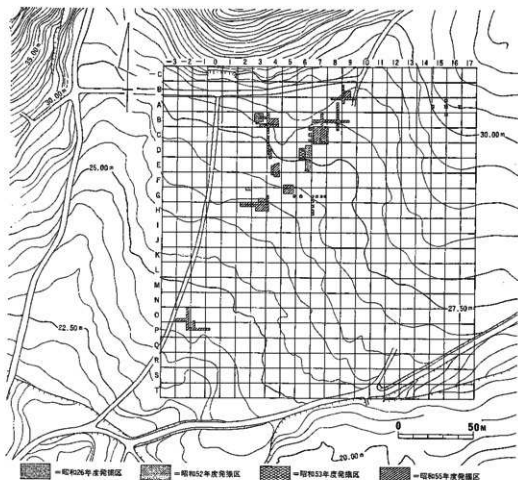
調査指導機関 静岡県教育委員会文化課

発掘担当者 市原寿文（静岡大学文学部教授） 大谷純仁（袋井市文化財保護審議委員）

特別調査員 加藤芳朗（静岡大学農学部教授）

調査員 遠藤才文（ヤマハ郷土博物館準備室学芸員） 足立順司（同 前）

調査補助員 小木曾隆 守屋雅史 郷堀英司 唐川光世 高橋浩八 鈴木良美 佐藤正知
富田和夫 羽二生保 小島正裕（以上、静岡大学文学部学生）



（等高線間隔は50cm）

押図第2 大畑遺跡地形図および発掘地点配置図

発掘作業員 鬼弦一雄 芝田一 神谷柴農夫 浅井一義 芝田常一 鬼弦温咲（以上、袋井市岡崎）

昭和53年度発掘調査体制

調査指導機関 静岡県教育委員会文化課

発掘担当者 市原寿文（静岡大学人文学部教授）

特別調査員 加藤芳朗（静岡大学農学部教授） 山口敏（東京国立科学博物館） 金子浩昌（早稲田大学）

調査員 遠藤才文（ヤマハ郷土博物館準備室学芸員） 足立順司（同 前）

調査補助員 佐藤正知 仙田直人 羽二生保 寺田甲子郎 渡井克昌 渡辺修一 小池幸夫 富田和夫 渡辺千秋 井上敬子 鈴木良美 小島正裕 高橋誠八 守屋雅史 設楽博巳（以上、静岡大学人文学部学生）

発掘作業員 鬼弦一雄 芝田一 神谷柴農夫 浅井一義 芝田常一 鬼弦温咲（以上、袋井市岡崎）

昭和55年度発掘調査体制

調査指導機関 静岡県教育委員会文化課

調査団顧問・発掘担当者 市原寿文（静岡大学人文学部教授）

発掘担当者 山下晃（静岡県教育委員会文化課） 吉岡伸夫（袋井市教育委員会社会教育課） 永井義博（同 前）

調査補助員 羽二生保（静岡大学研究生） 鈴木敏則（奈良教育大学学生） 平賀太（奈良大学学生）

発掘作業員 竹田竹子 浅井やえ 井浪ペ子 神谷れつ 神谷安子 鈴木しげ江 戸塚はなよ 神谷雅子 芝田とく 芝田ゆき江 鈴木志づ子 埋田静枝（以上、袋井市岡崎） 寺田せつ子 仲根世始子 早川はるみ 鈴木咲子 永井美津枝 寺田ひで子 鈴木みず江 浅井征江 早川保子（以上、袋井市豊沢）

調査目的 昭和26年度の明治大学・後藤守一教授を中心とする第1回発掘調査の目的等については、第5章に詳述されているので割愛する。

昭和52年度の発掘調査は、3地点、合計113m²の範囲を発掘した。調査の中心部分はD6・E6グリッドの東半部分であるが、遺跡の構造を詳細にわたって知りうる情報をもたなかったので、遺跡基盤層、遺物包含層、遺構などがいかなる状況で存在するかを明らかにすることを第一の目的として調査を進めた。その結果、遺跡の基盤は洪積世の「砂礫混り黄褐色粘土層」（第5層）であり、上に厚さ30cm前後の堆積を示す「暗褐色土層」（第3層）が遺物包含層に相当することを確認できた。しかも、第3層中には5cm前後の上下間隔に6面の先史地表面（第3層A面～F面）の存在すること、各面に人工・自然遺物・礫の散布や、各面から平地住居跡・埋葬をはじめ土壇などの遺構が設置され、また掘りこまれているのを確認することができた（市原1978）。

昭和52年度の調査結果にもとづいて、一方その結果を追認する意味も含めて、昭和53年度に

はD6・E6グリッド西半分の28㎡の発掘を進めた(市原1979)。その結果は昭和52年度の諸知見を裏づけ、大畑遺跡においても微細な分層発掘が可能なことを証明した。

昭和53年度の今一つの作業は、遺跡の範囲全体を確認することであった。予算・日程等の制約も伴ったため、グリッドの各交点にボーリング及び小試掘坑を掘って遺物包含層の分布範囲を確認している。ボーリング・試掘坑の地点は74地点に及び、南北175m、東西100mの範囲に遺物包含層は分布し、西側の井戸ヶ谷に向かって三ヶ月状に開いていることも確認した。

調査方法 昭和52・53年度に確認した遺物包含層の構造、ボーリングによる遺物包含層の分布範囲を手がかりとして、昭和55年度の発掘調査は実施された。発掘範囲は590m²におよび、多数の住居跡・土壇・埋葬人骨・地点貝塚の分布などが確認できた。本調査は、発掘範囲が広汎に及んでいるため、昭和52・53年度調査のように遺物包含層中に重複する各先史地表面の露出、同面と各種遺構の関係を面的に全掘する方法は捨象せざるをえなかったのであるが、各発掘区においては昭和52・53年度の調査知見を余すところなく活用して調査を進め、詳細な結果を得ることができた。

大畑遺跡の全体像を復元的に把握するためには、考古学上の知見および資料の解析結果だけではおのづと限界があることは言うまでもない。昭和55年度調査においては地学・鉱物学・古動物学・古人類学等の専門委員に参加していただき、遺跡の古環境をはじめ各種試料の解析を行ない、大畑遺跡を総合的な調査体制の中で理解することに努めている。それらのとりあえずの結果は本篇第4・9章に併載されている。

(市原寿文 山下晃 吉岡伸夫)

参 考 文 献

- 市原寿文編 1978年 『袋井市大畑遺跡—1977年度の発掘調査—』 袋井市教育委員会
市原寿文編 1979年 『袋井市大畑遺跡—1978年度の発掘調査—』 袋井市教育委員会

第3章 大畑遺跡発掘調査の歴史

大畑遺跡の出土品が、1800年代の初頭に『遠江古跡図絵』にとりあげられ、昭和になって『静岡県史・第一巻』あるいは『遠江郷土研究会誌・第二号』などにとりあげられていることは『袋井市大畑遺跡—1977年度の発掘調査—』（市原1978）に述べているので省略したい。この時期には遺跡の発掘そのものは行なわれることなく、表面採集の遺物が、人々に注目された時期である。

本篇第5章に詳述されているように、昭和26年度の明治大学による調査（岡本1955）が大畑遺跡発掘の最初である。それ以後、昭和52（市原1978）・53年度（市原1979）（静岡大学考古学研究室）、昭和55年度（袋井市教育委員会）と発掘調査が引続き行なわれ、大畑遺跡の全容が徐々に解明されてきつつあるが、各調査が何を意図して行なわれたかについては、第2章に述べられている。

ここでは、4回にわたる調査が、縄文時代研究の動向に対応して、どのように位置づけられるかをのべたい。

第1に住居跡の問題である。第5章にのべられているように昭和26年度確認の住居跡（岡本1955）が、東海地方から西日本全域における縄文住居跡発見の嚆矢をなす発見であったことはいうまでもない。その後、県下においては、清水天王山遺跡において晩期前半の住居跡が発見され（1959年）（宮本1960）、浜松市観塚遺跡における縄文後期集落の調査（1955年～1958年）（後藤1957 後藤1985 後藤1960 編輯委員会1961 浜松市1962）、磐田市石原貝塚における縄文後期住居跡の調査（1959年）（市原1967）が行なわれるという経過をたどり、急速に縄文後期を中心とする時期の住居跡の形態が明らかにされていく（後藤1958）。しかも、これら一連の住居跡がいずれも地表面に床を構築した平地住居であることが判明するに及んで、東西地域において縄文時代の住居跡形態に差のあることも考えられるようになった。また、東海地方において少なくとも縄文後期には平地住居跡の系譜をたどりうるという考え方も定着しつつあった。

大畑遺跡においては、昭和52年度の発掘においてもD6-e4・e5, E6-a4・a5・b4・b5 グリッドにかけて、縄文後期（土器型式は宮滝式併行期ないし直後）の「住居跡状遺構」とした例（市原1978）、昭和53年度発掘ではD6-c2・d2グリッドにおいて中期末葉と判断される土器を床面に伴出する堅穴住居跡の存在などが明らかにされた。ひき続き昭和55年度調査においては、縄文中期最末と、後期前半および末に営まれた堅穴住居の存在することが新

-
- * 観塚遺跡は、大畑遺跡と同じように洪積台地（三方原台地）上に立地する。そして、地表面から遺跡基盤を構成する洪積世の砂礫層表面までは50～60cmと浅く、その間の30cm前後の遺物包含層中に住居跡・埋葬施設などの諸遺構が残存する点も大畑遺跡と共通している。その住居跡が平地住居であるために検出には細心の注意を要求されるのであるが、最初の平地住居跡が検出されたのは観塚遺跡第二貝塚東南部区域においてであり、麻生優氏の指導によって行なわれた（後藤1958）。

しい発見として加えられたのである。

即ち、大畑遺跡においては縄文中期後葉から晩期の間に、竪穴→平地→竪穴→平地と住居跡の形態が目まぐるしく交代しており、その変遷は少なくとも蛸塚遺跡においてはみられなかった、きわめて対蹠的な現象である。

天竜川の西に位置する蛸塚遺跡と、東に位置する大畑遺跡とは共に縄文後期を主体とする遺跡でありながら、きわだった対象のみられる大畑遺跡の住居形態の変遷がいかなる意義を有するかについては、今後解明していかなければならない課題であるが、大畑遺跡の調査の歴史の中で提起された大きな問題点の一つである。

昭和26年度の大畑遺跡最初の発掘結果の全容が、明治大学文学部考古学研究室の好意により向坂鋼二氏によって本篇第5章に併載されたことは、大畑遺跡発掘調査の歴史においても大きな意義を有することといえよう。

この調査は、昭和23年日本考古学協会内に設置された「縄紋式文化編年の研究特別委員会」(委員長山内清男氏)(佐藤1974)に交付された文部省科学研究費の一部によって行なわれた調査であるが、経済的な制約も多く日程的にはわずか5日間という学術的調査であった。

しかし、調査体制としては故後藤守一氏を中心にして、杉原莊介・芹沢長介・岡本勇の諸氏が参加するというベスト・メンバーによって進められた調査である。この調査において、先に述べた住居跡の確認をはじめ、貝層中には貝の量に匹敵する獣骨が包含されていた事実など、大畑遺跡の理解に欠くことのできない資料が提供されている(岡本1955)。

この調査が進められた頃の、奥下(静岡県1930 堀田・川合1935)及び東海地方の縄文後期の比較資料としてややまとまったものをあげれば数例(堀田・川合1935 池上1940 小栗1941)にとどまる時期である。大畑遺跡の1951年度の調査結果抄報が岡本勇氏によって執筆(岡本1955)される前に、その概要は明治大学考古学研究室でその頃開催されていた東京考古学会例会において報告されている。そこに出席しておられた山内清男氏は、すでに岡山県福田貝塚を鎌木義昌氏が発掘され(1950年)、瀬戸内における福田KⅡ式土器の構成内容を確認しておられた。それに基づいて大畑資料の中に関東地方の後期資料との対比だけでなく、畿内・瀬戸内の後期資料と対比される点のあることを指摘された。残念なことに、福田貝塚資料の全容が山内氏ご自身によって公表される機会をえることなく時間が経過する。1955年に岡本勇氏によって執筆された抄報(岡本1955)においても大畑資料と西日本縄文後期の関係にはふれられることなく、その内容は「大畑Ⅰ式・同Ⅱ式」土器として層位関係から分類され、Ⅰ式は堀之内式土器と、Ⅱ式は加曾利BⅠ式土器と「相互に共通するメルクマール」の認められることが指摘されるにとどまるのである。抄文中に、岡本氏による文章表現こそされてはいないが、以上のような経過をふまえた上で岡本氏による大畑土器型式の分類であったことを知ることができる。大畑遺跡発掘調査の歴史の表面に現われることのない一齣としてのべておきたい。いずれにしても、戦後間もない時期に行なわれた大畑遺跡第1回の発掘調査であるが、その頃にお

・ (佐藤1974)「山内清男略年表」の記録を参照した。

けるもっとも先端的な学問的雰囲気の中で進められた調査と研究が、大畑遺跡をめぐって進められたということは許されるであろう。

その後、遠江地域だけでも浜松市蛸塚遺跡（後藤 1957 後藤 1958 後藤 1960 編輯委員会 1961 浜松市 1962）、磐田市西貝塚（麻生 1961）、同石原貝塚（市原 1967）等の縄文後期遺跡の調査が行なわれ、昭和55年度調査を含めて大畑遺跡においても4回の発掘が行なわれ、遠江地域の縄文後期研究は急速に進展していく。又、東海西部から近畿地方の縄文後期資料も急速に増加しつつあるのが現状であり、歴史的な経過をふまえながら大畑遺跡の再検討をせまられる時期に到達したといえることができる。（市原寿文）

参 考 文 献

- 岡本 勇 1955年 『静岡県小笠郡大畑遺跡』 日本考古学協会編『日本考古学年報一昭和26年度一』
- 市原寿文編 1978年 『袋井市大畑遺跡一1977年度の発掘調査一』 袋井市教育委員会
- 宮本延人編 1960年 『清水天王山遺跡一第1次～第3次発掘報告一』 清水市郷土研究会
- 後藤守一編 1957年 『蛸塚遺跡一その第一次発掘調査一』 浜松市教育委員会
- 後藤守一編 1958年 『蛸塚遺跡一その第二次発掘調査一』 浜松市教育委員会
- 後藤守一代理編集委員会編 1960年 『蛸塚遺跡一その第三次発掘調査一』 浜松市教育委員会
- 編輯委員会編 1961年 『蛸塚遺跡一その第四次発掘調査一』 浜松市教育委員会
- 麻生優編 1961年 『西貝塚』 磐田市教育委員会
- 浜松市教育委員会編 1962年 『蛸塚遺跡一総括篇一』 浜松市教育委員会
- 市原寿文 1967年 『遠江石原貝塚の研究一縄文後期における地域性の問題をめぐって一』 『人文論集18号』 静岡大学人文学部
- 佐藤達夫編 1974年 『山内清男集』 日本考古学選集21 築地書館
- 静岡県 1930年 『静岡県史 第一巻』
- 堀田美穂男・川合治策 1935年 『磐田郡佐久間村大字半崎字上皆外石器時代遺跡調査』 『静岡県史蹟名勝天然記念物調査報告第十集』 静岡県
- 池上 年 1940年 『三河國幡豆郡西尾町貝塚に就きて』 『考古学雑誌』11巻4号
- 小栗鉄次郎 1941年 『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告第十九集』 愛知県

第4章 大畑遺跡周辺の地学的背景と遺跡立地

加藤 芳朗

第1節 遺跡をめぐる地学的背景

i 概説

遺跡は台地（段丘）上に位置する。この台地は岡崎、三輪、柏木など旧笠原村に展開するので笠原台地と呼ぶこととする。背後（北西側）には小笠山丘陵の山脚末端が迫る。笠原台地はその中央で北東から流下する三沢川の平地によって分断される。笠原台地と三沢川平地の末端は奥道袋井横須賀線あたりにあり、それ以南は弁財天川ぞいの浅羽低地となる（挿図第3）。

ii 小笠山丘陵

小笠山丘陵は小笠神社付近の海拔 264m を最高とし、その尾根筋が西南方向にゆるやかに下がっている。尾根と谷とが平行して走り、谷の支谷が尾根の中に入りこんで樹枝状の模様をなす。従って、緩傾斜だが凹凸に富んだ複雑な地形である。

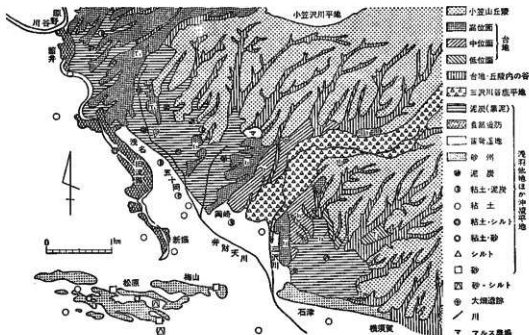
地質は中期更新統の礫・砂・泥（粘土）層からなる。主体をなす部分は小笠層群といわれ河成礫層を主とし、間に何層もの淡水ないし内湾成泥層を挟む。河成の礫はよく円磨され、かつかなりの大礫（径10cm以上）の場合もあり、岩種は砂岩が圧倒的である。この点は太田川・原野谷川・菊川（砂岩・泥岩・頁岩を主とし角ばっている）や天竜川（砂岩のはかにチャート・凝灰岩・花崗岩・結晶片岩など岩質が変化に富み、よく円磨されている）のそれと違っており、礫の起源として、はるか東方の大井川を挙げなくてはならない。

石田ら（1980）によると小笠山丘陵における小笠層群の主要泥層は8枚あるという。このうち下から4枚目の泥層は「法多山泥層」と呼ばれ、袋井市の山田川、二軒屋をへて法多、山本、奥三沢、さらには大須賀町の西大谷ダムから東大谷にかけて分布する。下から7枚目は「大門泥層」で、袋井市大門、北方の南、五十岡の奥、奥三沢、大須賀町西大谷に見られる。遺跡の近くでは、マルス農場南の水田に面した西向きの崖（挿図第5のC地点）に露出する泥層が下から8枚目、つまり最上位の「岡崎泥層」に当たる。こことすぐ北の崖の泥層からはカキを始め内湾性の貝化石が発見されるという。

泥層や礫層は走向が北西―南東向き、傾斜が5～10° 南西である。上記の泥層の露出点が北西から南東に配列するものためである。

石田らは古地磁気の測定データから法多山泥層の上位が古地磁気編年のブルュクス期（正常磁期、約73万年前より現在まで）と松山期（逆帯磁期、約73～167万年前）との境界付近の時期に当たると推定している。また岡崎泥層は38万年前（大阪層群のMa 7・8の間にあるカスリ火山灰の年代）かそれより新しいとされる。

黒田（1975）は泥層から産出する植物化石を研究し、それから古気候（寒暖）を推定し、



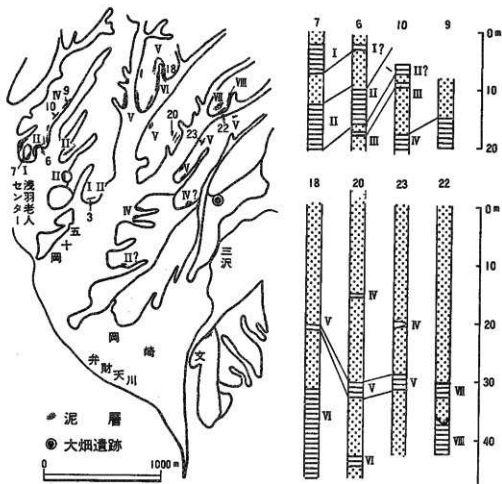
挿図第3 大畑遺跡周辺の地形・地質区分図(経済企画庁と1965と筆者の調査結果を総合)
 い、い¹; 笠原台地高位、中位、低位面 T¹, T²; その他の台地の高位、低位面

大阪層群との比較を試みているが、石田らの推定よりも年代が古くでている。

筆者が今回調査したのは遺跡周辺に限られる(挿図第4)。石田らの大門累層に相当するものから上位の部分調べたことになる。礫層を主とするが図示したように少なくとも厚薄8枚の泥層のあることがわかった。これらは傾斜がゆるやかなこと、厚さが変化すること、露頭が少ないこと、岩相が似ていること、火山灰がないことなどから追跡がいちじるしく困難である。このため図には泥層の露出位置と層準(上からI~Ⅷとした)を示し、主要地点の柱状図を付記した(挿図第4)。Ⅳが岡崎泥層、ⅦまたはⅧが大門泥層にそれぞれ相当する。

iii 笠原台地

三沢川沖積平野を挟んで北の岡崎側と南の三輪、山崎側に広い平坦面を残している。このほか、三沢川の上流に向かって奥三沢までの間に、小笠山丘陵の山裾ぞいに断片的に見出される。平坦面の高度から3つの面、高位・中位・低位の各面に分かれる。高位面は(1)岡崎の八雲神社南と公会堂を結ぶほぼ南北東の線より西側と(2)三輪の素我神社を通るほぼ南北の線の西側にあり、それぞれ、東側の中位面とは3m前後の高度差がある。また(3)奥三沢の砥園神社の背後の台地と(4)五十岡部落ののる台地も高位面である。低位面は柏木から清ヶ谷に行く道路沿いに存在し、中位面より約5m低い。その他の部分が中位面である。高・中位面とも南西方向に次第に高度を下げ沖積面(浅羽低地)の地下へ埋没する(挿図第3・5参照)。高位面内の侵食谷が他と比べて一番深くかつ密度が高い。中位面ではそれは浅くかつまばらであり、低位面には全くない。これは高位面が最も古く低位面が最も新しいことと関係する(時間が経過するほど面の侵食が進むことを示す)。ただし、小笠山丘陵と接するところでは、丘



挿図第4 大畑遺跡周辺での小笠層群泥層の露頭分布と地質柱状図

アラビア数字は地点 No. ローマ数字は泥層 No.

陵内の谷の延長部が侵食谷となるので、これは除外して扱った。

台地面はいずれも厚さ5m以下の台地礫層で構成される。これらは各台地面が今の三沢川平地のようになっていたとき、その当時の三沢川によって小笠山丘陵の礫が侵食運搬されたものである。従ってその下位に小笠層群の礫層が来たときは両者の見分けがむづかしい。ただし、台地礫層の方には角礫が含まれることがある。

これら礫層の上には土壌がのっている。暗褐色の表土とその下の礫まじりの黄褐色粘質土(厚さ50~100cm)からなる。土壌がかなり粘質なことから見ても礫層の生成(台地面の生成)は後期更新世までさかのぼるものと思われる。

大畑遺跡は中位面に位置する。

高位面に相当する台地は浅羽地区にも広く分布する。これは北方の小笠沢川の往時の運搬堆積作用の結果で上がったものである。

iv 三沢川平地

小笠山丘陵内では有数な規模の沖積平地である。延長距離が長いと運搬された多量の砂礫

が幅広い平地を作っている。河床の上昇も著しく三沢川は浅羽低地への出口で天井井をなし、また平地の高度も隣りの小谷に比べていちじるしく大きい。例えば、大畑遺跡の南方での三沢川平地の標高は約15mなのに、西方の五十岡、岡崎間の谷はマルス農場南西の地点でわずか3m弱の標高である。これと関連して注目すべきことは、岡崎の東区で中位面内の小谷の出口が三沢川平地の堆積物によって塞がれたようになっていることである。この谷の上流は遺跡の西をへて井戸ヶ谷に通じているが、この川の土砂運搬量が少ないのでこういうことが起こったと解釈される。そこには池があり、その南端に比高1mで三沢川平地が迫っており格別堤防のようなものが見当たらない。平地の等高線は小さい凹凸にとむので流路と直角な方向にいくらか高低の変化があることを示す。おそらく旧流路網の存在のためであろう（挿図第5）。

Ⅴ 浅羽低地

これまで述べた小笠山丘陵、笠原台地、三沢川平地の南西側に広がる低地である。きわめて低平で標高も2～3mである。小笠山丘陵内の谷の中にも入りこんでいる。前記の五十岡、岡崎間の谷もその例である。三沢川だけは礫の堆積が盛んなので例外である。

前項までの各地形単位が礫質の高燥な環境なのに対して、この低地は排水不良地である。もっとも現在は大規模な排水工事によって改良されつつある。地質も粘土・泥炭まじり粘土・泥炭（黒泥）からなる。とくに小笠山丘陵内の谷の出口を泥炭が占めるといった低湿地特有の状態を示す（挿図第3）。このような低湿状態は縄文海進（縄文前期、約5,000年前ごろ）によって太田川・原野谷川下流部に海水が侵入して入江（内湾）を作ったことから始まる。その後この湾の出口は海岸沿いの砂の堆積物（砂州）によってふさがれ、また、背後からの川の濁水によってだんだんと埋め立てられてしまった。主要河川である太田川・原野谷川からの運搬物の影響が最も少ないのはこの浅羽低地と磐田市の今ノ浦低地で、最後まで湿地の状態が残ったものと推定される。浅羽低地は諸井—浅羽—浅名—熊住—新堀を通る原野谷川からの分派旧流路とその両側の自然堤防で西方を囲まれ、松原、梅山、松山および石津にある東西方向の砂州によって南方をふさがれて低湿状態がより長く維持されたと思われる。今ノ浦低地も天竜川平地からの旧流路と太田川からのそれおよび隣伴する自然堤防とによって海側が仕切られている点で共通性がある。

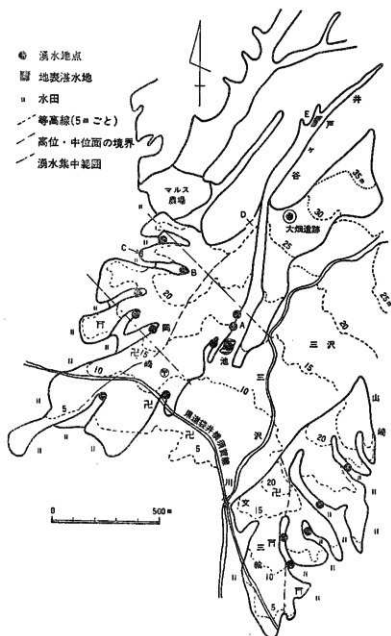
第2節 遺跡の立地条件

ここでは遺跡の営まれた縄文中期～晩期頃の周辺の自然条件のうち地学的なものに的をしばって考察を進めたい。

ⅰ 地形的条件

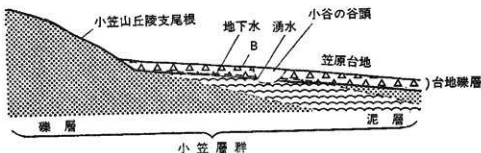
遺跡の位置する笠原台地の中位面や背後の小笠山丘陵の形状は当時も現在とほとんど変わらないものと思われる。これは、それらの形成年代が1万年をゆうに上まわる過去に属するからである。ただし、西側の井戸ヶ谷や三沢川の平地での堆積量は現在に至る間に増加したと考えられる。以上を前提とすると、

ⅰ 遺跡は小笠山丘陵の支尾根を背にした平坦な台地上に立地した。



挿図第5 大畑遺跡付近の湧水・湛水地

口 支尾根は遺跡の高度(約27~28m)よりも15~30m高くかつ北西側を塞ぐので冬期の季節風を和らげる役目を果たしている。ちなみに現在の12月~3月の浜松測候所での最多風向は各月とも西北西である。一方南側はさえぎるものがなく日光に恵まれている。



挿図第6 笠原台地（高位面）の模式断面図

ハ、台地上のため高嶺である。

ニ、小笠山丘陵内部へ足をのぼすにも三沢川の広い平地沿いに、また、北東の谷をへて長坂峠を越えて小笠沢川の谷に出るにも好都合な位置にある。また台地の末端までは数100mないし1kmしかなく、そこでは入江に出会うことができた。

これらは遺跡が地形的・地理的環境にめぐまれていることを示す。中でもロとニは笠原台地の他の部分や浅羽町の台地にはない好条件である。

ii 水文学的条件

(1) 生活用水 中でも飲用水の便・不便は居住環境の良否と基本的にかかわる自然要因であるので、この点に留意して遺跡周辺の水利（湧水・溜まり水）を調査した。その時期は冬の漏水期に当たり、直前の降雨もなく、水に一番困る状態が対象となった（昭和58年1月上・中旬踏査）。

(ア) 湧水 調査の結果は挿図第5のごとくで、笠原台地内の小谷の多くで湧水箇所を見出した。湧水量は少量で直接それを取水するというわけには行かないが、水溜めを作ればそこに自然に集水することが可能な程度はある。上水道が普及した現在ではこれを使って生活していないが、以前はこの水を生活用水として使用したという地元（岡崎）の人の話もある。また井戸（水溜め）らしい跡もある。湧水地のうちで遺跡からの最短は図のAとBとともに約550mの距離である。Aは井戸ヶ谷の延長の一部である。その上流側は茶畑となっており農地造成で谷を埋めた疑いもあるので、縄文時代末にはもっと上流から湧水が得られた可能性も、後述のことから否定できない。

挿図第5を見ると笠原台地のうち岡崎地区に近くは湧水が多いことに気付く。この理由はつぎのように考えられる。同図C点の崖に厚い青灰色泥層（7～8m以上）とその上をおおう礫層（2m以上の厚さ）がある。北側の谷の出口右岸側にもこの泥層は露出し、この付近で厚い泥層が台地の礫層の下に伏在することを示す。この泥層はIVに当たる。すでに述べたように、小笠層群の地層は走向が北西南東で南西に低角度で傾くのでこの泥層は台地の下を南東方向に延びてA地点付近まで達していると推定される。台地の地層構造を模式的に示すと挿図第6のごとくなる。礫層は水をよくとおすので雨水はこの層をしみこんでゆく。下に泥層があるとこれは不透水層なので水はそこでさきぎられて地下水となる。この部分が谷の斜面に露出すると地下水が横に流れ出て泉としてわき出る。小谷の谷頭は三方から湧出した水が集まるので水量も多い。こういう仕組みで水が湧出するとすると、図の鎖線内に集中する湧水群（ほとんどが小谷の谷頭部）は泥層IVに関係したものと解釈できる。先述したA点よりも上流側で湧水の可

能性があるということはこの泥層がそのあたりまで伏在しているかもしれないからである。岡崎のその他の湧水はⅣの上位の泥層が関係すると思われる（例えば北八雲神社南の路傍に泥層が出ている）。山崎、三輪では小谷の上流が農地造成（茶園）で埋め立てられ谷頭の湧水を見ることができないが、茶園と水田との接点で湧水があり、茶園内の排水溝が水でしめる部分もある。ただし、素我神社横の小谷では谷頭近くで湧水を見ることができる。

このように泥層Ⅳの存在が湧水と関係するとなると他の泥層でもこういった現象の可能性が大きい。例えばマルス農場北方の谷で泥層の上面から水の滲出している地点を5ヶ所で確認している。また市外ではあるが浅羽町岡山の老人センター入口付近でも同様である。そこで遺跡背後の小笠山丘陵支尾根と井戸ヶ谷について泥層の露頭の有無をくわしく調べた。結果はただ1箇所で見つかっただけである。それは揮図第5のD地点である。遺跡の北側の道を西進し井戸ヶ谷からの道との交差点を通りすぎてすぐ右の道ぞいである。しかしこのあたりでは湧水は見当らない。上述のマルス農場北方の谷は井戸ヶ谷のすぐ西隣りであり、ここでは泥層Ⅴ・Ⅵ・Ⅶが露出しているのでその南東方向の延長として井戸ヶ谷に当然来ているといえるが、地層の観察できる崖が少ないため発見できず、また湧水兆候もなかった。泥層があり湧水があっても崩壊土に埋没し植生に被われてしまうと発見は困難となる。このことは遺跡の縄文人が湧水箇所を井戸ヶ谷で探り出しそれを使用した可能性も残っていることを示唆している。

（イ）地表水 川水は水が地表を流れる姿である。しかし、遺跡周辺の川はかなりの降雨時を除いて平時は涸れている。河床が礫であるため水が滲透してしまうからである。小笠山丘陵の川全体がこの傾向である。ただし例外もあって、法多山境内では川に水が流れている。そこには厚い泥層が河床下にあり水の滲透をさまたげるためである。このような例外が遺跡の周辺にないかということで川筋を見なおしてみた。ただし、前項の湧水に源を発するものや、家庭排水の流下するものは除外する。その結果、井戸ヶ谷にそれがあることがわかった。揮図第5のE地点である。ここは、前項で述べたD地点近くの交差点から井戸ヶ谷の奥に約500m行ったところである。手前には現在不使用の工場らしい建物がある。川筋に前後30mほどの範囲で水が溜まっている。水は一見清澄ですぐ飲めそうである。この調査は前にも述べたように濁水期のさ中に行なったわけだから、夏には水量が増す可能性もある。おそらくこの河床の下にマルス農場北の谷にでている泥層のどれか（多分Ⅴ）の延長が来ているのではなかろうか。

もう1つは井戸ヶ谷の末端、すでに前項で述べた池である。この池は三沢川の堆積物に谷の出口が塞がれた所に位置することをすでに述べたが、ただそれだけでは水が溜まりそうにもない。ここも恐らく泥層（Ⅳ）の延長が池底に来ているのではなかろうか。池の水は周辺の湧水の流れてこみと地元の人のいう池底からのそれとによってまかなわれていると思われる。

遺跡のごく近くの地形図等高線の形状を見ると、台地面の北西側に等高線のくびれがあり、小笠山丘陵支尾根の南斜面や遺跡より上方の台地上に降った雨水を集めて流れるような姿である。発掘担当者の話にも「上からの水がしみて水がたまりやすい」という表現があった。この近くの土壌下層は礫まじりの粘質土で水を通しにくい。この層まで掘り下げて雨後の表流水を貯めることは可能であろう。ただし、同層には斑紋がないので常時水が停滞するような状態にはなかったと見てよい。その意味で居住環境を不快にするものではない。

以上、生活用水の源泉をいろいろな角度から検討してきた。結論として遺跡の人は水にそれ

ほど不自由しなかったのではないかと言いうる。

(2) 古磐田海

市原(1978)は1977年度の大畑遺跡調査報告の中で太田川流域一帯に、遺跡の営まれた当時潟湖(ラグーン)が存在したことを指摘し、これに古磐田海の名称を与えた。本稿での浅羽低地はその一部に当たり、砂州と自然堤防を伴う原野谷川から派出する旧流路とによって抱かれていることは前節ですでに述べた。また磐田市の今ノ浦低地も自然堤防に囲まれて類似の環境にあったことを指摘した。今ノ浦低地では大池という低湿地の名残りが今もあってあるが、浅羽低地の方は宝永4年(1707年)の地震で横須賀西郷から浅羽一帯が隆起したためかそのようなものは残っていない。しかし、泥炭の分布は近い時代まで湿地の存在したことを物語っている。上記の地震によってそれまでの入江が陸化し、横須賀港の機能が停止したといわれる(多田1964)。またこのとき御前崎付近は1~2mの隆起があった(理科年表—東京天文台1978)。

大畑遺跡では縄文後期の地点貝塚がヤマトシジミを主体とすること(市原1978)、磐田市西貝塚(縄文中〜晩期)もヤマトシジミが圧倒的に優勢であること(加藤1961)から浅羽低地あるいは今ノ浦低地の水がその当時すでに低塩分化していたことがわかる。それでは、縄文海進で海水が侵入した太田川下流の入江—古磐田海—はいつそうなったのか。古磐田海を外海から遮断しているのは現海岸沿いの砂州の列(2~3列)である。これがいつできたであろうか。それを指示する自然現象はまだ発見されていない。考古学的遺物によると、今ノ浦の南方の砂州では浜部で古墳時代後期の須恵器が発見されているだけである(鈴木1980・1981)。浅羽低地南の砂州では弥生中期の遺物があり、同後期になると遺跡数が急増するという(柴田稔氏の御教示による)。また上述のように大畑遺跡が営まれた頃には、浅羽低地の水は低塩分化していたのでその南をふさぐ砂州はすでにあったと見てよい。しかし、その砂州の形成がいつ頃までさかのぼるかは不明である。なお、浅羽低地の西を画する自然堤防上でも弥生中期遺物が発見され、同後期になると遺跡数が増加するという(袋井市教育委員会吉岡伸夫氏による)。

(謝辞) 周辺遺跡について御教示頂いた柴田稔、吉岡伸夫氏にお礼申し上げる。

参 考 文 献

- 加藤芳朗 1961年 「出土貝類について」『西貝塚16—17』 磐田市教育委員会
多田文男 1964年 「自然環境の変貌」 東京大学出版会
経済企画庁 1965年 「土地分類基本調査 5 万分の 1 地形分類図・表層地質図・土じょう図」
磐田・掛塚 経済企画庁
佐々倉航三・伊藤通玄 1967年 「静岡県の気候」 静岡県地学会
黒田啓介 1975年 「小笠原群の植物遺体」『地質学雑誌』81巻12号
市原寿文 1978年 「大畑遺跡の立地環境」『袋井市大畑遺跡—1977年度の発掘調査—』 袋井市教育委員会
東京天文台編 1978年 「理科年表昭和53年版 地学」 丸善
石田志郎ほか 6 名 1980年 「掛川地域の中部更新統」『第四紀研究』19巻3号
鈴木久雄編 1980年 「磐田弥生時代遺跡地名表」 磐田市教育委員会
鈴木久雄編 1982年 「磐田古墳時代遺跡地名表」 磐田市教育委員会

第5章 昭和26年度の発掘調査

向坂 鋼二

第1節 発掘調査の端緒

昭和25年の夏、登呂遺跡発掘調査のため静岡に滞在中の、当時明治大学文学部学生だった岡本勇氏が、友人の東洋大学学生市原寿文氏と同行し、藤枝高等学校（現藤枝東高等学校）郷土研究部の部室を訪問された。当時私は同部の2年生であった。

それは、8月25日であって、それよりさき登呂遺跡発掘に参加している内に、岡本氏と親しくなり、郷土研究部で集めた考古資料を同氏に見ていただく機会をもつことを約束していた。私たちが集めた資料の中で、特に岡氏の注目を集めたのは、清水市天王山遺跡採集の条痕文土器（水神平式）と、小笠郡笠原村（現袋井市）大畑遺跡採集の条痕文土器であった。前者が、その後の天王山遺跡発掘調査の端緒となったのはいうまでもない。後者については、同時に若干の貝殻と獣骨片も採集されていたため、後日岡本氏から現地踏査をしたいという話に発展して、翌26年1月28日に、ボーリング調査が行なわれた。この調査によって、小規模ながら貝塚の存在が確認された。この日、藤枝高等学校郷土研究部から10名と静岡市立高等学校から1名瀬古巖君が参加した。

大畑遺跡は、『静岡県史・第1巻』（昭和5年刊）にも掲載され、古くから知られてはいたが、昭和23～24年頃から、高校生の間に石獣がよく拾える遺跡として注目され出した。私も、昭和24年3月28日、翌25年3月16日、同年7月9日と3回採集に出掛け、石獣を64点、硬玉曲玉1点等を採集したが、当時焼津水産高等学校の袴田純氏は、700点余りの石獣を採集している。この遺跡で貝殻獣骨が採集できることに気がついたのは、袴田氏と一緒に出掛けた昭和25年7月9日のことであった。

後で知ったことであるが、昭和26年1月28日のボーリング調査は、日本考古学協会の縄紋式文化編年研究特別委員会（委員長山内清男氏）の科学研究費による総合研究活動の一環であった。

以下、大畑遺跡の発掘調査について概述するに当たり、発掘調査を担当した明治大学文学部考古学研究室に保存されてきた調査日誌、実測図、写真、出土遺物等を使わせていただいた。この調査は、鮮明な印象として今も私の中に生き続けているが、当時一高校生でしかなかった私が、こうして筆をとることになったのには、関係者の格別のご配慮があったからで、このことについて、まず感謝の意を表する次第である。

なお、この調査については、『日本考古学年報』4（昭和30年刊）に、先輩の岡本勇氏による

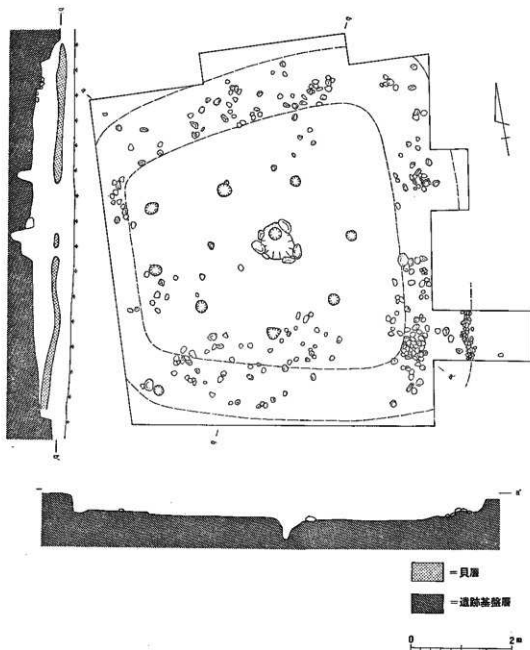
* 当時学会の関心が、東海地方縄文時代晩期の条痕文土器の性格と編年にあったことを示している。

** 出土遺物については、明治大学考古学陳列館の倉庫の奥深く収納されていて、この報告書執筆までに再見できなかった。昭和32年に向坂が卒業論文をまとめた時作った拓影・写真などの記録を用いた。

概報が掲載されている。この概報の草稿もまた、記録類の中にファイルされていたので、参考にさせていただいた。併せて感謝申し上げる次第である。

第2節 発掘調査の経過

昭和26年1月28日 日本考古学協会縄紋式文化編年研究特別委員会の後藤守一委員の命に



b—b' 断面図の貝層と基盤の黄褐色粘土層表面の断面実測図は、原図において2葉の図に分けられていたが、調査日誌の註記から上・下関係を復元し1図とした。

押図第7 昭和26年度発掘住居跡実測図

より、岡本勇氏が、現地の状況調査に出張した。貝塚の面積は3～4坪、厚さ10cm程度と小規模であるが、遺物の分布範囲は広大であり、条痕文土器も採集された。地主埋田政一郎氏から発掘について快諾をいただき、宿舍のご配慮も引き受けていただいた。

3月13日 午前中、藤枝東校生達と表面採集。午後3時頃から南北トレンチによる発掘開始。表土を除いて、貝屑の発掘に移ったところで日没。貝屑の土器は、当初の予想と違って、晩期らしくない。

3月14日 貝塚の掘りに合せて西側ヘトレンチを拡張した。午後になって、石囲いの炉跡を発見した。また発掘区の南端部では、列石と小ピットを検出した。出土土器は、加曾利B式と堀之内式で、特に炉跡付近では堀之内式が出土した。

3月15日 炉跡をもつ住居跡のプランの確認調査を行なう。列石が住居跡をめぐるらしく、その追求のためトレンチの拡張を続ける。その結果、炉跡を中心に不規則な円形ないし隅丸長方形を示す、やや連続的な石の配置のあることが判った。

3月16日 列石は数10cmの幅をもち、方形をなすらしい。床面からは柱穴を8例検出した。

3月17日 朝日新聞記者のため写真撮影を手伝ってから朝食。昨日までに露出させた列石土堤を掃除し、住居跡のセクションを計測する。住居跡の写真撮影を行なう。午後おそく東側の列石を少し拡張して調べたところ、ここでは列石土堤が存在していることが判った。なお、南方の別地点の貝塚を約1坪発掘し、ほぼ同時期の土器、骨針、磨製石斧を得た。

3月18日 朝再度住居跡東側土堤の中央部を一部拡張して、列石の存在を確認しこれをもって発掘調査を終了した。

発掘調査参加者

明治大学考古学研究室 教授 後藤守一 助教授 杉原莊介 学生 芹沢長介 大塚初重
岡本勇 岩月康典 吉崎昌一

科学朝日記者 白崎俊次

藤枝高等学校郷土研究部 教諭 岡部良三 生徒 杉山富士夫 向坂鋼二 内田作造 石川
昭一 海野宣次郎 佐野 明 岡田恭順 杉山芳武

静岡市立高等学校 生徒 瀬古 巖

掛川西高等学校 生徒 小島玲子 青木わか 八木たき

第3節 住居跡

床面が地表下30～40cmにあり、中央部に石囲いの炉が作られていた。炉跡は長径70cm、短径50cmのやや大きな土痕状をなし、床面からの深さは20cm前後を測る。この周りに大小の円碑を据えてあったが、全周しない。まだ炉跡中北寄りに偏して大きな柱穴状のピットが掘り込まれていた(図版Ⅷ)。

床面は水平でなく、中央部が若干低い。炉跡を中心として、1.3～2mの範囲に6箇の柱穴(径20～30cm)がめぐる。これらは相互に1.5mほどのほぼ等間隔に並ぶが、西側だけは2.3mと間隔が開いておりここには、炉跡から2.5mの位置に別に2箇の柱穴があった。

炉跡の中心から2.5mほどの位置から、礫群が発見された。調査日記に列石と記されたものである。礫群は円礫と角礫が混じり、北辺と東辺では密集度が高く、1~1.5mの幅の礫堤を呈していた。これに反して、西辺ではまばらであり、南辺では密集度が低く、いずれも礫堤と呼び得る状況ではない。このように、かならずしも整然としていたわけではないが、全体としてみた場合、円形というよりも、隅丸方形、さらにいえば、西辺の短い台形を呈するといえるであろう。この場合、床面は南北4.7m、東西5.1mとなる。

この礫堤と呼ばれたものは、床面から約25cmの高さを保ち、その外縁つまり住居跡の外側の高さは、床面よりもわずかに高い（実測図に8cmと記載あり）程度であった。このことから、本住居跡は、平地式住居に含められるべきものとされたのである（図版II）。

第4節 層位

発掘地点は、平坦にならされた畑であるが、地形全体としてはゆるやかに南へ傾斜している。挿図第7のb-b'断面によると、北では地表下20cm、南では30cmの表土下に貝層がある。貝層の厚さは20cmをこえない。貝層は南へ向いゆるやかに傾斜していることがわかる。

貝層の拡がり、東から西へ向って狭まり、炉跡の西約1m位で終わっていたのに対し、東側では住居跡の外側へ及んでいた。

貝層の下には有機土層が続き、基盤の黄褐色泥礫粘土層で終る（図版III）。

貝層を構成する貝は、その95%以上がシジミである。他はハマグリ、カキ、キサゴ、アカニシ、ベンケイガイ、アカガイ、ウミミナ、ミルタイそれにマイマイを含んでいるが、これらは、いずれも数例を検出したにとどまる。獣類では、イノシシとシカの骨片の量がおびただしく、貝層の貝の量に匹敵する位である。他にイヌ？、テン？および種不明の海獣骨が検出されている。魚骨も比較的多量に検出されたが、いずれも細片であり、種が識別できたのはタイとスズキのみであった。また鳥骨（肢骨）の細片も1例認められた。

第5節 出土土器（図版第XVI 挿図第8・9）

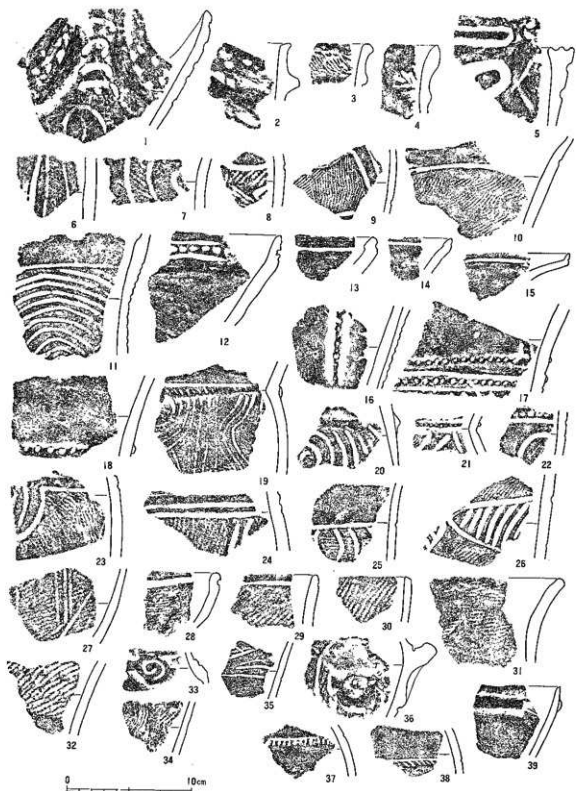
土器はすべて破片であり、その数およそ千数百片を数える。器形は、深鉢、鉢、注口および皿形を呈し、この内深鉢形がもっとも多いようである。把手のつく土器もみられる。底部には、木葉および網代の圧痕を残す例が多い。ほとんど無文であるが、有文土器についてみると、文様の要素は、縄文、有刺隆起紐、沈線、条線、刺突等であり、これらによって磨消縄文、溝文、波状文、平行文、同心円弧文、羽状文、三角文等を表現している。

有文土器は、次のように8類に分けることができる。

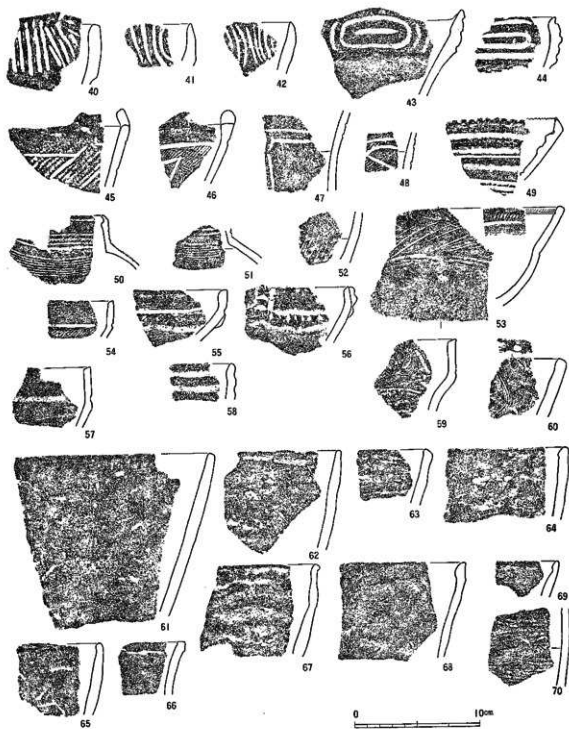
A類（挿図第8-1~10） 1と2は波状口縁の口唇部に刺突列を加え、波頂部下に冑状の沈

* この住居跡の写真は、中央公論社の『図説日本歴史1 日本文化のあけぼの（昭和35年刊）』にはじめて紹介された。

** はじめに記したように、本稿はできるだけ、原記録と岡本氏の概観に基づいて記述したが、土器の分類については、向坂の方法によった。



插图第 8 昭和26年度出土土器拓影(1)



挿圖第9 昭和26年度出土土拓器影(2)

線文を施す。3・4は刺突のかわりに斜線が施される。5は口唇端面を含めて太い沈線を施す。以上は縄文を欠くが、6~10は磨消縄文が施されている。沈線は概して太い。

1・2は、出土層位が異なるが同一個体とみられる。岡山県ケンギョウダ遺跡(間壁1967)と同じ型式のものがあつて、中津式の組成の一部をなすことが分かる。類例は愛知県林ノ峰貝塚(山下1975)等にも認められる。6~10は文様全体の姿を把み切れないが、中津式もしくは称名寺式の段階とみてよいだろう。以上によりA類を後期初頭に置く。

B類(押図第8—11~39) 11は、外反する鉢形の胴部に渦文もしくは同心円文を施す。12~15の口縁部は、16~25・27のような頸部でくびれる深鉢形土器と同じ器形の口縁部破片とみられる。頸部には突帯をめぐらし、これに刻みを加える。また刻みを付けない例(20)や突帯を欠く例(22・24・25)もある。胴部の文様は、垂下条線や同心円もしくは渦巻等で構成される磨消縄文である。28~32は、地文に縄文を施す単純口縁の深鉢形土器で、28・29では口縁に沈線をめぐらす。33は注口土器らしい。34は櫛状器具による縦位の波文を施す。

11は、器形と施文部位(胴下半)からみると、堀之内Ⅱ式的ではあるが、出土層位は、住居跡床面出土となっている。12~25・27~33は、堀之内Ⅰ式土器とよく似ている。堀之内Ⅰ式土器には新古の差があるようで、今村啓爾氏は称名寺土器論の中でそのことにつき論じている(今村1977)。

私もその点が気になっていたが、最近若干そのことに触れた(向坂他1982)。また堀之内式をめぐってシンポジウムも開かれていた(市川市博1982)。堀之内式土器も、わかっているようで、案外不明な点が多いようである。私の考えでは12は古相としてA類の段階に含めたい。同様に34も古相とする。なお26・35~39は、層位的にみて一括したが、私にはよくわからない。

C類(押図第9—40~44) いわゆる縁帯文土器の仲間である。44はやや趣が異なるがここに含める。いずれも口縁部外面に施文している。40~42は彦崎KⅠ式に、43は津雲A式にそれぞれ一脈通ずる所がある。

この種の縁帯文土器と関東系の諸型式との対比については、古くから津雲A一堀之内Ⅰというように考えられてきた。私は蜷塚遺跡での土器群のあり方の中から、津雲A一堀之内Ⅱもしくは加曾利BⅠという関係を主張し(長田・向坂1961)、最近でもその考え方で磐田郡佐久間町半場遺跡出土土器をまとめた(向坂1982)。しかし、これには今村啓爾氏の有力な見解(今村1981)もあるので、今後なお充分な検討を加える必要があろう。

D類(押図第9—45~48) 三角の区画をなす磨消縄文を施した鉢形土器で、例は少ない。口縁下の有刻突帯を欠くが、堀之内Ⅱ式土器とよく類似する。

E類(押図第9—49~51) 49は浅鉢形を呈し、口唇に刻み、内面に刺突列、突帯、沈線、刻み列等を加える。50・51は注口土器とみられ、器面を平滑にヘラ研磨して、横帯沈線文を施す。これらは、加曾利BⅠ式土器の移入品とみられる。

F類(押図第9—52~56) 53は、鋤に似た鉢形をなし、口縁に近く羽状文をめぐらし、口縁内面に沈線で区画した縄文帯を施す。52は羽状文を施す小片。54~56は字状に口縁を内曲させた深鉢形土器で、54・55では屈曲部に沈線と縄文を、56では有刻突帯を施す。

52・53は、加曾利BⅡ式土器あたりに共通する器形・文様要素を持っているが、54～56は、蛸塚遺跡の調査によって、その存在が注目された土器である（浜松市教委1957）。関西方面で、一乗寺KI式とか元住吉山Ⅱ式と呼ばれているものに共通性が認められる。

G類（挿図第9—57・58）口縁を内曲させる点ではF類と同じであるが、沈線が太くて浅い点、縄文や突帯が欠く点などが違う。沈線はおそらく巻貝で施し、指頭で再度なで回したもののらしい。こうした巻貝による沈線土器は、いうまでもなく関西方面に分布の中心があり、巻貝施文のあと指頭で再度なで回すのは、元住吉山Ⅱ式の特徴といわれている。後期末頃の型式といえよう。

H類（挿図第9—59・60）59は、F・G類と同じ器形の口縁部に櫛状器具による波状文を施し、60は単純な鉢形土器に同じような櫛描波状文を縦位に施す。

こうした櫛描手法は、東海地方の後期末から晩期前葉にかけて、よく使われている。後期と晩期をこの種の土器で峻別することはむずかしいが、伴出例の中に晩期前葉の土器が含まれていない点を重くみれば、この2点は後期に含めて置く方が穏当であろう。

以上の有文土器に対して、圧倒的多数の無文土器があるが、その中の10点だけが記録されているので61～70に示す。いずれも単純な深鉢形を呈する。61～67ではへら削りの痕（62）や指頭による整形痕（63・67）が認められる。一般的にいって61～65・67のように、やや内彎ぎみが多く、66のような外反例は少ない。以上を無文土器a類としよう。

68・69は、外面をきれいに調整しており、68では口唇を内面に肥厚させ、69では内面に太い凹線をめぐらしている。これらを無文土器b類とする。

70は、1片にすぎないが二枚貝によって器面調整が行なわれている。これは二枚貝による条痕文とも称するが、この条痕は施文とはいえないので、一応無文土器c類とする。この1片だけは、晩期の可能性が高い。

以上は、層位関係を無視した型式分類であるが、次に出土層位を明確にしておこう。

表土層……8, 14, 16, 25, 29, 31, 33, 41, 45, 50, 52, 53, 63, 64, 66, 68

貝層……2～5, 12, 13, 15, 17, 18, 21～24, 26～28, 30, 32, 35, 36, 42～44,

46～49, 51, 55～60, 65, 67, 69, 70

貝層下（有機土層）……6, 19, 40, 61

床（住居跡床面）……1, 7, 10, 11, 20, 34, 37～39, 54, 62

層位不明……9

これによると、型式と層位は明確な対応関係を示していないことがわかる。しかし、床面から貝層下においては、A類が主体を占めるようであり、貝層ではB類が主体を占め、C～F類がそれぞれ少しずつ加わり、G・H類がわずかに含まれるという傾向は把握することができる。また、表土層の中に、E・F類がみられる点は無視できない点で、耕作土と貝層の間に、本来後期後葉以降の包含層が存在していた可能性は充分考えられるであろう。したがって層位の面からは、A類→B～D類→E～H類というような型式推移の関係を、おおよそ主張し得るのではなかろうか。

第6節 その他の人工遺物

発掘調査によって得た土器以外の人工遺物は次のとおりである。

比較的小形の扁平な礫を磨きあげた磨製石斧1点、黒曜石製石鏃3点、つまみの部分を残す横形らしい石匙破片1点、石皿破片1点、扁平な円礫の周囲に使用痕を残す磨石1点、自然礫の両面に1～2の小さい凹みのある凹み石3点、石棒破片1点、それに楕円形扁平の円礫の両端を打ち欠いた石鏃28点。

骨針が3点あるが完形ではない。内1点には頭部に装飾的な彫刻がある。鹿の四肢骨をさいてその先端を研いだ筈状骨器が2点ある。貫通孔をもつ骨器の破片が1点ある。貝輪は5点検出したが、いずれも破片である。ベンケイガイとアカガイ？を利用している。多くは未成品らしい。他に加工の認められる骨と角の破片が3点ある。

以上の他、土器片を矩形に整え、両端に糸かけを作った土器片鏃が4点出土している。

第7節 調査結果に関連して

昭和26年度の大畑遺跡の発掘調査は、ほぼ以上のようなものであった。当時においては、礫堀をめぐらした縄文時代後期の平地式住居跡が発見されたことによって、調査成果は充分にあったというものの、当初目論んだ晩期条痕文土器の編年の研究という目的からすれば、期待はずれという結果に終わったことになった。しかし、現在の時点で、この調査成果を評価すれば、その意義はひじょうに大きいというべきである。

第1点は、何といっても遠江地方では最初の確かな住居跡の検出であったということである。かつて磐田郡佐久間町半場遺跡で、敷石住居跡といわれた遺構が発見されていたが、これは、配石遺構というべきものであったらしい（堀田・川合1935 佐久間町1972）。したがって大畑遺跡の住居跡が、確実な第1号であった。そしてその住居跡が、平地式であり、しかも礫堀をめぐらしたものであったことが、縄文時代住居跡に新例を加えることになったと同時に、その地域性が新たな課題として提起されることにもなった。清水市天王山遺跡で礫堀をもつ平地式住居跡が検出され（和島他1960）、浜松市蜷塚遺跡で平地式の住居跡群が調査されて（内藤1962他）、この地域の後期～晩期の住居のあり方が論議された際の原点になった ことはいまでもない。

第2点は、貝塚の確認ということである。従来遠江の貝塚としては、蜷塚遺跡と磐田原南部の磐田市西貝塚、石原貝塚、見性寺貝塚等が知られていたが、ここに新たに小規模ながら貝塚が確認された。このことによって、この地域の縄文時代における沿岸漁業のあり方を追求する情報量が、一段と増大したことになった。この成果が、その後の研究に活用されたことはい

* さきに表面採集で石鏃の多いことを述べておいたが、次いで多いのは石鏃である。また小形の定角式磨製石斧が多い点も注目される。なお土器以外の遺物については、現物に当たれなかったので岡本勇氏の草稿を参考にさせていただいた。

** ここで骨針とされているものの中には、鉾先と考えられるものが含まれている。

*** ちなみに、この遺跡は、東海地方最東端に位置する縄文時代貝塚である。

うまでもない(市原1967他)。

第3点は、土器の編年の研究に寄与した点である。この調査によって、大畑Ⅰ式、大畑Ⅱ式という後期前半の2つの型式が設定されて、その内容がきわめて関東的であることが指摘された(岡本1955)。その後、蛭塚遺跡や石原貝塚の調査(市原1967)によって、その内容は再確認され、理解は一層深められたのである(向坂1970)。今日では、蛭塚遺跡の名に押されて、大畑Ⅰ式、同Ⅱ式の名は、忘れ去られようとしているが、遠江における縄文土器の編年研究において、一時期を画したものであったことは、永く記憶されてしかるべきである。

こうした、積極的な意義とは別に、現時点で再検討を要することもある。概観(岡本1955)によれば、貝層下および住居跡床面出土の土器を大畑Ⅰ式、貝層から発見される土器を大畑Ⅱ式と命名し、「大畑Ⅰ式は関東の堀之内Ⅰ式と、大畑Ⅱ式は加曾利BⅠ式と、相互に共通のメルクマールのあることが指摘できる」とされた。しかしながら、出土土器の項で述べたように、貝層下と住居跡床面出土の資料は総量が少ないうえ、型式的特徴にしてもA類とした中津式もしくは称名寺式に類似する例が目立つ。また貝層出土の資料には、確かに加曾利BⅠ式土器(移入品か)もあるが、その数はきわめて少なく、堀之内Ⅰ式(新相)に類似する例(B類)が過半を占め、堀之内Ⅱ式相当の資料や加曾利BⅡ式段階のものまで含んでいる。こうした状況からすれば、大畑Ⅰ式は中津式もしくは称名寺式に、大畑Ⅱ式を堀之内Ⅰ式に対比させなければならない。この点を確立するために今回この報告をまとめるに当たり、再度原資料に当たったのであるが、止むを得ない事情で果せなかった。この点については、ここで結論を出すのを差し控え、再検討の必要なことだけを指摘するにとどめたい。

参 考 文 献

- 今村啓爾 1977年 「称名寺式土器の研究」 『考古学雑誌』63巻1・2号
- 向坂鋼二・栗野克己・平賀孝晴 1982年 「半場遺跡1978年度発掘調査報告書」 磐田郡佐久間町教育委員会
- 市川考古博物館 1982年 「シンポジウム堀之内式土器資料集」
- 長田実・向坂鋼二 1961年 「第三貝塚区域の発掘調査」 『蛭塚遺跡—その第四次発掘調査—』
- 今村啓爾 1981年 「柳沢清一氏の「称名寺式土器論」を批判する」 『古代』71
- 浜松市教育委員会 1957年 「蛭塚遺跡—その第一次発掘調査—」
- 堀田美悠男・川合治策 1935年 「磐田郡佐久間村大字半場字上皆外石器時代遺蹟調査」 『静岡県史蹟名勝天然記念物調査報告第十集』
- 佐久間町役場 1972年 「佐久間町史上巻」
- 和島誠一・市原寿文他 1960年 「清水天王山遺跡」
- 内藤 晃 1962年 「住居」 『蛭塚遺跡—総括編—』
- 市原寿文 1967年 「遠江石原貝塚の研究」 『静岡大学人文学部人文論集』18
- 岡本 勇 1955年 「静岡県小笠郡大畑遺跡」 『日本考古学年報』4

向坂綱二 1970年 「原始時代郷土の生活圖」『郷土史研究と考古学』

間壁忠彦・間壁霞子 1967年 「岡山県昭和町日羽ケンギョウ田（建行田）遺跡」『倉敷考古館研究集報』3

山下勝年 1975年 「愛知県南知多町内海林ノ峰貝塚試掘概報」『古代学研究』77

第6章 昭和52年度の発掘調査

昭和52(1977)年度の発掘調査は、遺跡範囲内の数地点において、茶の改植に伴う土壌改良が計画されたため、作業の開始に先だって発掘調査を実施した。調査体制については、本篇第2章にのべられているので省略する。発掘調査は、昭和52年12月20日～28日と昭和53年3月1日～13日の2回に分けて合計21日間にわたって実施した。

発掘した地点(挿図第2)は、A15, A16, B15, B16の4グリッド内に1辺2mの小区画を5ヶ所、G2-a4・a5の2小区画、C6-a5・c5・e5の3小区画、D6-b4・b5・c3・c4・c5・d4・d5・e4・e5, E6-a4・a5・b4・b5・c4・c5・d4・d5・e4(4のみ)・e5の各小区画を発掘した。発掘範囲は合計113m²である。

そのうち、G2-a4・a5小区画の範囲においては、若干の遺物が第3層とよんだ暗黄褐色粘土層表面に面をなして分布するにとどまり、遺物包含層に相当する土層は堆積していないことを確認した。検土杖を使ったボーリングによって、同じ現象がF1～F3, G1～G3, H1～H3グリッドの全体において確認できたので、G2-a4・a5小区画の発掘範囲を拡張することはしなかった。

以上の知見から、この範囲が遺跡の範囲に含まれることは明らかであるが、遺跡の主体的な部分をはずれた地域と判断された。

A15, A16, B15, B16グリッド中に、5ヶ所の小区画を設定したのであるが、いずれにおいても、現在の表土層に相当する覆土層が、遺跡基盤層に相当する黄褐色粘土層上に接して堆積し、両層の間に遺物包含層その他の土層を認めることはできなかったので、5小区画の範囲を拡張することは中止した。

要するに、A15, A16, B15, B16グリッドの範囲は、遺跡の範囲外であることが確認できた。

当年度発掘調査の主体的範囲は、C6, D6, E6グリッド内であった。その内C6グリッドにおいては、a5・c5・e5の3小区画を発掘している。

そのうち、C6-a5小区画においては、遺跡基盤層の砂礫混り黄褐色粘土層(第5層)表面を被覆する暗褐色土層(第4層)表面から小ピット4が掘りこまれ、ピット中には少量の縄文土器細片・炭化物片などを含む黒褐色土がいずれにも充填しており、ピットが縄文時代のものであることは明瞭であったが、その性格は不明であった。しかし、第4層上には、遺物包含層である第3層・暗褐色土層の堆積がみられなかった。

遺物包含層＝第3層の堆積は、C6-c5小区画においてはみることができた。ここでは、第4層表面から掘りこまれ、中に黒褐色土層のつまった径58cmの浅いピットがみとめられた。このピットは言うまでもなく縄文時代の遺構であるが、a5小区画内における同じように、遺物包含層の堆積は本区画内にもみられなかった。

C6グリッド内で、第4層上に遺物包含層＝暗褐色土層＝第3層の堆積がみとめられたのはe5小区画内である。この部分での包含層の厚さは薄く、包含層中あるいは直下に遺構はみと

められなかった。

包含層も厚く、埋葬人骨を含む各種遺構などが発見されたのは、D6-b4・b5・c3・c4・c5・d4・d5・e4・e5、E6-a4・a5・b4・b5・c4・c5・d4・d5・e4 小区画の範囲である。西側に突出するD6-c3 小区画以外は、東西4m、南北17mの範囲に続いた発掘範囲である。この範囲においては、遺跡基盤の第5層＝砂礫混り黄褐色粘土層表面が北から南に向ってゆるく傾斜しているが、包含層＝第3層は基盤表面の比高が高い北側（D6-b4・b5）では薄く、その比高が低い南側に厚く堆積している（市原1978の挿図第6参照）。

きわだった事実として指摘できる点は、各小区画を平面的に掘り進めたところ、包含層中にA面～F面とよんだ6面の先史地表面を確認しえたことであろう。第3層は厚いところでも30数cm、薄いところでは10数cmであり、その間に5～6cmの上下間隔で各面が検出されるのであるから、検出作業は細心の注意が要求された。しかし、部分的にこれを検出できないくらい保存状態の悪い範囲のあったことも否定できない。

各面においては、土器片・石器・礫・獣骨片などが散乱しており、これを手がかりとして面の追跡を行なった。その結果各面に「住居跡状遺構」（A面、D6-e4・e5、E6-a4・a5・b4・b5（市原1978の挿図第8参照）、柱穴状ピット、円形の浅いピット、楕円形プランのピット、礫群ピット、埋葬人骨（市原1978）などが施設され、あるいは掘りこまれているのを確認することができた。

出土遺物のうち土器は、中期末から後期後葉にかけてのものが採集された。

そのうち、中期末の土器はG2-a4・a5、D6-d4、E6-a3 各小区画の砂礫混り黄褐色粘土層＝第5層表面に臨着した状態で数片が発見された。

後期の土器の中には、堀之内Ⅰ式に併行すると思われる土器（D6・E6グリッドの3層D面より出土した土器。市原1978の挿図第14～19～23の資料）は、D6・E6グリッドの3層B面まで及んでいる（同 挿図第15）。一方、同グリッド3層B面やA面の主体をなす土器は、同挿図にあげているような堀之内Ⅱ式土器以後、後期中葉にかけての土器にと主体が交代していくのがわかる。

第2・3・4号人骨や礫群ピットから検出された土器には、時期の判別に適した資料がないのであるが（市原1978の挿図第17～107～112・122）、後期中葉より新らしくなる資料はないように思われる。

「住居跡状遺構」及びその周辺出土の土器（市原1978の挿図第15～40～48）は、堀之内Ⅱ式土器併行期の特徴がみとめられる資料であるが、これは直接「住居跡状遺構」の時期を示す資料とは考えられない。この遺構自体の古さは、後期後葉に属するものと思われる。

その他、出土土器からいえることは、後期後葉の宮滝式に併行する時期のものが、ピット18

* 先史地表面にみられた同じような現象は、蛭塚遺跡の一連の発掘調査において確認された現象と同じである。蛭塚遺跡においては平地住居跡そのものの重複関係は確認できたのであるが、住居跡外の先史地表面の重複関係の確認は行われていない（蛭塚遺跡における住居跡の重複関係については、内藤・市原1960等参照）。

などから検出されているが晩期の資料はほとんど見られなかった。土器全体の観察結果については、『1977年度報告書』の「5」を参照されたい。

以上が、昭和52年度発掘結果の概要であるが、次の諸点をあげることができると思われる。

出土土器は、若干の中期末葉のものを最古とし、ほぼ後期全体に及んでいるが、加曾利BⅠ式土器に併行するものや、後期終末の土器はほとんどみることはいえない。

遺跡の構造に関しては、第3層＝遺物包含層中に重複して検出された6面の先史地表面の確認は、重要な知見ということができよう。しかし、先史地表面の上下関係と、土器型式の新旧関係とは、必ずしも整合的に一致しているとはいえない。わずか、10～30cmの包含層中に次々と遺構が掘りこまれていくのであるから、下位の遺物が上位に転位したとしても当然の現象と思われる。

発掘範囲の北から南にかけて、5体の埋葬人骨と、埋葬が行なわれたと思われるピット（D6-d4 A面）が検出されている。東西4～6m、南北17mの範囲で5体以上の埋葬例の存在は、分布密度の高い検出例ということができよう。おそらく、発掘範囲が集落の墓域に遭遇したためと思われる。

完全な住居跡を検出することはできなかったのであるが、「住居跡状遺構」の存在およびその後の調査において確認された平地、堅穴両住居跡などを総合して、大畑遺跡が墓域を伴う縄文集落であることは否定しえないと思われた。

（市原寿文）

参 考 文 献

岡本 勇 1955年 「静岡県小笠郡大畑遺跡」 日本考古学協会編『日本考古学年報一昭和26年度』

市原寿文編 1978年 『袋井市大畑遺跡—1977年度の発掘調査—』 袋井市教育委員会

内藤晃・市原寿文 1960年 「第二 第一貝塚南部区域の発掘調査」 後藤守一代理編集委員会編『親塚遺跡—その第三次発掘調査—』 浜松市教育委員会

第7章 昭和53年度の発掘調査

昭和53(1978)年度発掘調査の体制については、すでに本篇第2章にのべられているので省略する。本調査は、2つの作業を計画した調査である。一つは昭和52年度の継続として西接するD6-c2・d2・d3・e2・e3、E6-a2・a3の7小区画、35m²の発掘である。この発掘調査においては、昭和52年度発掘において全容を確認できなかったピットなどを完掘することと、今一つは第3層=遺物包含層中に挟在するのが確認されたA~F面の先史地表面(市原1978)を、隣接地域で再確認することを意図した。

第2には、遺跡のほとんど全域が茶畑によって覆われているために、74地点においてハンド・オーガを使ったボーリングを行ない、遺物包含層の分布=遺跡の範囲確認の作業を行なった。

発掘調査は昭和53年12月24日~29日と昭和54年3月10日~25日の2回にわたって、合計21日間実施し、ボーリング調査は昭和53年11月11・12・19・20日の4日間行なった。

発掘範囲の層序は昭和52年度の結果と全く同じであり、上表部より覆土層(表土層)→暗褐色土層(第1層・耕作土)→暗褐色土層(第2層)→暗褐色土層(第3層・遺物遺構包含層)→暗黄褐色粘土層(第4層・薄層で無遺物層・洪積漸移層)→砂礫混り黄褐色粘土層(第5層・洪積層・遺跡基盤層)の順に地積する。

第3層の暗褐色土層・遺物遺構包含層中に昭和52年度に、東接する発掘区画において確認したA~Fの6面が連続して続き、各面からピット等の遺構が掘りこまれている状態を追認することができた。ピット等の各遺構内を埋める土層は、昭和52年度調査の場合と同じ有機物を多く含む黒褐色土である。

遺物遺構包含層内の先史地表面で前回と異なる点は、G面を更に加えたことである。G面は第3層の下底面であり、第4層・暗黄褐色粘土層表面に相当する。昭和52年度発掘区画においては、遺跡基盤層表面に接して堆積する第4層・暗黄褐色粘土層があまりにも薄いという事実が確認されている。また本層表面に癒着して発見された若干の遺物、例えば縄文中期末葉の土器片などを、第5層・砂礫混り黄褐色粘土層表面に癒着する遺物として誤認し扱ったのを訂正することができた。今回、それを訂正することができたのは、第4層自体が数センチではあるが若干の厚みをもち、この面から柱穴状ピット等の遺構が掘りこまれているのを検出したこと、少量ではあるが土器片等の遺物を検出したからである。昭和52年度発掘調査において、第4層の存在を誤認するような事態にたち至ったかは、次のように説明することができる。

昭和52年度発掘範囲の遺跡基盤層表面の比高は最も高い部分であって、上表部の暗黄褐色土層は流失等の結果存在を誤認する程度の層厚しか遺存しなかったのに対して、昭和53年度発掘区画においては基盤層表面が数cm西、即ち井戸ヶ谷の侵食谷に向って低く傾斜しているために、第4層が薄くとも堆積することが可能だったのではないかとと思われる。

このことから、次の点を指摘することは許されよう。火焔遺跡において中期の縄文人達が生活の第一歩を印した時、遺跡の表面に堆積する腐食土の層厚は全体に薄く、部分的には第4層・暗黄褐色粘土層の薄層の堆積がみられ、ところによっては第5層・砂礫混り黄褐色粘土層が

露出しているような景観において生活が開始されたといえる。

各先史地表面から検出された遺構は次のようなものである。柱穴状ピット・44、円形の浅いピット・7、楕円形ピット・8である。相対的に、昭和52年度発掘区画における各種ピットの分布密度と大差ないといえる。ピットの分布状態で特に目立った特徴は、F面のD6-d3グリッドの北東隅とD6-e2グリッドの南西隅を結ぶ線上に、直列状態で柱穴状ピットが発見された。

またD6-c2・d2・e2小区画の西半部において、F面より掘りこまれた竪穴住居跡が検出された。(市原1978)この竪穴住居跡とF面の関係は、住居跡がF面を切断して営まれているのではなく、F面が覆った関係にある。

竪穴住居は、平面形で全体の外縁の範囲を発掘したのであるが、柱穴・壁溝・壁面の残存状態はきわめて良好であった。おそらく割張りの方形プランを全形とするのであろうが、壁溝中連弧文の付く土器胴部破片が検出された。縄文中期中葉に比定しうる資料であるが、竪穴住居の営まれた時期を示す資料である。

昭和53年度発掘の第3層中より検出された遺物は、コンテナに約4杯分であった。石鏃・石斧等若干の石器の他、大部分は土器片である。土器の時期は昭和52年度と同じく、縄文後期に属するものが大部分であった。

昭和53年度調査における今一つの結果は、ボーリング調査によって第3層＝暗褐色土層の分布範囲を明らかにしえたことである。

70数地点のボーリングによって確認したのであるが、第3層＝遺物包含層の分布範囲は南北約150m、東西約105m、の範囲に及んでいる。その範囲全面に第3層の分布がみられるのではなく、A1・A8グリッドを北西・北東の隅とし、K1・Q1グリッドを西北・西南の隅とし、その間を三ヶ月状に結ぶ範囲である。その最大幅は約90m、最小幅は約50m、遺跡西側の井戸ケ谷に向かって開く状態となっている。本篇の挿図第2に掲載された大畑遺跡地形図によって、B5・B6グリッドからQ-4、Q-3にかけての地形をみると、等高線の屈曲からこの部分の地表面に微高部分が脊状に続くのがわかる。ボーリング調査によって確認した遺物包含層の分布範囲は、この微高部分を中心として両側にほぼ均等の幅で広がっているのを知りうる。昭和55年度までの発掘調査は、本篇同挿図の地形でみると発掘区画がいずれも微高部分と一致し、またはその東西側に接して分布している。これら一連の調査結果と対比するならば、微高部分は現地表面にのみみられる現象ではなく、第5層＝遺跡基盤層表面の微高部分ともよく一致しているといえよう。大畑遺跡の集落は、平坦な段丘面上の微高部分、それも井戸ケ谷の谷地形に東接する地点を占位していることを、昭和53年度ボーリング調査の結果と対比して理解しうる。その北端は、小笠丘陵から尾根状に突出する小笠山丘陵末端に続く微高地に接して終るということが出来る。

(市原寿文)

参 考 文 献

市原寿文編 1978年 「袋井市大畑遺跡—1977年度の発掘調査—」 袋井市教育委員会

・以上の各種ピットの数量は、A～G各先史地表面よりそれぞれ検出された総量である。

第8章 昭和55年度の発掘調査

第1節 遺構

昭和55年度の発掘調査において検出された縄文時代の遺構は、住居跡—6ヶ所、埋葬人骨（土葬）—5体、溝状遺構—4ヶ所、地点貝塚—10数ヶ所、ピット状遺構などである。

調査の第一目的を遺跡全体の範囲を発掘によって確認することにおいたため、広範囲に設定されたグリッド内の調査が優先される結果となった。今回の調査で完掘しえた遺構は第1・6号住居跡のみであり、第3・4号住居跡のように遺構の全体的な把握を断念せざるをえなかったものもあるが、本篇に含めて報告している。また第1・2号人骨は保存良好なため土葬ごと切り上げることとし、取り上げ作業は昭和56年度に持ちこされた。

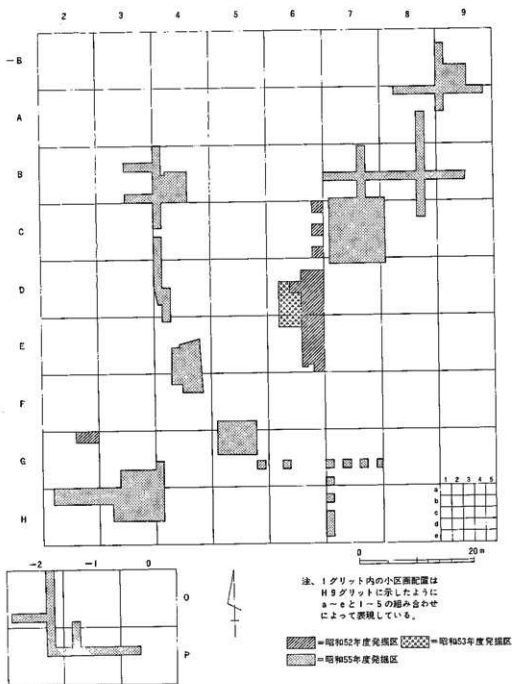
ここで昭和55年度の調査でもちいた大畑遺跡の基本層位について若干説明しておきたい。大畑遺跡の立地する丘陵では、地山となる砂礫混り黄褐色粘土層（洪積層）上に普遍的に3つの遺物包含層と表土層が堆積している。上層より列記すれば、第Ⅰ層＝暗褐色土層（表土＝耕作土）—第Ⅱ層（黒褐色土層）—第Ⅲa層（暗褐色土層）—第Ⅲb層（暗黄褐色土層＝洪積漸移層）—地山（遺跡基盤層）となり、第Ⅱ・Ⅲa・Ⅲb層が遺物包含層である。第Ⅱ層からは縄文時代中期後半から中世・近世におよぶ遺物が出土し、中世に属する遺構の覆土は必ずこの層を主体としている。第Ⅱ層より出土する縄文時代の遺物は、そのほとんどが後・晩期に属するものであり、中期後半の遺物はごくわずかである。第Ⅲa層には縄文時代以降の遺物を含まず、3つの包含層のなかでもっとも多量の遺物を出土する。時期は中期前葉より後、晩期におよぶが、中期後半が主体的であり、後期前半の遺物も比較的多い。今回の調査で検出された竪穴住居跡は第Ⅲa層によって覆われている。第Ⅲb層はいわゆる洪積層への漸移層であり遺物は少ない。中期前葉に属する遺物は第Ⅲb層あるいは第Ⅲb層直上から検出されるのが一般的である。第Ⅲb層を覆土とする遺構は検出されていない。

各土層とそれに包含される遺物を整理すれば、第Ⅰ層＝縄文時代～中近世～現代、第Ⅱ層＝縄文時代後・晩期～中近世、第Ⅲa層＝縄文時代中期後半～後期、第Ⅲb層＝縄文時代中期前葉、第Ⅳ層＝地山＝遺跡基盤層（無遺物）という傾向を一応指摘することができる。昭和52・53年度の調査において行なったような綿密な分層発掘を実施するだけの時間的余裕に恵まれなかったため、各包含層内をさらに細分している先史生活面の問題については昭和52年度の調査概報（市原1978）を参照いただきたい。出土層位からの遺物・遺構の編年の検討は今後の課題として残された。

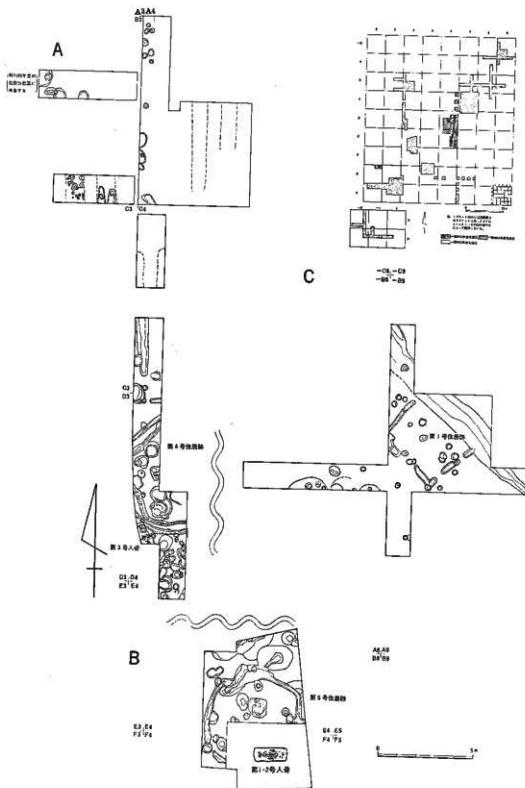
i 住居跡

第1号住居跡

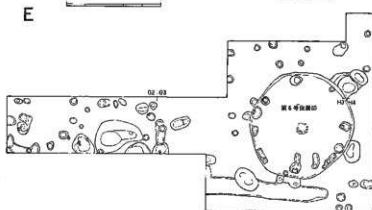
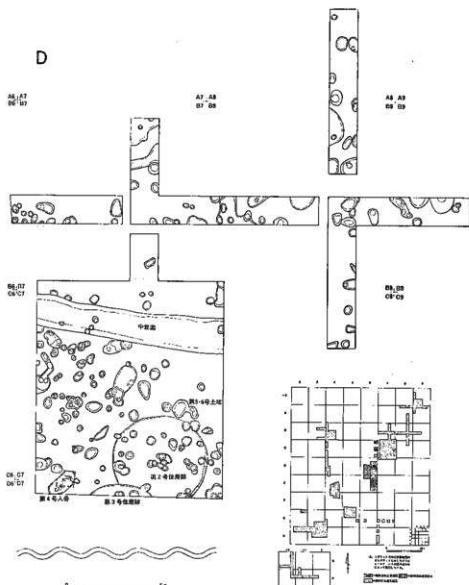
遺跡の北縁丘陵の裾部近くに位置し、多くの住居跡が遺跡内の北側にひろがる微高地周縁部（B3, C7, D4・6, E4グリッド）に位置していることと比べ、その立地条件を異にしている。



挿図第10 昭和55年度発掘区全体図

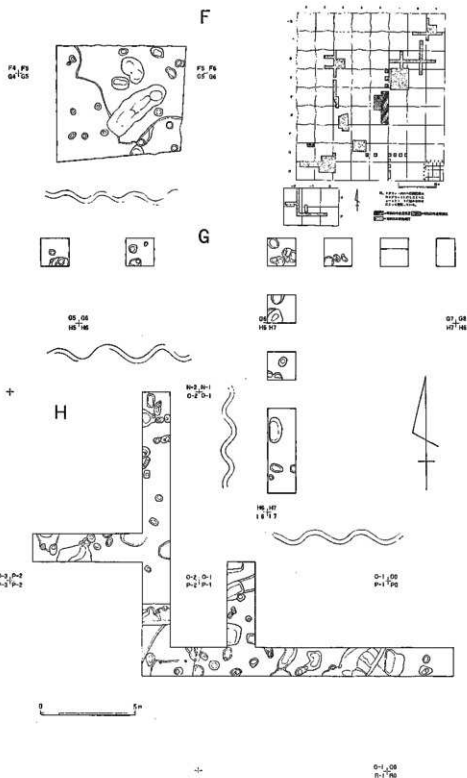


挿図第11 ㊦B3・4, C4, D4, E4グリッド平面実測図 ㊦E4, F4グリッド平面実測図
 ㊦B9, A8・9グリッド平面実測図
 (注 本挿図右上の図は、昭和55年度発掘区全体図であり、各発掘区とグリッドの位置関係を示す。)



挿図第12 ①A8, B7・8・9, C7・8, D7・8グリッド平面実測図
②G3・4, H2・3・4グリッド平面実測図

(注 本棒図右中央の図は、昭和55年度発掘区全体図であり、各発掘区とグリッドの位置関係を示す。)



挿図第13 ㊦F5, G5グリッド平面実測図 ㊦G5・6・7, H7グリッド平面実測図
 ㊦O-2・-1, P-2・-1・0グリッド平面実測図

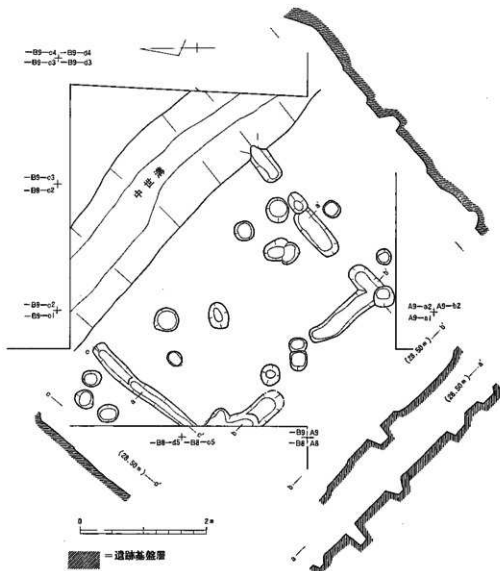
(注 本挿図右上の図は、昭和55年度発掘区全体図であり、各発掘区とグリッドの位置関係を示す。)

住居跡北東側が中世の溝状遺構（幅約1.5m）により切断されているが、コの字状にめぐる溝が確認でき、一辺約4mの方形プランを呈する建物であったと思われる。

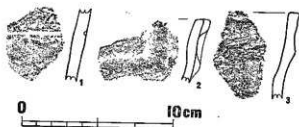
溝は幅23～35cm、遺構確認面からの深さ8～20cmを測り、断面はU形を呈する。溝内最下に第Ⅲa層の堆積が認められる所もあるが、基本的に第Ⅱ層を覆土とする。南東側に2ヶ所、南西、北西側でそれぞれ1ヶ所溝が途切れているが、南東、北西側の溝は浅く、立ちあがりも明瞭でない。南西側を除いて当初溝は連続していたものと考えたい。

柱穴は比較的浅く小さなもの（径22～28cm）が溝にそって外側に検出された。溝内側の柱穴は規模も大きく（径35～45cm）深くなる傾向を示し、配置は不規則である。

焼土、炉跡は検出されていない。



挿図第14 昭和55年度第1号住居跡実測図



挿図第15 昭和55年度第1号住居跡出土土器拓影

1=Ⅱ-d類土器 2=Ⅲ群土器 3=無文土器

溝が堅穴住居に伴う壁溝であった可能性もあるが、壁の残存は認められず、平地住居跡と考えるほうが自然である。

溝内、床面近くより出土した土器を挿図第15に示した。

一応挿図第15-2、3の土器をもって、縄文晩期初頭の住居跡と

考えている。

第2・3号住居跡

遺跡北側にひろがる微高地東縁部に位置し、東の浅い谷に面している。

両住居跡とも第Ⅲa層を主体的な覆土とし、第Ⅱ層の住居跡内への落ち込みは、第Ⅲa層上面においてもまったく認められなかった。遺構確認面は第Ⅲb層上面と深く、堅穴住居の礎は第2号住居跡において数cm残存するのみであった。両住居跡とも、覆土の堆積状態は堅穴住居が第Ⅲa層内のあるレベルより掘り込まれたことを示しているが、床面が地山まで達してはいなかった。

第3号住居跡は第2号住居跡を切断して建てられており、両住居跡の新旧関係を知ることができる。

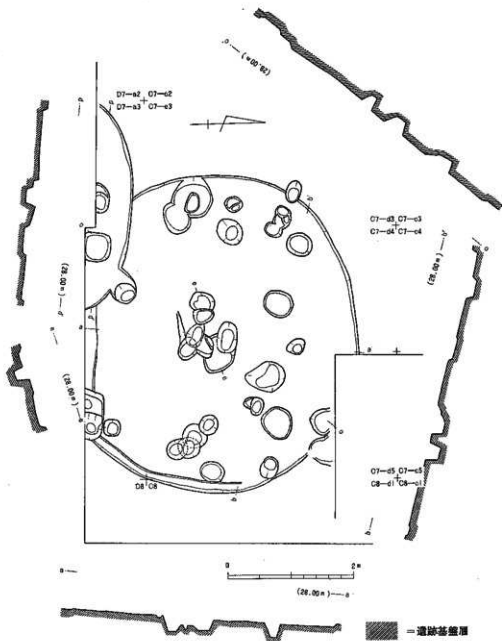
第2号住居跡は南側に未調査部分を残しているが、全形は径約5mの円形プランを呈すると思われる。

東側に一部地山を掘り込んだ壁溝が認められる。壁溝は幅14~20cm、深さ約3cmと浅く、北側ではしだいに不明瞭となる。壁にそってめぐっていた溝の一部が残存したものか、当初より壁溝を持たない住居跡であったかは確定できない。

柱穴状ピットが住居跡内に33ヶ所検出された。配置は不規則でありすべてが第2号住居跡に関連する柱穴とは思われない。壁に沿って掘られた柱穴は、東西側に4ヶ所ずつ認められるが、北側では欠落し、その規模、深さにも差がある。またやや内側に径40~50cmと若干規模の大きな柱穴状ピットが4ヶ所認められるが、やはり配置は不規則であり重複する柱穴もある。

住居跡の輪郭を確認した面(第Ⅲb層上面)より約5cm高いレベルに、焼礫の集中が認められた。この焼礫集中部は、第2号住居跡のほぼ中央に位置する。焼礫は16個あり、長径15~30cm、短径10~20cmの長楕円形を呈するものが使用されている。2から3に割れた礫も含まれていたが、火を受けた角礫や小礫は検出されなかった。割れた礫は割れた後火を受けており、礫面すべてに焼痕を有する礫より一側面に火を受けた礫が多い。焼礫の配置は雑然としているが、配石炉に使用された焼礫群と思われる。周辺部を慎重に調査したにもかかわらず焼土はまったく検出されなかった。焼礫集中部直下の床面は、多くのピットが複雑に重複したような状態でくぼんでいた。

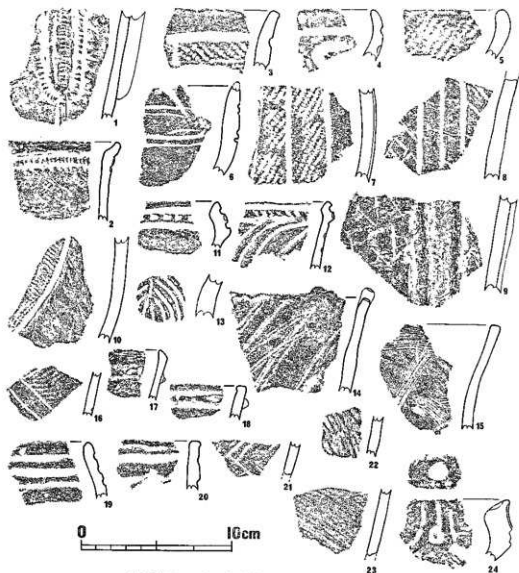
遺物は焼礫集中部と同レベルからの出土が顕著であり、床面完掘状態での出土は少ない。



挿図第16 昭和55年度第2・3号住居跡実測図

第3号住居跡はその一部を調査するにとどまった。全形は径約4mの円形プランを呈する竪穴住居跡と推定される。

前述したように両住居跡とも遺構確認面が深かったため、第3号住居跡に伴う遺物も調査開始当初、第2号住居跡の遺物として取り上げられた可能性がある。よって第2・3号住居跡出土土器を一括して挿図第17に示した。



挿図第17 昭和55年度第2・3号住居跡出土土器拓影

1・2＝Ⅰ-b類土器 3～7＝Ⅰ-f類土器 8・9＝Ⅰ-g類土器 10＝Ⅱ-a類土器
11～14・24＝Ⅱ-b類土器 15～18＝Ⅱ-c類土器 19・20＝Ⅱ-h類土器 21＝Ⅱ-j類土器
22・23＝Ⅱ-k類土器

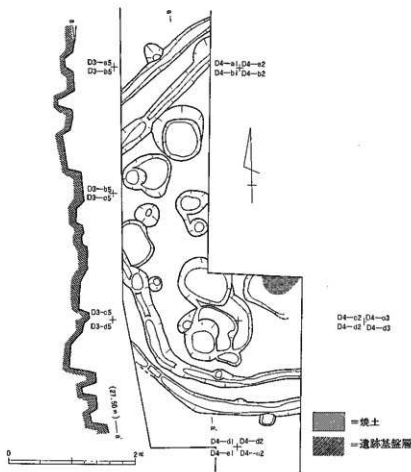
第2号住居跡は中期最末に、第3号住居跡は後期前半に属するものと考えている。

第4号住居跡

D4-a1, b1, c1・2, d1・2グリッドにおいて検出されたが、隣接する畑が栽培期であったため発掘範囲を拡張することができず、遺構の全体を把握することはできなかった。

第4号住居跡は第2・3号住居跡と同様敷高地周辺部に位置し、西の深い谷（井戸ヶ谷）に面している。

覆土は第Ⅲa層を主体とし、第Ⅱ層の遺構内への落ち込みは認められなかった。第Ⅲa層中



挿図第18 昭和55年度第4号住居跡実測図

から地山深くまで掘り込まれた竪穴住居跡である。

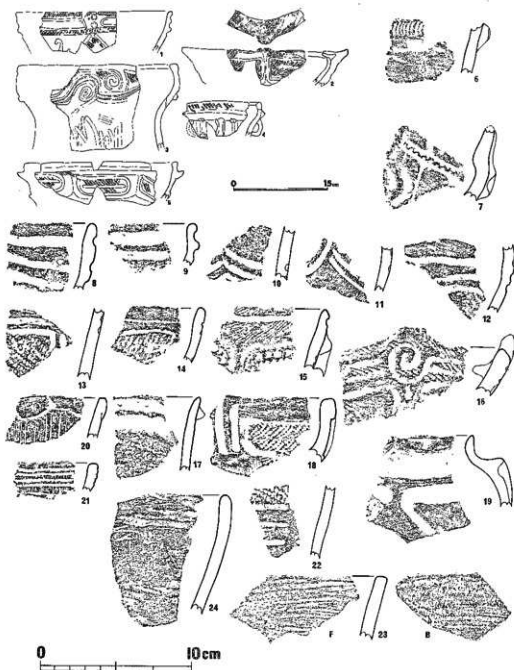
径約5～6mの円形プランを呈すると推定されるが、北側には2条の並行する壁溝が直線的にみられたのに対し、南西側の輪郭は明確な円弧をえがく。若干北東～南西方向に広がった楕円形プランを呈するとも考えられる。

壁溝は南北側ともに2条確認された。外側の溝は内側の溝に比べ幅がやや広く(25～30cm)浅い。断面L状を呈する。内側の溝も断面形態は同様であるが、幅が狭く(20～25cm)深く(21～24cm)まで掘り込まれている。外側および内側の壁溝は連続するものであろう。

柱穴は浅いが主柱穴と考えられるものが内側の壁溝にそって4ヶ所検出され、小規模な柱穴も配置は不規則であるが認められる。小柱穴のなかには内側の壁溝を切って掘られたものがあり、柱穴の重複も認められた。

住居跡中央、やや南寄りの地点(D4-c2グリット)で焼土(60×40×2cm)が検出されたが、付近に配石等は確認されなかった。

また床面の状態は不明である。



挿図第19 昭和55年度第4号住居跡出土土器実測図および拓影

1～5・12～19＝Ⅰ-f類土器 6＝Ⅰ-b類土器 7＝Ⅰ-c類土器 8～11＝Ⅰ-e類土器
20＝Ⅰ-g類土器 21＝Ⅰ-h類土器 22＝Ⅱ-d類土器 23＝Ⅱ-k類土器 24＝無文土器

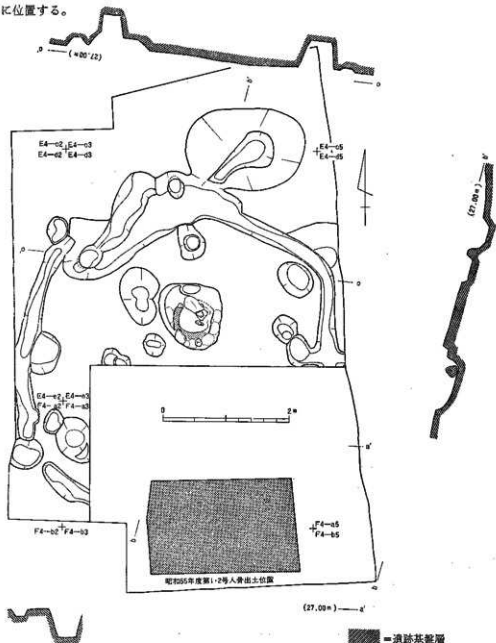
小柱穴と内側壁溝の重複、ほぼ並行する2条の壁溝の存在は、第4号住居跡が拡張、あるいは建て直された可能性のあることを指摘しうる。

遺物は床完掘面より約10cm高いレベルに顕著である。

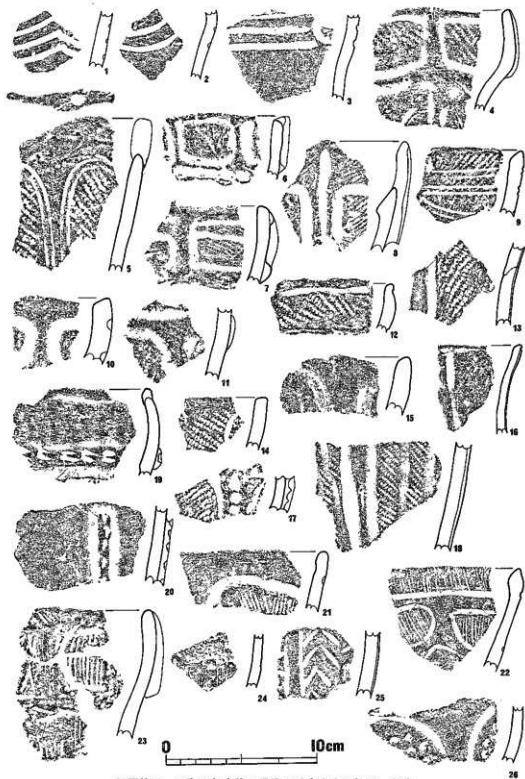
第4号住居跡出土土器を挿図第19に示した。中期最末期の住居跡と考えられる。

第5号住居跡

第2・3・4号住居跡に比べ、その立地するレベルは約25cm低く、微高地南裾の緩斜面地に位置する。

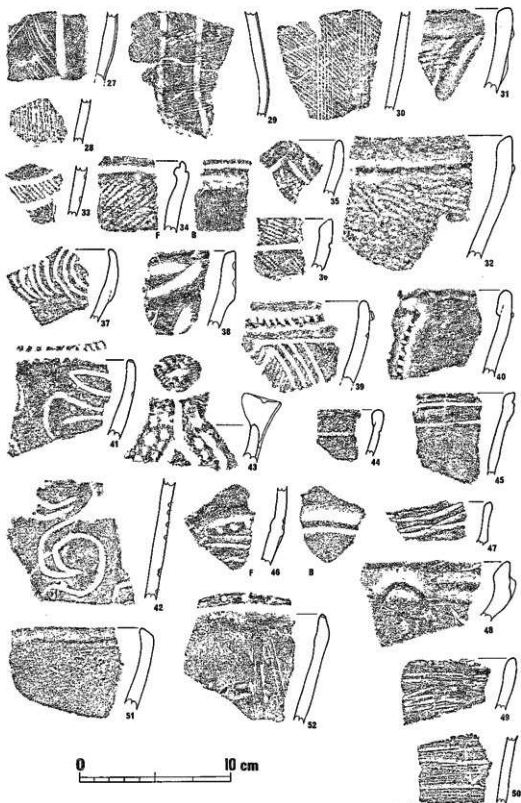


挿図第20 昭和55年度第5号住居跡実測図



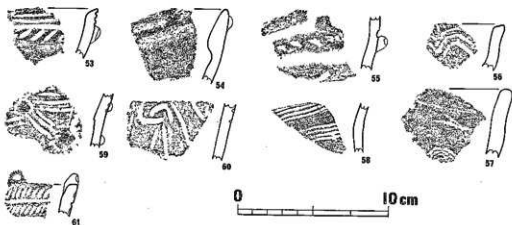
插图第21 昭和55年度第5号住居跡出土土器拓影 (1)

1~3=I-e類土器 4~20=I-f類土器 21~26=I-g類土器



挿図第22 昭和55年度第5号住居跡出土土器拓影 (2)

27~30=Ⅰ-g類土器 31・32=Ⅰ-j類土器 33=Ⅱ-a類土器 34~43=Ⅱ-b類土器
44~46=Ⅱ-e類土器 47・48=Ⅱ-h類土器 49・50=Ⅱ-k類土器 51・52=無文土器



挿図第23 昭和55年度第5号住居跡出土土器拓影 (3)

53~55=Ⅲ-a類土器 56~58=Ⅲ-b類土器 59・60=Ⅲ-d類土器 61=不明

住居跡南半が第1・2号人骨を伴う埋葬土壌と重複していたため、南半部の調査は昭和56年度にもちこされた。埋葬土壌の底面と住居跡床完掘面との間には、約30cmのレベル差があった。

覆土は第Ⅲa層を主体とし、第Ⅱ層の住居跡内への落ち込みは認められなかった。遺跡基盤層を約10cm掘り込んでいた。

第5号住居跡の平面プランは、三隅に若干のふくらみが認められるが、ほぼ径5.5mの円形を呈すると思われる。

壁溝の幅は比較的に広く(約30cm)、床完掘面からの深さ約15cmを測る。断面L状を呈する。北側の壁溝は、一部不定形に幅を増し(約85cm)、この部分では、溝内にさらに一段深く溝を掘り込んでいた。この部分で、壁溝は内方へ屈曲し西方へは連続しない。南西部でも一部壁溝が途切れる。

柱穴は壁溝にそった内側に5ヶ所検出された。壁溝増幅部の両端近く、溝内にも小規模な柱穴状ピットが2ヶ所確認され、北側のものは南方へ、南側のものは北東方へそれぞれ傾斜をもって掘られていた。

配石炉が住居跡中央、やや北寄りに検出された。配石炉には長径17~33cmの焼礫が3個残存するのみであったが、西南東側には焼土を囲む形で、明瞭な礫のぬき取り痕が認められた。当初、残存した礫とほぼ同規模の礫を使用し、配石炉を形づくっていたものと思われる。焼土は炉跡中央で厚さ4cmを測り、すり鉢状にへこんでいた。

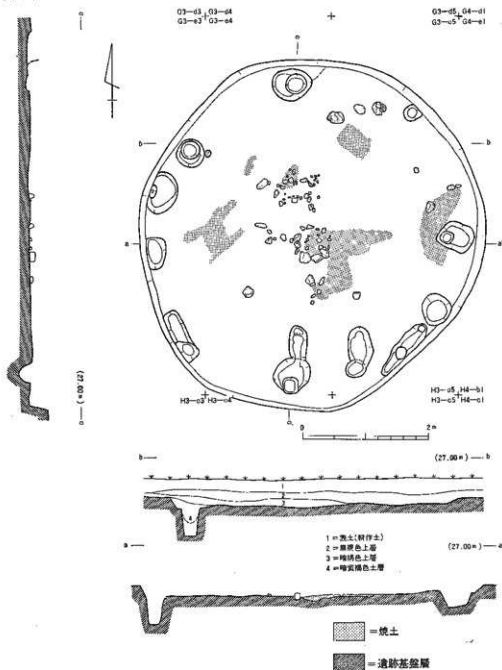
遺物は床の完掘面近くより検出された。本来の床面も完掘面とほぼ同じレベルに存在したものと思われる。

第6号住居跡出土土器を挿図第21~23に示した。挿図第21-22は残存した配石炉焼礫間より検出された口縁部片である。

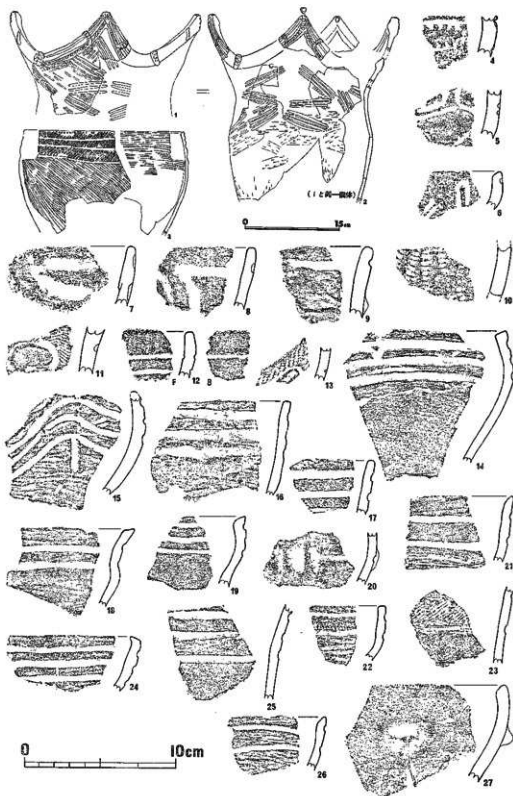
中期最末期の住居跡と考えられる。

第6号住居跡

第5号住居跡より南西方向に約25m離れた緩傾斜地に立地し、西の井戸ヶ谷に面している。覆土は大きく2層に分けることができる。上層には第Ⅱ層に類似する黒褐色土が住居跡中央で厚く、レンズ状に堆積し、下層は第ⅢA層が主体となる。柱穴内の覆土は住居跡内覆土に比べ黄色味が強い。第6号住居跡内に第Ⅱ層の落ち込みが確認されたことは、中期の住居跡群(第

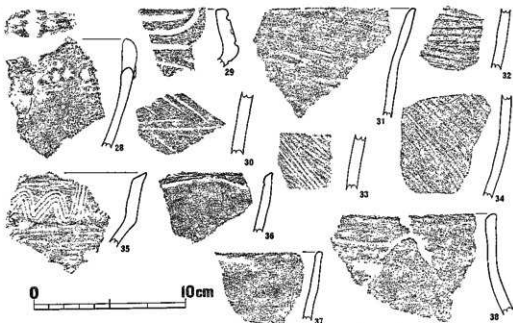


挿図第24 昭和55年度第6号住居跡実測図



押図第25 昭和55年度第6号住居跡出土土器実測図および拓影 (1)

1・2=Ⅱ-j類土器 3・24~27=Ⅱ-i類土器 4=Ⅰ-c類土器 5~9=Ⅰ-f類土器
10=Ⅰ-g類土器 11=Ⅱ-a類土器 12・13=Ⅱ-e類土器 14~23=Ⅱ-h類土器



挿図第26 昭和55年度第6号住居跡出土土器拓影（2）

28～30＝Ⅱ－j類土器 31～34＝Ⅱ－k類土器 35＝Ⅲ－b類土器 36～38＝無文土器

2・4・5号住居跡)の覆土に第Ⅱ層が認められなかったことと大きな相違を示している。

北東－南西方に若干ひろがる楕円形プラン（5.2m×5.5m）を呈する竪穴住居である。

壁溝は検出されなかった。

柱穴は壁にそって0.8～2.0m間隔で11ヶ所検出され、規模に大小が認められる。前者は径45～55cmを測り、後者は径25～30cmを測る。

炉は住居跡中央とやや北寄りに2ヶ所検出された。北寄りの炉は残存状態が悪く、薄い焼土と散乱する数個の焼礫が認められた程度であるが、中央の炉は配石炉の形状をよく残していた。南側に長径15～20cmの比較的大きな礫を3個直線約に配置し、他はやや規模の小さな不定形礫をもって囲いとしている。焼土は1.1×1.4mの範囲に認められ、東南側は配石外にもおよんでいた。炉中央で厚さ9cmを測る。

炉跡に伴う焼土の他、床面に3ヶ所焼土のひろがり認められた。焼土は炉跡に伴うものも含め、すべて同一レベルにおいて検出される。

炉を2カ所有する点、建て直しが行われた可能性もあるが、重複する柱穴は認められない。床面にひろがる不定形の焼土は、第6号住居跡が火災により廃棄された可能性も考えられるが、覆土中に炭化材等はまったく検出されなかった。

遺物は第Ⅲa層類似の覆土中より多量に検出された。

第7号住居跡出土土器を挿図第25・26に示した。

後期末葉に属する住居跡と考えられる。

ここで上述した各住居跡の覆土について、包含層（第Ⅱ・Ⅲa・Ⅲb層）と対比しながら、整理してみたい。

縄文時代から中近世におよぶ遺物包含層と考えた第Ⅱ層（暗褐色土）は、晩期初頭に位置づけられた第1号住居跡の溝、および後期末に属する第6号住居跡覆土上層に認められた。中期の住居跡（第2・4・5号住居跡）、後期前半に属する第3号住居跡内に第Ⅱ層の落ち込みは検出されず、主体となる覆土は第Ⅲa層類似の土壌であった。また今回調査された住居跡内に第Ⅲb層が堆積することはなかった。遺構内の覆土は遺構の埋没過程の状態を示すものであり、埋没時期を表すものではない。しかし昭和55年度の調査により検出された住居跡内覆土を大きく扱った場合、後期末、晩期初頭の住居跡と中期に属する住居跡群との間に、有機質の強い第Ⅱ層を遺構覆土とするか否かという明確な差違を認めることができたのである。

ii 埋葬人骨

埋葬人骨を伴う土壌は、1体分すべてが残存しなかったものも含め3ヶ所検出されている。また人骨の細片を埋葬した土壌も2ヶ所検出された。

本節では埋葬人骨の出土状態について概述し、人骨の人類学的所見については第9章第1節、山口敏博士の論文を参照いただきたい。

第1・2号人骨（押図第27）

F4-a4・b4グリッドにおいて表土（耕作土）直下から検出された。第1・2号人骨は第5号住居跡と重複する関係に位置する。第1・2号人骨を埋葬した土壌底面と住居跡床面とのレベル差は約30cmである。

土壌は北側が不明確であって、土壌壁を完全に露出できなかったが、南側では直線的な輪郭をつかむことができ、長方形に近い平而形（175×推定76cm）を呈するようである。

第1号人骨は胸椎・肋骨から腰骨にかけて人骨上に小規模な地点貝塚の堆積がみられたことが原因して骨の保存状態はすこぶる良く、頭蓋骨の一部が欠損する他、ほぼ全体の骨格を残していた。

検出時頭部はやや南にずれていたが、16×7cmの焼礫を枕石にしていたらしい。この焼礫は一方が人為的に打ち欠かれ、表面が研磨されたものである。

左足首上からも、自然礫が検出された。副葬品、身体装飾品は検出されなかった。

頭部は著しく前屈し、下顎骨が胸椎にくいこむ状態にあった。寛骨、肋骨等の出土状態は、上体が上を向いていたことを示しており、仰臥位の屈葬人骨である。両足をそろえているが、膝を右に倒して折りまげている。両腕は肘で折られて両体側に置かれていた。

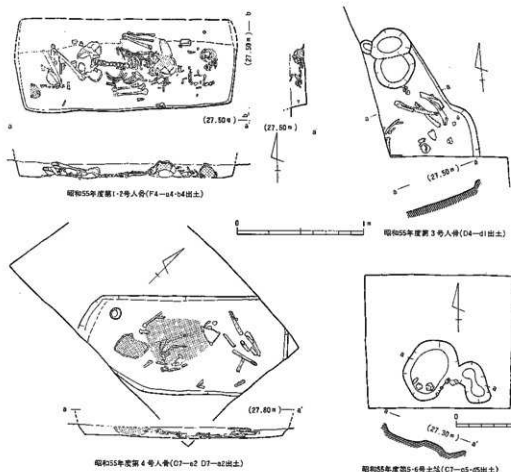
頭位方向はN-89°30'-Eに位置する。

第2号人骨は第1号人骨の頭部から約40cm東に離れて検出された。大腿骨、肋骨、頭蓋骨等の一部を残すものの、第1号人骨に比べ保存状態は悪い。

頭部は顔面をやや左に向けた状態で前屈する。残存する大腿骨と頭骨との位置関係は第2号人骨が屈葬されていたことを示しているといえる。

頭位方向はN-18°30'-Eに位置する。

第2号人骨の下肢骨に混ざって第1号人骨の左手指骨が検出され、第1・2号人骨は合葬関係にあったとも考えられる。



挿図第27 昭和55年度第1～4号人骨および骨粉を埋葬した土坑実測図

埋葬時期は明確でないが、土坑下より検出された第5号住居跡は中期末に位置づけられ、土坑が第Ⅱ層中より掘り込まれていることは、第1・2号人骨が後期以降に埋葬されたことを示している。

第3号人骨（挿図第27）

D4-d1グリッドより検出された。土坑全体を調査することができなかったが、洋梨形に近い平面形を呈する浅い土坑内に大腿骨等が残存していた。

大腿骨、腓骨の位置関係は屈葬位を推定させ、頭位を南西に向けていた可能性を示している。下肢骨の南から自然礫が3個検出され、第Ⅲa層を主体とし第Ⅱ層の暗褐色土がブロック状に混じる土坑覆土には比較的多くの獣骨が含まれていた。

副葬品、身体装飾品は認められず、埋葬時期を示す遺物も検出されなかった。

第4号人骨（挿図第27）

C7-e2, D7-a2グリッドより検出され、第2・3号住居跡の西方約6mに位置する。

第4号人骨の伴う土坑は第Ⅲa層上面で確認され、平面プランは楕円形を呈する。

頭蓋骨、腰椎骨、肋骨、仙骨ないしは寛骨、四肢骨等の残存が認められたが、保存状態は非

常に悪く、薬剤による固化に努めたものの、その取り上げは容易でなかった。

顔面をやや右に向け、上体は上を向くと思われる。膝を右に倒して両足を折りまげており、右仰臥屈葬の状態を示している。

肋骨に混じって6×9cmの不定形礫が1個検出され、胸に抱石をもっていたと思われる。

頭位方向はN-138°-Wを呈する。

副葬品、身体装飾品はまったく検出されなかった。

細片化した人骨を埋葬した土壌（第5・6号土壌 押図第27）

C7-c5, d5グリッドより2ヶ所重複して検出された。

ともに楕円形プランを呈し（第5号土壌=100×72cm、第6号土壌=68×35cm）、覆土中に人骨細片を多量に含んでいた。

覆土は両土壌とも第Ⅱ層を主体とし、掘り込み面は第Ⅱ層中にある。土壌底部は第Ⅲa層にまで達せず浅い。

第5号土壌が第6号土壌を切って掘られており、両土壌の埋葬時期には新旧関係を認めることができる。

両土壌の形態に顕著な差違は認められないが、第5号土壌の南から東壁にかけて、底面より約10cm高いレベルに大小9個の礫が集積していた。

土壌の規模は小さく再葬墓の可能性を指摘することができる。

主軸方位は第5号土壌がN-30°-E、第6号土壌がN-17°-Wに位置する。

第5・6号土壌とも、細片とはいえ人骨を検出したことから、第5号土壌を番外第1号人骨、第6号土壌を番外第2号人骨とよんでおきたい。

屈葬人骨である第1~4号人骨の埋葬状態をみると、膝蓋関節を右に倒して足を折り曲げている点が共通している。第1・4号人骨は仰臥屈葬の埋葬体位を示すが、第1号人骨が顔面を正面に向けているのに対し、第4号人骨はやや右に向けている。頭位方向に共通性は認められない。

すべての埋葬人骨、第5・6号土壌とも埋葬時期を確定しうる遺物を伴っていないが、遺構覆土、検出面から埋葬順序を推定すれば、第3号人骨→第4号人骨→第1・2号人骨（後期）→第6号土壌→第5号土壌となる。

iii その他の遺構

設定したすべてのグリッドから、多くのビット状遺構が検出された。

今回の調査で検出されたビット状遺構についても、昭和52年度の調査と同様の形態分類を行うことができる。それは、1 柱穴状ビット、2 円形の浅いビット、3 楕円形プランのビットである（市原 1978）。

柱穴状ビットは遺跡北側にひろがる微高地周辺部に分布が顕著であり、その規模は径10~50cm、深さ10~60cmを測る。第Ⅱ・Ⅲa層中より掘り込まれることが一般的であるが、C7グリッド付近では遺跡基盤層直上で検出され、第Ⅲb層を主体的な覆土とする柱穴状ビットが数ヶ所検出された。第Ⅲb層を覆土とする柱穴状ビットの規模は比較的大きい（径30~50cm）。

H2-a 3~5, b 3~5 グリッドでは、柱穴状ピットが円弧をえがくように分布しており、本来住居跡に伴っていた柱穴と考えられる。

円形の浅いピットは微高地南縁部を中心に検出されるが、その数は多くない。

径50~60cm、深さ10~30cmを測り、すり鉢状の断面を呈する。まれに数個から10数個のこぶし大の円礫を集中させるものがあるが、その性格は不明である。断言できないが、覆土中より検出される土器は中期に属するものが多いようである。

楕円形プランのピットも微高地南縁部、東縁部を中心に検出される。その規模には大小の差が認められ、小さなものは長径50~70cm×短径35~45cm、大きなものは長径90~120cm×短径50~70cmを測り、最大のもので長径360cm×短径125cmを測る。ピットの壁が比較的垂直に落ちるものと、断面すり鉢状を呈するものがある。覆土は第Ⅱ・Ⅲa層を主体とし、第Ⅲb層を覆土とする楕円形プランのピットは今回の調査では検出されなかった。ピット内より検出された土器片は中期から後期末葉にまでおよび、楕円形プランのピットが特定の時期にかたよって分布する傾向は認められないようである。

ピット内に礫、獣骨等が検出されることがあるがその性格は不明である。

-B9-d 1~3, e 2・3, C4-d 1, e 1, C7-a 1~5, b 1~5, P-2-a 4・5, b 4・5, P-1-a 1・2, b 1・2 グリッドから溝状遺構が4ヶ所検出された。

幅50~115cm、深さ20~80cmを測る。C4-d 1, e 1 グリッドの溝状遺構は浅く、壁の立ちあがりも明瞭でない。3mにわたって直線的にのびるが、南端はしだいに浅くなり消滅する。P-2-a 4・5, b 4・5, P-1-a 1・2, b 1・2 グリッドの溝状遺構は断面L状(深さ80cm)を呈する。グリッド内のみの調査であるため、その全長と性格は不明である。両溝状遺構とも第Ⅲa層を主体的覆土とするが形成時期は断定できない。

C7-a 1~5, b 1~5 グリッドの溝状遺構および第1号住居跡と重複する溝状遺構(-B9-d 1~3, e 2・3)は、覆土中に中世山茶碗、小皿片を比較的多量に含んでおり、中世に属すると思われる。

西の井戸ヶ谷に面する遺跡西縁部から地点貝塚10数ヶ所が検出された。

その規模は混土状態で1.6~48.8kgと小規模であり、広汎な貝層は形成しない。最小のものは1000cc程度の貝殻を投棄したかたまりである。貝塚の構成内容については第9章第2節を参照いただきたいが、ヤマトシジミを主体とし、他の貝類、魚骨、獣骨等はほとんど含まれない。

微高地西方(B3・4, C~E 4 グリッド)に比較的規模の大きな貝のブロックが数箇所みられたが、その分布に規則性は認められない。自然の凹地に散在的に投棄されたものと思われる。

貝層中に土器等人工遺物が混在することがほとんどないため、これらの地点貝塚群の形成時期を断定できないが、第Ⅱ層中より検出されることが一般的であり、後期以後に位置づけられよう。

第Ⅱ層中、第Ⅲa層の上面において散在する獣骨が認められ、その分布範囲は地点貝塚群よりさらに南に広がっている。

(山下晃 吉岡伸夫)

参 考 文 献

市原寿文編 1978年『袋井市大畑遺跡—1977年度の発掘調査—』袋井市教育委員会

第2節 遺物

i 土器

昭和55年度の調査総面積590m²より得られた縄文土器量は、30×54×15cmのポリコンテナーに約25箱分である。

それらを分類すれば次の3群25類に分類することができる。

なお、図示した280点を除いて残る大半の土器は無文またはそれに類する破片である。

第I群土器

縄文中期に属する土器を第I群土器とした。

a類(挿図第28-1)

口唇部に1条、口縁部外面には間隔をおいた2条の連続爪形文を密に施文する土器である。

図示した1点の他に細片が2点ある。

挿図第28-1の連続爪形文は逆C字形を呈し、2条目は粘土紐の低い隆帯上に施している。口縁部内面は研磨され、口唇にそって棒状施文具による押し引き文を1条加える。外面は地文として斜行縄文が施される。

焼成は比較的良く、胎土に粗い砂を含んでいる。

口縁部外面の文様は鷹島式土器(興他1969)に近似するが、内面の施文要素に若干異なる点がみられ、鷹島式土器の直後に位置すると思われる(加藤1980)。

なお細片については鷹島式土器そのものである可能性がある。

b類(挿図第17-1・2 挿図第19-6 挿図第28-2)

半截竹管により連続爪形文や平行沈線文を施す比較的薄手の土器である。

連続爪形文にそって三角形の刻みを連続して加えたもの(挿図第17-1・2)があり、地文に粗文が施される。挿図第17-2は口縁部を外反させ、胴部は円筒状を呈すると思われる。

五領ケ台I式土器(今村1972)に類似する土器である。

c類(挿図第19-7 挿図第25-4)

交互に刺突を施し、結果的に鋸歯状文を残す土器である。

挿図第19-7は波状口縁にそい刺突列を交互に組み合わせることにより鋸歯状文を刻んでいる。口縁部は全体として外反し、ドーナツ形(?)の貼付け隆帯文がみられる。

五領ケ台II式土器(今村1972)に酷似する。

d類(挿図第28-3)

肥厚させた口縁部内面および口唇部に半截竹管によるD字状の連続爪形文を施す土器である。

五領ケ台式土器の直後に位置づけられるものと考えている(今村1972)。

e類(挿図第19-8~11 挿図第21-1~3 挿図第28-4・5)

口縁部および胴部上半に太い沈線による連弧文、渦文を施す土器である。

連弧文は3条を基本とし、文様空間を横位の斜行縄文で埋めたもの(挿図第28-4・5)があり、器形はキャリバー形に近い形を呈する。

三河地方の咲畑式土器（久永1960 紅村1978 増子1969）の土着化した土器であらうか。

f 類（挿図第17-3～7 挿図第19-1～5・12～19 挿図第21-4～20 挿図第25-5～9 挿図第28-6～21）

縄文を地文とし太い沈線、隆帯等により文様帯を区画する土器である。

口縁部文様帯は全体にわたり退化する傾向がみられ、文様区画内に横位沈線を加えたもの（挿図第19-5 挿図第21-7）、文様区画間を縦位短沈線で区切るもの（挿図第19-18 挿図第21-8）、文様区画内や区画間に刺突列や円形浮文を施したもの（挿図第19-1 挿図第21-17 挿図第28-8）、貼付け隆（凸）帯上に半截竹管状の施文具により刺突列を加えたもの（挿図第21-19・20 挿図第28-6・16）がある。挿図第17-6、挿図第21-5・9は半截竹管により区画する文様帯を頸部以下に施文する土器であり、挿図第21-5では口縁部文様を消失している。

胴部には磨消縄文帯が懸垂文を構成する（挿図第17-7 挿図第21-18）。挿図第19-3では胴部がていねいに研磨されている。

器形は頸部のくびれが弱いキャリバー形に近い形を呈する深鉢が一般的であるが、挿図第19-2・5・16などは浅鉢と思われ、口縁部内外に鈎様の凸帯を有する。挿図第19-19は小型の鈎付壺である。縄文のみ施される挿図第17-5、挿図第28-17はキャリバー形に近い器形を呈することから当類に含めたが、文様としては斜行縄文のみがみられる。

加曽利E式土器の新しい段階に共通する文様構成を有する土器（鈴木^他1978）であり、細部には後期的な要素も認められるなど、地域色も強い。中期末の土着化した土器と考えている。

g 類（挿図第17-8・9 挿図第19-20 挿図第21-21～26 挿図第22-27～30 挿図第25-10 挿図第28-22～26）

太い沈線、隆帯により文様帯を区画することはI-f類土器と同様であるが、区画内をヘラ描き沈線、条線で埋める土器である。

ハの字状沈線文や条線文が発達し（挿図第17-9 挿図第21-25 挿図第22-27 挿図第28-24）、なかには櫛状施文具を連続刺突することにより、ハの字状文に代用するもの（挿図第25-10）がある。口縁部を肥厚させ（挿図第21-22）、器形は頸部のくびれの弱い深鉢形を呈する。

ハの字状文の発達など曽利IV式（武藤^他1978 長崎^他1979）の特徴を有する土器であるが、I-f類土器と同様、文様構成は単純化しており、地域色の強い土器である。

h 類（挿図第19-21 挿図第29-27・28）

縦位の細条線を地文とし、口縁部に半截竹管による横線文、波状文、渦文を施す土器である。基本的に口縁部は内彎するが、挿図第29-28では端部が先細く作られ、若干外に開く。

瀬戸内地方里木Ⅲ式土器（間壁^他1971）の一部や、清水の上B類土器（山下1976）に類似する土器である。

i 類（挿図第29-29・31）

結節縄文を有する土器である。

一般的に縄文原体は縦位回転で施されるが、挿図第29-29では折り返し口縁の内外面に横位

で施される。

天竜川流域に主に分布し(神村1978)、かつて広野c式土器(向坂1970 加藤1972 大橋他1981)と呼ばれた中期後半の土器である。

j類(挿図第22—31・32 挿図第29—30)

施文は縄文を地文とし、微隆起線により区画がなされている。

胎土に赤色の細礫を多量に含んでおり、静岡県東部以东より直接移入された可能性のある土器である。加曾利EⅣ式土器(鈴木他1980)と考えられる。

第Ⅱ群土器

縄文後期に属する土器を第Ⅱ群土器とした。

a類(挿図第17—10 挿図第22—33 挿図第25—11 挿図第29—32~43)

やや太く深い沈線により文様を区画する土器である。区画内に施される磨消縄文は比較的細かい。全体的な文様構成がわかる土器はないが、渦文(挿図第29—34)、カギ形(挿図第29—36)等の文様構成がみられる。

口縁部は内彎する(挿図第29—32・33・35)。挿図第29—40の口縁部形態はむしろⅡ—b類土器に類似するが、太く明瞭な沈線と、沈線より上位に縄文を施すことからa類土器に含めた。

南関東の称名寺式土器(今村1977)に比定される土器である。

b類(挿図第17—11~14・24 挿図第22—34~43 挿図第29—44~58)

口縁部を内方に屈曲肥厚させ、その内外面あるいは一面に、横位沈線を1条ないし2条めぐらす土器である。

口縁部文様として沈線の他に同心円文(挿図第17—13 挿図第22—37 挿図第29—51)や縦位の短沈線列(挿図第29—44・48)を加えるものがあり、挿図第29—44の短沈線列は半截竹管により施文される。また凸帯や浮文を貼付け(挿図第22—39・40 挿図第29—49)、凸帯上、沈線間に刺突ないし刻みを加えたもの(挿図第17—11・12 挿図第22—39・40 挿図第29—46)も比較的多い。挿図第22—43の口縁突起部にも刺突列が2条加えられる。口唇部に刺突や刻みを施すもの(挿図第29—55・58)もある。

胴部には縄文の他、沈線による渦文(挿図第22—42)、斜線列(挿図第22—39)が施される。挿図第29—57は太い縦位沈線間に刺突列が加えられる。

口縁部に突起と刻みを有し、口縁部外面に半截竹管状施文工具によりあらく沈線列を施した挿図第17—14は、疑問点もあるが一応b類に属させて扱った。

口縁部が内彎するもの(挿図第22—35~37・39~41)とやや外反するもの(挿図第29—44・55・58)とがある。

b類土器は堀之内Ⅰ式土器(柿沼1975・1976)、昭和26年度の調査において大畑Ⅰ式土器(岡本1955)と呼ばれた土器に比定することができよう。

c類(挿図17—15~18)

文様は三角形を基本として構成され(挿図第17—16)、口縁部内面に凹線、沈線を施す点(挿図第17—17・18)、Ⅱ—b類土器と区別され、堀之内Ⅱ式土器(柿沼1975・1976)に比定され

る土器である。

挿図第17-15は櫛状施文具による細条線のみが施される口縁部片であるが、その文様も三角形を呈していることからC類に含めた。

d類 (挿図第15-1 挿図第19-22 挿図第30-59~68)

口縁部外面に横位沈線を数条施し、沈線間を磨消縄文で埋めることにより帯状文をなす土器である。

沈線はⅡ-a・b類土器に比べさらに細くなる。帯状文の他、同心円文(挿図第30-63)や斜線文(挿図第30-65・66)が施され、口縁部内面にも数条の沈線が加えられる(挿図第30-68)。

器形は浅鉢形を呈するもの(挿図第30-59~61)と深鉢形に比定されるもの(挿図第30-66)とがある。挿図第30-66の口縁部は若干内彎する。

d類は加曾利BⅠ式土器(山内1967・吉田1956)に比定され、従来大畑Ⅱ式土器と呼ばれてきた土器(岡本1955)であるが、昭和55年度の調査においてその出土量は比較的小さい。

e類 (挿図第22-44~46 挿図第25-12・13 挿図第30-70・71)

口縁部の横位沈線、沈線間を埋める縄文はⅡ-d類土器に比べさらに不明瞭となり(挿図第22-44 挿図第25-12)、胴部に横位の羽状斜線文を施す(挿図第30-70・71)土器である。

挿図第22-46は沈線間に刺突列を加え、内面にも沈線をめぐらす。口縁部は若干内彎し肥厚する。

加曾利BⅡ式土器(山内1967・吉田1956)に比定され、Ⅱ-d類土器同様その出土量は少ない。

f類 (挿図第30-72)

縦に粘土紐を2条貼付け、刻みを加えた土器である。

蛭塚Ⅲ式土器(麻生1962)とされたものに類似し、遠江地域を中心に分布する。

g類 (挿図第30-69・73)

沈線および巻貝の回転による疑似縄文を有する土器である。

挿図第30-73は口縁部を内屈させている。

近畿地方における元住吉Ⅰ式土器(堅田1965)に類似する土器である。

h類 (挿図第17-19・20 挿図第22-47・48 挿図第25-14~23 挿図第30-74~84)

口縁部外面に巻貝により横位の沈線文を施す土器である。

沈線文は3条ないし2条を基本とし、挿図第30-79では幅広の浅い沈線(凹線)が波形をえがいている。挿図第25-15、挿図第30-75・76・80では、これに縦位の短沈線を部分的に加えて文様を構成する。挿図第25-14では上位の沈線を部分的に曲げて下位の沈線に続けている。きわめて特徴的な瘤状の隆起(挿図第22-48)や竹管状施文具により刺突を加えたもの(挿図第30-82)などがある。

胴部は無文のものと、巻貝による斜行の条痕文を施すものがある。

口縁部形態には、くの字状に内曲するもの(挿図第30-75)、内彎するもの(挿図第22-48 挿図第25-14・15・19)、一度内曲した口縁部を屈曲させ、さらに外にひろくもの(挿図第25-

18 挿図第30-81)、まっすぐ外に開くもの(挿図第25-16・21)等がある。挿図第30-79は注口土器であろう。

宮流式土器に比定される土器であるが、横位沈線は3条ないしそれ以下と少なく、縦位の沈線や瘤状の隆起を加えるなど、編年の位置を降らせる施文要素を有する(麻生1961)。

挿図第25-22・23は沈線間を縄文あるいは巻貝による疑似縄文で埋めており、これはⅡ-i類土器にみられる施文であるが、巻貝による沈線を有する点当類に含めた。

i類(挿図第25-3・24-27 挿図第30-85-92)

Ⅱ-h類土器と同様の文様構成を有するが、沈線が主に棒状施文具により施される土器である。

施文具が巻貝でなく棒状のものと考えたのは、Ⅱ-h類土器に認められた沈線内の巻貝滑走痕がなく、平滑である点に注目したためである。

沈線の他は無文のものが多いが、地文として縄文(挿図第30-92)や巻貝回転による疑似縄文(挿図第30-87・89)を施すものがある。瘤状の貼付け隆起のみ加えられた挿図第25-27は当類に含めた。

胴部は無文ないし条痕で整形される。

口縁部形態は内彎するものが多い。

三河地方を中心に分布する寺津下層式土器(紅村他1978)に類似する土器である。

j類(挿図第17-21 挿図第25-1・2 挿図第26-28-30 挿図第31-93-103)

波状口縁に並行する凸帯を付し、凸帯上に刺突、刻みを加える土器である。

口縁にそって2条ないし3条の棒状施文具により沈線が施され、器形は深鉢形を呈する。波状口縁の頂部、最下位部に縦位の凸帯が加えられ、凸帯上に刺突(挿図第26-28 挿図第31-93・95)、刻み(挿図第31-96・98)を施すのが一般的である。挿図第26-28、挿図第31-94では凸帯の口唇部側にも刺突、刻みが施され、挿図第31-97は凸帯上に沈線が施される。刻みを付してシンメトリーに対向する凸帯を貼付したものがある(挿図第31-94・99)。

胴部には羽状の沈線文が施される。

口縁部は内彎するものが多く、内方(挿図第31-93・97・100)、内外両方(挿図第31-95・96)に肥厚させる。

挿図第31-100は波頂部外面にのみ1ヶ所刺突を加えたものである。

中部山岳地方を中心に、広く東海地方にまで分布する上ノ段式土器(宮坂1942 桜井・平野1968)に類似する土器である。

k類(挿図第17-22・23 挿図第19-23 挿図第22-49・50 挿図第26-31-34 挿図第31-104-118)

巻貝(挿図第31-104-111)ないし二枚貝(挿図第31-112-118)による条痕文のみを有する土器を一括した。

内外面を条痕整形するものが比較的多い。

口縁部形態には外反するもの(挿図第31-104・108・113)、内彎するもの(挿図第31-114)、

まっすぐ上方にのびるもの(挿図第31-111)がある。また口唇部を外に折り曲げたり(挿図第31-107・114)、内方に肥厚させたりする(挿図第31-109)。

k類土器の多くは縄文後期末葉に属する粗製土器であろう。

第III群土器

出土総量に占める比率は非常に少ない。縄文晩期に属する土器を第Ⅲ群土器とした。

a類(挿図第23-53~55 挿図第32-119・120)

凸帯に沈線、刻みを加えた地域色の強い土器である(麻生1962)。

b類(挿図第23-56~58 挿図第26-35 挿図第32-121~123)

櫛状施文具により波状文を施す土器である。

櫛の数は3条から6条(3条の櫛状施文具を2段に使用した可能性もある)までであるが、4条を基本とする。波状文を2段に施したもの(挿図第32-122)波状文と平行線文を組み合わせたもの(挿図第32-123)がある。

胴部に条痕を施す(挿図第26-35 挿図第32-121・122)。

口縁部は一般的に外反し、挿図第32-122のように内彎するものは少ない。

尾張、三河地方を中心に分布する縄文晩期初頃の土器(後藤1960)である。

c類(挿図第32-124~126)

沈線および刻みを施す土器である。

挿図第32-124・126では刻みを有する沈線文の間に、さらに2条の沈線がジグザグに施される。挿図第32-125は沈線が一点に集中するような文様構成を示し、口縁部は内彎する。

いわゆる権原式文様を有する土器(田辺他1973・泉1981)である。

d類(挿図第23-59・60)

挿図第23-59は瘤状の隆起間を3条の沈線で結ぶ土器であり、挿図第23-60は沈線による入り組み文を有する土器である。

関東地方の安行重a式土器との併行関係を思わせる土器である。

無文土器および把手・注口・底部

無文土器(挿図第15-3 挿図第19-24 挿図第22-51・52 挿図第26-36~38)

中期の無文土器および後・晩期の粗製土器を一括した。

挿図第15-3は口縁下にあわい隆帯状の張り出しを有する。挿図第22-51・52は口縁部が肥厚し、若干内彎する。挿図第22-52の口唇部には刺突が加えられる。挿図第26-36は口縁部が外反し、内側に1条沈線を加える。

挿図第22-51・52はI-f類土器等に伴うものと考えられ、挿図第26-36は堀之内期の粗製土器であろう。

把手・注口(挿図第33-1~15)

編年の位置を明確にしえないが、把手・注口部とも堀之内期から後期後葉に属するものと考えられる。

把手は挿図第33-1に刺突が加えられる他、総じて加飾性が弱く、注口土器の把手が多い



挿図第28 昭和55年度出土第I群土器拓影

1=I-a類土器 2=I-b類土器 3=I-d類土器 4・5=I-e類土器
6~21=I-f類土器 22~26=I-g類土器

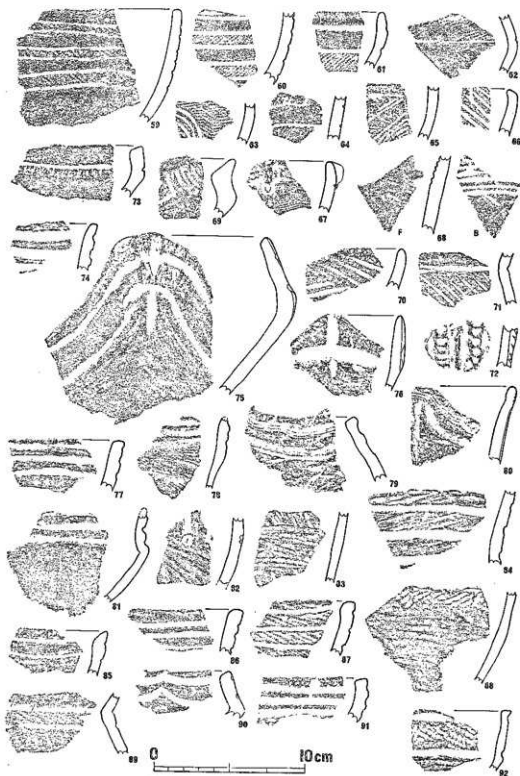
(挿図第33-1・3・4)。挿図第33-4は突起を有していたらしく加曾利B期に特徴的な把手である。

注口部には大形のもの(挿図第33-7~12)と小形のもの(挿図第33-13~15)があり、前者



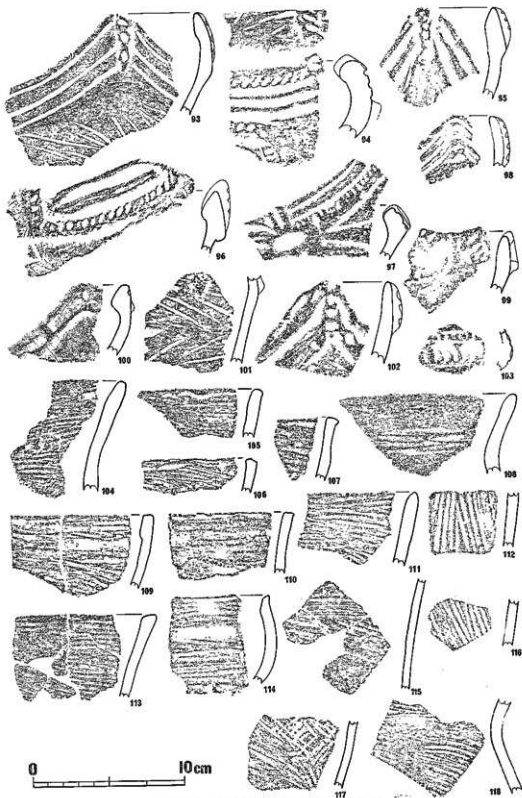
挿図第29 昭和55年度出土第Ⅰ・Ⅱ群土器拓影

27・28=Ⅰ-b類土器 29・31=Ⅰ-i類土器 30=Ⅰ-j類土器 32~43=Ⅱ-a類土器
44~58=Ⅱ-b類土器

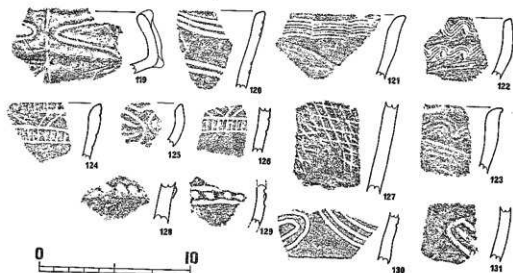


每圖第30 昭和55年度出土第Ⅱ群土器拓影

59~68=Ⅱ-d類土器 70・71=Ⅱ-e類土器 72=Ⅱ-f類土器 69・73=Ⅱ-g類土器
74~84=Ⅱ-h類土器 85~92=Ⅱ-i類土器



挿圖第31 昭和55年度出土第Ⅱ群土器拓影
93~103=Ⅱ-j類土器 104~118=Ⅱ-k類土器



挿図第32 昭和55年度出土第Ⅲ群土器拓影

119・120=Ⅲ-a類土器 121~123=Ⅲ-b類土器 124~126=Ⅲ-c類土器 127~131=不明土器

は直立気味に胴部と接合する(挿図第33-7~9)。挿図第33-11は先端部が下方を向き、挿図第33-13には沈線と縄文が施される。小形の挿図第33-13・14は後期後葉に属すると思われる。

底部(挿図第33-16~23)

底端部が外方に張り出し、外面に粘土板接合時の指頭痕を残すもの(挿図第33-16・17・20・21)と底部より胴部へくびれることなく移行するもの(挿図第33-18・22)がある。前者の多くは中期に属するものであろう。

挿図第33-19には網代度が認められる。木葉底、上げ底様の底部は検出されなかった。

挿図第33-23は中期末に属する台である。

中期

中期前葉に位置づけられる土器群(Ⅰ-a・b・c・d類土器)は細片であり、出土量も少量である。

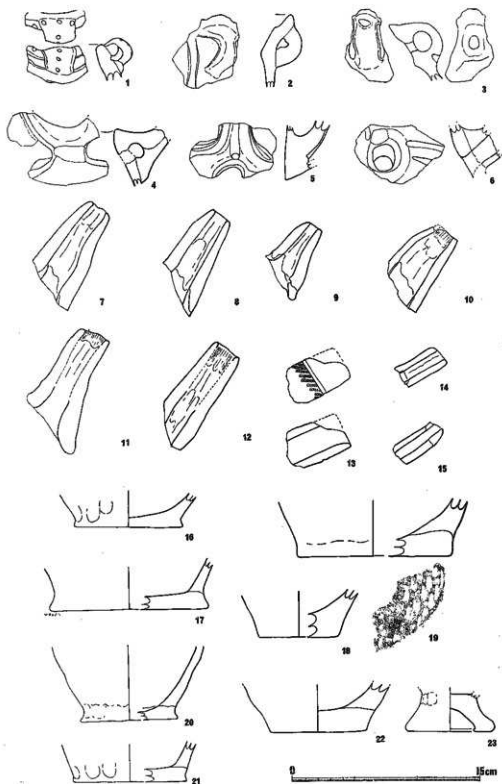
関東系五領ケ台式土器(Ⅰ-c類土器)、およびそれに類似する土器(Ⅰ-b・d類土器)が主体を占め、客体として瀬戸内系鷹島式直後の土器(Ⅰ-a類土器)が含まれている。

明確に遺構に伴った例は現在のところ皆無であり、大畑遺跡における中期前葉土器の実体については今後の調査資料の増加を待って考えてみたい。

Ⅰ-f・g類土器はともに口縁部文様帯が退化縮少し、胴部文様がせり上がる傾向を有していた。挿図第19-5にみられたような文様帯内の横位沈線や、挿図第19-2のような口縁部形態は後期的な要素であり、基本的な文様構成は中期後半に属するものの、細部の文様構成や器形にはその偏年的位置を新しくさせるような様相さえみられる。

こうした傾向を地域的な特色として理解するか、中期末~後期初頭にかけての時期的な問題として捉えるか、今後の検討課題の一つであろう。

同様な傾向はⅠ-e・h類土器についても指摘できる。



挿図第33 昭和55年度出土土器把手・注口部・底部実測図

ここで中期後半に属するとした住居跡の土器の伴出関係について整理してみたい。

第4号住居跡ではⅠ-f類土器を主体として、Ⅰ-e・g・h類土器が伴出し、第5号住居跡からはⅠ-f・g類土器に伴ってⅠ-e・j類土器が出土していた。また袋井市長者平遺跡第2号住居跡ではかなりの量のⅠ-i類土器とⅠ-f類土器との伴存関係がみられた。

まだ多くの問題点をかかえているが、Ⅰ-e・f・g・h・i類土器は中遠地域における縄文時代中期末の、言い換えれば中期から後期に移行する時期の土器組成としてとらえられるのではないだろうか。

昭和55年度の調査において、勝坂、北屋敷式土器等中期中葉に位置づけられる土器は検出されていない。

後期

Ⅱ-a類土器は称名寺式土器の、Ⅱ-b・c類土器は堀之内式土器の諸特徴を有しており、後期初頭に位置づけられよう。

昭和26年度の調査により大畑Ⅱ式土器（岡本1955）と呼ばれた加曾利BⅡ式土器に対比されるⅡ-d類土器、Ⅱ-e類土器の出土量は少ない。

断片的ながら遠江地域を中心に分布する縄塚Ⅲ式類似の土器（Ⅱ-f類土器）（麻生1962）、元住吉山Ⅰ式土器（堅田1965）に比定されるⅡ-g類土器が検出されている。また遠江地域では緑帯文土器と総称される関西系土器が伴出するとされている（後藤1960）が、今回の調査により検出された土器中にそれと断定できるものはなかった。

第6号住居跡ではⅡ-h類土器を主体としてⅡ-i・j類土器が伴出した。

Ⅱ-h類土器は前述したように宮滝式土器としては新しくなる要素を有しており、磐田市西貝塚における「宮滝新式土器」（麻生1961）に比定できよう。

宮滝新式土器の包含層である西貝塚第1・2層から出土した土器の中に、寺津下層式、上ノ段式類似の土器が認められ、安行Ⅱ式風土器を伴ったことなどが指摘されている（麻生1961）。Ⅱ-i類土器に施される地文としての縄文、疑似縄文は寺津下層式第2類土器に比較的多くみられ、晩期の寺津式土器にいたって一般化する施文手法である（紅村他1978）。

Ⅱ-h・i・j類土器は中遠地域後期最末に同時的に存在した土器群であろう。

晩期

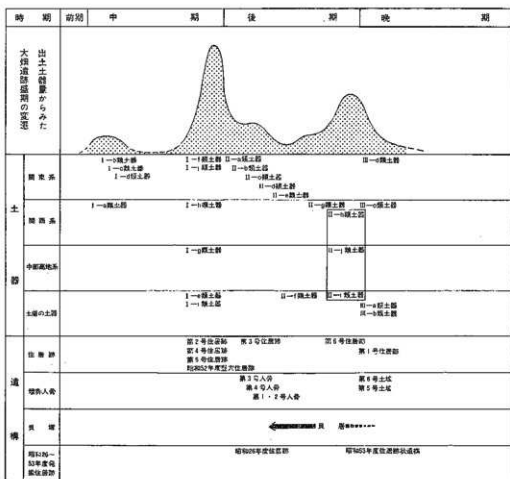
Ⅲ-a類土器は地域色が強く、挿図第23—53・55は縄塚Ⅵ式土器（麻生1962）類似の土器である。

畿内においてはⅢ-c類土器のいわゆる榎原式文様は志賀里Ⅱ式段階で出現し、志賀里Ⅲ式土器で一般化する（泉1981）。

第Ⅲ群土器の出土量は少ないが、従来から考えられてきた遠江地域における晩期初頭土器群の範疇におさまるものである。

以上述べた各群各類土器の概年の位置および出土土器からみた大畑遺跡の変遷過程を、挿図第34に示した。

（山下昂 吉岡伸夫）



插图第34 大畑清跡變遷圖

参考文献

- | | | |
|-------|-------|--|
| 奥三郎他 | 1969年 | 『鹿島一鹿島遺跡発掘調査報告書一』 南紀考古同好会 |
| 加藤賢二 | 1980年 | 『静岡県以東における瀬戸内系土器一特に鹿角式類似土器の分布について一』 静岡県考古学会シンポジウム 4 静岡県考古学会 |
| 今村啓爾 | 1972年 | 『宮ノ原貝塚』 武蔵野美術大学考古学研究会 |
| 久永春男 | 1960年 | 『咲畑貝塚』 愛知県知多郡師崎町立師崎中学校 |
| 紅弘他 | 1978年 | 『東海先史文化の諸段階・資料編Ⅱ』 |
| 増子康真 | 1969年 | 『木曽川下流域の縄文中期後半土器について』 『古代学研究』 54号 古代学研究会 |
| 鈴木保彦他 | 1980年 | 『シンポジウム 縄文時代中期後半の諸問題一とくに加賀利B式と曾利式土器との関係について一』 『神奈川考古』 10号 神奈川考古同好会 |
| 武蔵雄六他 | 1978年 | 『曾利第三・四・五次発掘調査報告書』 長野県富士見町教育委員会 |
| 長崎元広他 | 1979年 | 『中部高地縄文土器集成 第1集一縄文中期後半の部・その1』 中部高地縄文土器集成グループ |
| 間諺彦彦他 | 1971年 | 『里木貝塚』 『倉敷考古館研究集報』 第7号 倉敷考古館 |
| 山下勝年 | 1976年 | 『清水の上貝塚一南知多町文化財調査報告書』 南知多町教育委員会 |
| 神村透 | 1978年 | 『結着縄文をつけた一群の土器一飯田地方縄文中期終末』 『中部高地の考古学一長野県考古学会15周年記念論文集』 長野県考古学会 |
| 向坂剛一 | 1970年 | 『遠江における縄文土器の変遷』 『遠江考古学研究』 4 遠江考古学研究会 |

- 加藤賢二 1972年 「広野C式土器」『なう』No.3・5
 大橋味夫他 1981年 「広野遺跡」『森町考古』17号 森町考古研究会
 今村啓爾 1977年 「称名寺式土器の研究(上)」『考古学雑誌』第63巻第1号 日本考古学会
 今村啓爾 1977年 「称名寺式土器の研究(下)」『考古学雑誌』第63巻第2号 日本考古学会
 柿沼修平 1975年 「堀之内式土器論(1)」『史館』第5号
 柿沼修平 1976年 「堀之内式土器論(2)」『史館』第6号
 岡本秀 1955年 「静岡県小笠原大畑遺跡」『昭和26年度日本考古学年報』日本考古学会
 山内清男 1967年 「日本先土器図譜」先史考古学会
 吉田格 1956年 「関東」『日本考古学講座』第3巻 河出書房
 麻生俊 1962年 「第六土器」『蛸塚遺跡—総括編』浜松市教育委員会
 堅田直 1965年 「岸和田市春木八幡山遺跡の研究」『帝塚山大学考古学研究报告』第1輯 帝塚山大学考古学研究会
 麻生俊編 1961年 「西貝塚」磐田市教育委員会
 宮坂英二 1942年 「長野県諏訪郡北山村上ノ段遺跡調査報告」『史前学雑誌』第14巻第1号
 坂井清彦・平野吾郎 1968年 「愛知県設楽町神谷沢遺跡の調査」『史観』77冊
 田辺昭三他 1973年 「湖西線関係遺跡調査報告書」湖西線関係遺跡発掘調査団
 後藤守一編 1957年 「蛸塚遺跡・その第一次発掘調査」浜松市教育委員会
 後藤守一編 1958年 「蛸塚遺跡・その第二次発掘調査」浜松市教育委員会
 後藤守一代理編集委員会 1960年 「蛸塚遺跡・その第三次発掘調査」浜松市教育委員会
 編輯委員会編 1961年 「蛸塚遺跡・その第四次発掘調査」浜松市教育委員会
 浜松市教育委員会編 1962年 「蛸塚遺跡—総括編」浜松市教育委員会
 市原寿文 1967年 「遠江石原貝塚の研究—縄文後期における地域性の問題をめぐって」『人文論叢』18号 静岡大学人文学部
 増子康真 1980年 「東三河における縄文後期木・晩期文化の再検討」『古代人』36号 名古屋考古学会
 紅村弘他 1975年 「東海先史文化の諸段階」
 紅村弘他 1977年 「東海先史文化の諸段階—資料編I」
 泉拓良 1981年 「近畿地方の土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣出版株式会社
 山下勝年 1974年 「愛知県南知多町内海下別所遺跡調査概報」『古代学研究』73 古代学研究会
 増子康真他 1978年 「縄文中期後半土器の分布—東海地方西部地域」『古代人』34 名古屋考古学会

ii 石 器

今回の調査は遺構等においても全掘されたものは少なく、石器のパラエティールを遺構単位ごとにつかむことはできなかった。

石鏃 (挿図第35—1～10)

ここで図示した石鏃の出土地点、石材については第1表に示した。

ここにあげた資料は石鏃全体の約35%にしかならず、実測の際になるべく多くのパラエティールを出すように心掛けているが、十分なものとは言えない。また全資料の検討をするだけの時間が今回ないため、石鏃を類別して扱えた上での統計的検討は今回は省略した。このような検討は後に大畑遺跡全体の報告の際に改めて行なわれるものと考えている。

石鏃は平面形態で無茎のものと有茎のものとに大別される。

無茎鏃 (挿図第35—1～4) はその基部によって挟入のあるもの (挿図第35—1・2) と挟入のないもの (挿図第35—3・4) に分れる。挿図第35—2は胴部に研磨が施されている。この研磨は剥離面の一部も磨いており、石鏃を完成する最後の段階に行われたものと考えられ

* 本文中で石器の分類に使用した言葉の多くは、鈴木道之助著1981年「図録石器の基礎知識Ⅲ」柏書房にしたがったが細分の部分においては著者の造語も含めた。

る。局部磨製鏃については西北九州を中心に多くの早期の遺跡で出土例が報告されているが、それらの資料とはかなり異なり、直接につなげて考えることは無理であろう。このような例が増えるのを待って検討を行ないたい。

挿図第35—3・4は背面を1回の剥離によって作っており、3では周辺調整を背面、主要剥離面にほどこして、断面は>状に作っている。4は主要剥離背面の方向に調整剥離を行ない、断面を台型に作っている。またバルブを取り外すための裏面調整がほどこされている。

有茎石鏃(挿図第35—5～10)は基部に挟入が入るもの(挿図第35—5)、基部が突出するもの(挿図第35—6～8)、基部両側が突出する飛行機鏃に近いもの(挿図第35—9)、不定形に近いもの(挿図第35—10)などに分けられる。

8は先端にフアシット状の剥離がある。このような剥離のしかたは他にもしばしばみることができる(挿図第35—4)。他の器種においても飛道具的突刺器具にこのような剥離痕が見られるかどうか今後の検討が必要な点であろう。

以上無茎鏃と有茎鏃を個別に説明してきたが、現時点において無茎鏃と有茎鏃は同時使用されたと考えられる。このような無茎鏃と有茎鏃をもって、機能の違いや対象物の違いを言々することは危険を伴うが当時の人々にあって、いくつかの区分は当然あったと考えられる。

ポイント(挿図第35—11)

表採、珪質頁岩製である。

縄文時代中後期になるとポイントの出土例が増える。全体に作りが悪く厚手であるものも目立つ。

石鏃(挿図第35—12～14)

石材は第1表に示した。

挿図第35—12・13は小型で、挿図第35—14はやや大型である。全体に作りは簡単であるが、先端断面を◇型に上手に作っている。

スクレイパー(挿図第36—15・16)

挿図第36—15は作りの美しいサイドスクレイパーである。

打製石斧(挿図第36—17・18、挿図第37—19・20)

石材は第1表に示した。

大畑遺跡においては打製石斧の出土が少なく関東地方に多くみられる打製石斧とは形態が異なる。挿図第37—20は着柄部に挟入がつけられており、刃部が斜めに傾いていることから打製石斧よりも大型粗製石匙と考えるべきかもしれない。

磨製石斧(挿図第38—21・22)

石材は第1表に示した。

挿図第38—21・22ともに全面磨製であり、作りはていねいである。

礫盤(挿図第38—23)

表採、砂岩製である。

楕円の扁平礫の長軸の一端に片側からの加工を加えて刃部を作っている。

石錘（挿図第38—24～26、挿図第39—27～30）

本遺跡の石錘の数は石鏃について多く、その数約130点を数えることができる。これはこの地域全体に言えることかもしれない。

石材は第1表に示した。

挿図第38—24は有溝石錘、挿図第38—25は切目石錘と細分できるかもしれないが、今回は有溝石錘として後者と分離しておく。挿図第38—26、挿図第39—27～30は前者に対し打製石錘（？）か一般の石錘と呼ぶべきかは不確であるが、ただの石錘として分離しておく。木グループは楕円礫の長軸両端に加工を加え内彎させただけのもの（挿図第38—26 挿図第39—27）、楕円礫の長軸両端を加工するとともに側辺部に剝離調整を加えたもの（挿図第39—28～30）に分類できる。

しかし今回の資料分類の意味する問題は不明の状態であり、他遺跡との分析をみた上で考えていく問題かもしれない、まずは問題提起のみで終わることにする。

挿図第39—27～29の3点は重なった状態で出土し、法量も長軸6.6・6.9・6.9cm、短軸8.7・10.3・10.1cmと近く、廃棄よりも遺棄を思わせるが、その内に先にあげた両タイプが入っている点は興味がある。挿図第39—27は火を受けて少し赤く変色している。

以上各々遺物の若干の説明をしてきたが、まとめておきたい。

① 本遺跡は昔から石鏃の出土量の多いことで有名であった。

今回の調査においても350点以上の石鏃の出土を見、発掘面積に対して、石鏃の出土量は多いといえることができる。

② 石錘の出土量も多く約130点を数えることができた。また図示したような大型のものだけでなく、小型のものも多く、遺物の説明でも述べたように有溝のものと打製のものに2大別され、打製のものは a 楕円礫の長軸の両端のみを加工したものと、b 楕円礫の長軸の両端およびその周辺に剝離調整したものに細別できる。これは後に法量の要素を入れれば、いくつかの区分線が引けるかもしれない、これからの課題としておく。

③ 打製石斧の出土は少なく、その規格性はまったくなかった。

④ 実測図にはまったく示していないが、石核の出土が多く、チャートを石材としたサイコロ状の小型の石核が目についた。これらの分析も大畑遺跡をまとめる際に見落せない問題と考えられる。

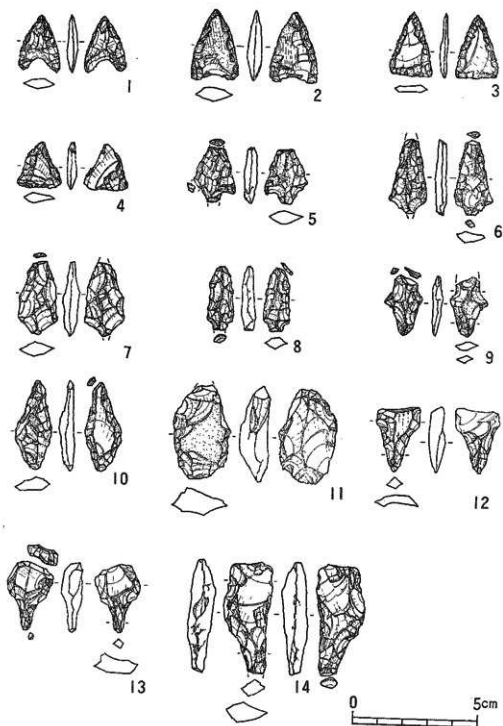
⑤ ① ② ③で示した石鏃、石錘、打製石斧は縄文時代における石器でもっとも一般的なものであり、また縄文時代に普遍的に存在するかに思われるが、これらの石器の出土状況を遺跡別、地域別に分析的にみると、この3者が平均してすべて多い地域はない。巨視的にみれば、石錘、土器片錘、打製石斧の多い茨城県の太平洋側、土器片錘の多い千葉県、打製石斧の多い神奈川県、東京都、埼玉県、打製石斧、石鏃の多い長野県周辺、石鏃、石錘の多い静岡県西部遠州灘側となる。このような、各種石器類の地域別分布にみられる偏差を基礎にして、縄文時代の人々の生活を石器の在り方がいかに反映しているかを考えていくための資料が、大畑遺跡出土石器によって、さらに加えられたということができよう。

（西井幸雄）

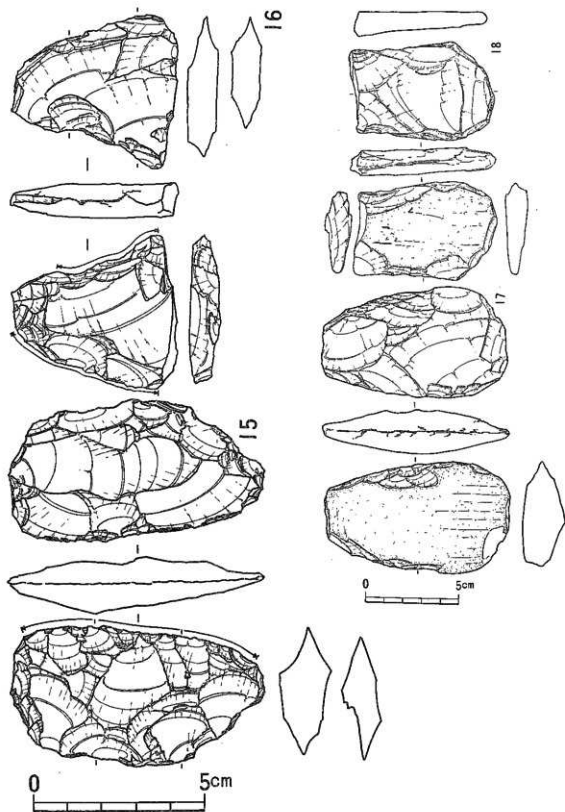
図No.	No.	グリッド	層位	種類	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
1	390	E 4	Ⅱb	石 鉄	2.3	1.7	0.5	1.2	チャート	
2	207	C 7	Ⅱa	石 鉄	2.8	2.0	0.6	2.9	チャート	
3	475	G 7-d 3	Ⅲb	石 鉄	2.6	1.7	0.4	1.3	珧質頁岩	
4	514	E 4	Ⅲb	石 鉄	1.9	1.8	0.6	0.8	黒 燐 石	
5	574	B 7-d 4	Ⅲ	石 鉄	—	—	0.6	2.0	珧質頁岩	先端・片脚欠損
6	151	B 8-a 4	Ⅲ	石 鉄	—	1.7	0.6	1.2	凝灰質頁岩	先端・茎欠損
7	346	G 5	Ⅱ・Ⅲ	石 鉄	—	1.6	0.8	2.5	珧質頁岩	先端・茎欠損
8	537	P 1-c 2	Ⅱa	石 鉄	—	1.1	0.6	1.7	珧質頁岩	先端・茎欠損
9	222	C 7	Ⅱa	石 鉄	—	1.5	0.6	1.3	珧質頁岩	先端欠損
10	514	E 4	Ⅲb	石 鉄	3.6	1.5	0.7	2.8	頁 岩	先端欠損
11	536	表探		ポイント	—	2.4	1.2	10.3	珧質頁岩	先端欠損
12	192	C 7	I	石 鉄	2.6	1.8	0.7	2.3	珧質頁岩	
13	160	B 8-c 1	Ⅲ	石 鉄	—	1.8	1.0	3.8	珧質頁岩	先端欠損
14	207	C 7	Ⅲ	石 鉄	—	1.9	1.2	8.4	珧質頁岩	先端欠損
15	573	E 4	Ⅱa	スク レイパー	7.4	4.2	1.6	41.9	砂質頁岩	
16	211	C 7	Ⅲa	スク レイパー	4.9	4.5	1.1	24.6	砂質頁岩	
17	128	C 7	覆土	打製石斧	14.9	6.0	2.4	150.0	砂 岩	刃部使用痕
18	S 233	表探		打製石斧	—	5.2	1.5	85.2	砂 岩	着装部欠損
19	86	A 8-b 4	Ⅲ	打製石斧	13.5	9.7	2.2	251.0	砂 岩	
20	198	B 8-b 4	Ⅲ	打製石斧	—	—	3.5	229.0	砂 岩	刃部欠損
21	261	C 7-d 4	Ⅲ	磨製石斧	—	4.9	0.7	145.0	蛇紋岩	刃部欠損
22	39	D 4-a 1	Ⅲ	磨製石斧	—	—	2.3	5.1	砂 岩	着装部欠損
23		表探		磨 器	10.3	7.7	2.8	311.0	砂 岩	
24	27	H 3-a 1	Ⅲa	石 錘	—	6.4	3.3	36.7	粘板岩	
25	56	F 4-a 2	Ⅲa	石 錘	—	4.3	3.5	23.6	粘板岩	
26	504	D 4-d 2	I・II	石 錘	—	7.1	5.5	102.0	砂 岩	
27	493	E 4		石 錘	—	8.7	6.6	151.0	流紋岩	二次焼成
28	493	E 4		石 錘	—	10.3	6.9	142.0	流紋岩	
29	493	E 4		石 錘	—	10.1	6.9	145.0	流紋岩	
30	104	H 3-a 4	I・II	石 錘	—	8.9	7.4	200.1	砂 岩	

第1表 昭和55年度出土石器計測表・石材一覧表

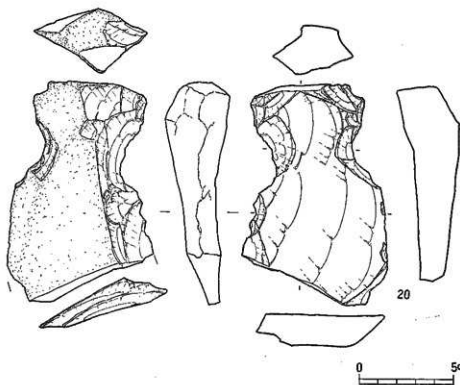
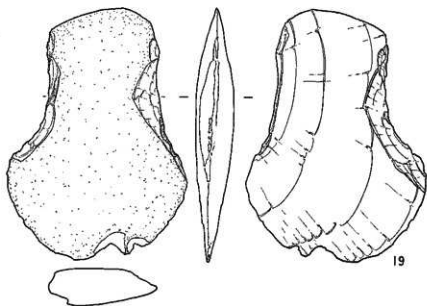
(石材の同定は伊藤通玄氏による)



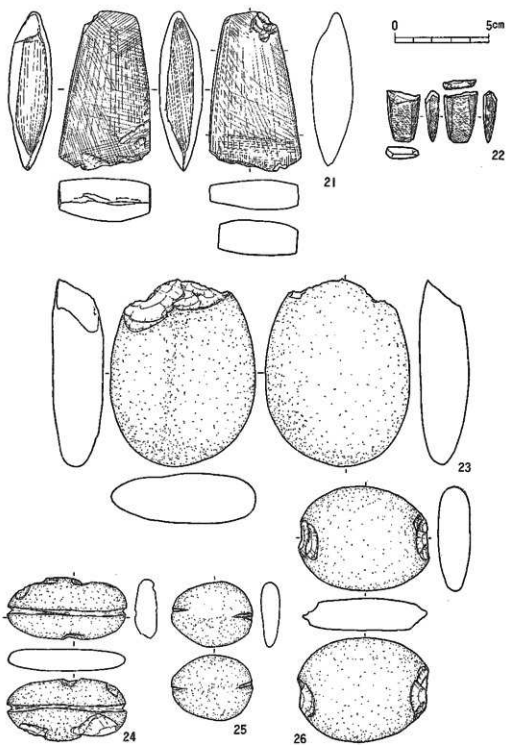
插图第35 昭和55年度出土石器実測図(1)



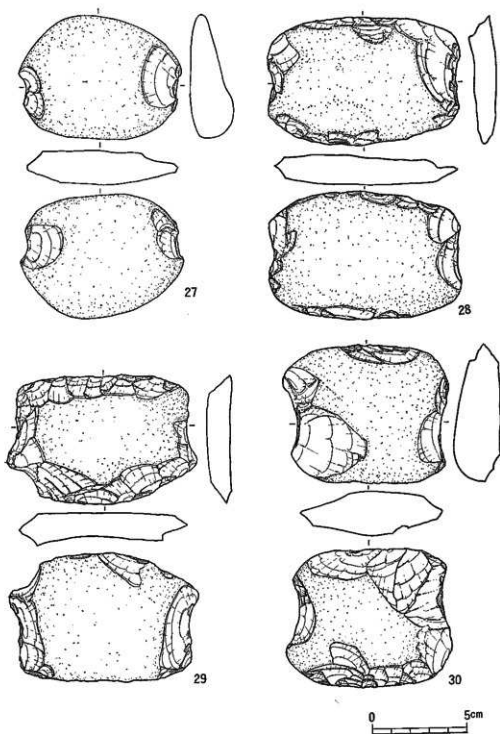
挿図第36 昭和55年度出土石器実測図(2)



挿図第37 昭和55年度出土石器実測図(3)



挿図第38 昭和55年度出土石器実測図(4)



挿図第39 昭和55年度出土石器実測図(5)

iii その他の遺物（挿図第40-1～7）

土製耳飾（挿図第40-1）—最大径2.7cm、厚さ2.2cmを測る。H2-a4グリッド第Ⅲa層出土。断面は扁平な鼓状を呈し、両側面が浅くくぼんでいる。胎土に長石粒を多く含む焼成は比較的良好い。

ミニチュア土器（挿図第40-3）—器径4.6cm、器高2.4cmを測る。H2-a5グリッド第Ⅲa層出土。口縁部は完結しており、浅鉢形を呈する。指頭により縦位のナデ整形を加えて外面を調整している。底面に木炭痕を残す。

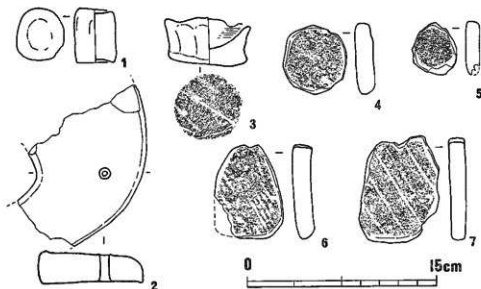
土製円盤（挿図第40-4・5）—4は最大径3.7cm、厚さ0.9cmを測り、B7グリッド第Ⅲa層出土。5は最大径2.8cm、厚さ0.7cmを測りC4-e1グリッド第Ⅲa層出土。4・5とも胎土に長石粒がめだつ。縄文後期に属する粗製土器片を利用したものであろう。

土器片錘（挿図第40-6・7）—6は長軸径4.8cm、短軸径(3.7)cm、厚さ0.9cmを測り、B4グリッド第Ⅲa層出土。7は長軸径5.2cm、短軸径(4.4)cm、厚さ0.9cmを測り、C7グリッド第Ⅲa層出土。7は長軸方の一端を打ち欠いているが、他方には顕著な打ち欠き痕は認められない。短軸方の最大径が中央になく、洋梨形を呈する。

不明土製品（挿図第40-2）—H2-a3グリッド第Ⅲa層出土。多くを欠損し全形を知ることとはできないが、土器等の蓋ではないかと考えた遺物である。端部が若干下方へ屈曲し、表裏ともていねいにヘラ研磨される。焼成前の穿孔が1か所認められる。胎土は後期の土器と類似する。

玉類は数点採集されているとのことであるが、継続的に行われてきた発掘調査において、土偶等いわゆる呪術的性格をそなえた遺物は破片も含めまったく検出されていない。大畑通跡の性格を考えるうえで重要な問題であろう。

（山下晃・吉岡伸夫）



挿図第40 昭和55年度出土その他の遺物実測図および拓影

第3節 まとめ

本章第1節通構の中で、昭和55年度発掘範囲における層位について説明している。第5層の砂礫混り黄褐色粘土層を地山としているが、遺跡の基盤を構成する洪積層であり、その上部に3層の遺物包含層の堆積が確認されている。

上部の諸層は、下位より第Ⅲb層→第Ⅲa層→第Ⅱ層である。第Ⅲa層は暗褐色土層であり、第Ⅲb層は暗黄褐色土層であって組成を異にしているにもかかわらず両層を第Ⅲ層として概括しているのは両層の境界面を画然と分離するのが困難だったためである。第Ⅲa・b層の異なる点は次のように説明することができる。第Ⅲb層とした暗黄褐色土層は褐色粘土を土層の母体とするものであって、本来遺跡基盤層（昭和52年度調査の層位 No. 第5層に相当する）の上表部を覆う堆積層であり、これに上部の腐植土が混入して形成されたものである。腐植土の混入量は上位に向かって徐々に量を増し、やがて純粋な腐植土層である第Ⅲa層＝暗褐色土層に移行する。そのために、昭和55年度第Ⅲb層には、昭和52年度第4層・暗黄褐色土層と、第3層・暗褐色土層の一部とを一括して、第Ⅲb層に含めている。したがって、昭和55年度第Ⅲa層は、52年度第3層・暗褐色土層の全体ではなくその一部を比定していることになる。したがって、両層を第Ⅲa・b層として分離しながらも、画然と区別するのが困難だった理由の一つとなっている。第Ⅱ層の黒褐色土層と、昭和52年度暗褐色土層の関係はきわめて正常な対比関係にある。昭和55年度第Ⅱ層を遺物包含層として判断しているのは、昭和52年度発掘範囲におけるよりも第Ⅱ層のレベルが深く、耕作による攪乱の度合いが少なかったためであろう。第Ⅰ層の表土層が、昭和52年度第1層・暗褐色土層および覆土層に相当し、正常な関係といえる。

大畑遺跡においては、昭和52年度の発掘において確認した土層を標準として、その後の調査における土層との比較が行なわれている。昭和52年度と昭和55年度の土層を比較すれば次のような関係になる。

昭和52年度発掘層序	昭和55年度発掘層序
・ 覆土層	
第1層・暗褐色土層（表土層） （耕作土）	} 第Ⅰ層・暗褐色土層（表土層） （耕作土）
第2層・暗褐色土層（耕作土） （遺物を含む）	
第3層・暗褐色土層（遺物包含層）	
第4層・暗黄褐色土層（洪積漸移層）	} 第Ⅲa層・暗褐色土層（遺物包含層） 第Ⅲb層・暗黄褐色土層（遺物包含層） （洪積漸移層）
第5層・砂礫混り黄褐色粘土層（遺跡基盤層） （洪積層）	

第2表 昭和52・55年度土層対照表

挿図第2でもわかるように、昭和55年度の発掘区画は昭和52年度発掘区画をとりまき距離的にも接近した場所に位置している。にもかかわらず、昭和52年度発掘の第4層と、昭和55年度発掘の第Ⅲb層＝暗黄褐色土層（ただし、昭和52年度第4層と一致する部分）の層厚に厚薄がみられるのは、遺跡基盤層の砂礫混り黄褐色粘土層（昭和52年度第5層；昭和55年度地山）表

面の凹凸に起因するのではないと思われる。

本篇第7章にも述べているところであるが、昭和53年度調査の一環として遺物包含層の分布が西に向って三ヶ月状に開いていることをボーリング調査によって突きとめている。三ヶ月状の幅の中央においては、脊稜状に砂礫混り黄褐色粘土層表面が微高部分を形成してのびており、昭和52・53年度発掘範囲は脊稜状微高部分のピークにもっとも接した地点を発掘したことになる。砂礫混り黄褐色粘土層は、微高部より三ヶ月状の両舷即ち比高の低い部分に向い流れて再堆積したと判断される。昭和55年度の各発掘区は、何れも脊稜状微高部分のピークをわずかにはずれた地点に位置し、少量とはいえ中期前葉の遺物を包含する程度の層厚に堆積したもののといえよう。

『昭和52年度報告書』（市原1978）及び本篇6・7章にも述べているように、昭和52・53年度発掘では第3層中にA～F面まで6面の先史地表面が暗褐色土層中に挟在するのを確認した。昭和55年度発掘においては、第Ⅲa層の発掘過程に、相当する先史地表面の存在を意識することはできたが、時間的な制約が伴ったためこれを全面にわたって露出するという作業は割愛し、遺物の出土状況等を最大限記録するにとどめた。

遺構として本章第1節には発掘にたずさわった山下晃・吉岡伸夫が6戸分の住居跡の調査結果を詳述しているが、主要な内容は第3表のように整理することが可能である。

住居跡No.	時 期	住 居 型 式	炉 跡	壁 溝	住居法	そ の 他
第1号住居跡	晩期初頭?	平地住居 方形プラン	不 明	有 (部分的に 途切れる)	4m×4m	北東部分は後世に切 断されている。
第2号住居跡	中期最末期	竪穴住居 円形プラン?	不 明	東側のみ有	径約5m	第Ⅲa層に覆われて いる。発掘区画内 のみ露出。第3号住 居跡に切断されている。
第3号住居跡	後期前半	竪穴住居 円形プラン	完掘してい ないため不 明	発掘範囲に はみられな い。	径約4m	第Ⅲa層に覆われて いる。第2号住居 跡を切断している。
第4号住居跡	中期最末期	竪穴住居 円形又は楕円形 プラン	有	有(2重)	径約5.5m ～6m	第Ⅲa層に覆われて いる。二重壁溝は拡 張又は建て直し。
第5号住居跡	中期最末期	竪穴住居 円形プラン(三 ヶ所がやぶく らむ)	有(配石炉)	有 (部分的に 途切れる)	径約5.5m	第Ⅲa層に覆われて いる。
第6号住居跡	後 期 末	竪穴住居 楕円形プラン	有(2箇所 に配石炉+ 焼土塊)	無	5.2m× 5.5m	第Ⅱ・Ⅲa層類似の 土層に覆われてい る。

第3表 昭和55年度発掘住居跡集成表

竪穴住居跡は、昭和53年度調査においてはじめて存在が確認されたのであるが、今回6例の資料を追加することができた。然もそのうち5例は竪穴住居跡であり、さらに3例が中期の竪穴住居跡であることは意外であった。昭和26年度発掘の礎堤の伴った平地住居を加えるならば、合計9戸の住居跡が確認されたことになり、それらが営まれた時期は、中期末～後期末まで、晩期初頭にまで及ぶ可能性がある。

第1号の平地住居跡を除き、実測図あるいは写真図版でもみられるように各竪穴住居跡の壁高はきわめて低く、ほとんど認められないような例さえある(第2・3号住居跡)。住居跡床面のレベルが遺跡基盤層の砂礫混り黄褐色粘土層にまで達していない場合には、住居跡の廃棄後上部に重複する先史地表面での生活行動によって消失したということではないかと思われる。

大畑遺跡の全域が発掘されていない現在、住居跡の分布状況に言及する完全な資料をもたないものであるが、住居跡の分布と先史微地形とは無関係ではないようである。遺跡と周辺部の先史地形を規定しているのは、遺跡基盤層の凹凸が深く関係している。先にのべた脊稜状微高部分の北端は、小笠山丘陵から遺跡に向って突出した支陵の裾に続いている。支陵の裾は黄褐色砂礫層で構成されるのであるが、この砂礫層は扇状の微高地を形成し高まりをみせる。この微高地と脊稜状微高部分の北端とは連続している。即ち、脊稜状微高部分のピークは扇状の微高地から枝状に長く突出した形になっている。

住居跡の分布をプロットしてみると昭和26年度発掘住居跡(後期前葉、B3グリッド)、昭和55年度第4号住居跡(中期末、D4グリッド)、同第5号住居跡(中期末、E4グリッド)、昭和53年度発掘住居跡(中期末、D6グリッド)、昭和52年度発掘「平地住居跡状遺構」(後期末～晩期初頭、D6グリッド)、昭和55年度第2号住居跡(中期末、C7グリッド)、同第3号住居跡(後期前葉、C7グリッド)、同第1号住居跡(晩期初頭?、-B9グリッド)の合計8戸が、扇状の微高地西側一南縁一東側をとりまくように不整U字状に並ぶことになる。

その中には、平地住居跡3戸、竪穴住居跡5戸と住居の形態にも2種類がみられるし、同時期の住居跡は昭和53年度発掘住居跡・昭和55年度第4号・第2号・第5号住居跡だけであって、他は時期もまちまちである。さらに昭和55年度第6号住居跡(後期末、H3グリッド)などは、扇状の微高地から南に離れた脊稜状微高部分西斜面に位置する。

以上の諸事実から、扇状の微高地縁辺をめぐる不整U字状に並ぶ住居跡の分布が、必然性をもった現象と判断する現状にないが、今後における資料の継続的な増加をまわって、大畑集落

埋葬人骨No.	埋葬位	時期	土坑の形状	頭位方向	性別	年令	備考
第1号人骨	仰臥屈葬	不明	長方形 1.75m×(76)cm	N-89°30'-E	女性	壮熟年	頭蓋骨の一部欠損。枕石有り。第5号住居跡の上に位置する。
第2号人骨	屈葬	不明	第1号人骨と同一土坑内	N-18°30'-E	?	幼年前期	第1号人骨頭頂部の東側に接して位置する。
第3号人骨	屈葬?	不明	洋梨状?	南西	男性	壮熟年	発掘区画内において大腿骨の部分のみ発掘。
第4号人骨	右仰臥屈葬	不明	楕円形	N-138°-W	?	?	人骨保存状態極度に不良。
第5号土坑 番外第1号人骨	不明	不明	100cm×72cm	第Ⅱ層が覆土			第6号土坑を切断している。確が伴う。
第6号土坑 番外第2号人骨	不明	不明	68cm×35cm				

第4表 昭和55年度発掘埋葬人骨集成表

構成上の問題として明らかにしていかなければならない最重要課題と思われる。

住居跡についてとりあげなければならないのは、埋葬人骨の問題である。昭和55年度発掘の埋葬人骨の諸特徴を集成すれば第4表ようになる。第5・6号土壌中より、保存状態不良な人骨細片が検出されているので、本節においては番外第1号・第2号として扱っている。

これらの人骨は、いずれも時期不明として扱っているが、それは時期の同定資料となるような伴出土器に恵まれなかったためである。然し、周囲の包含層の状況からいって、中期にさかのぼるものはなく後期の埋葬例であることは明瞭であり、場合によっては晩期初頭にまで降るものを含むかもしれない。

第1・2号人骨の土壌は、北半の約 $\frac{1}{3}$ を意識しないで破壊しているのであるが、南側の状態から復元して本来は長方形の土壌であったとしている。遼江地域における後・晩期埋葬における土壌の状態をみても（向坂1962）、他遺跡の縄文後・晩期埋葬の土壌と比較しても類例はみられない。また、土壌の規模も人骨と土壌壁の間隔に開きすぎの感をまねがれず、調査時の発掘ミスのあったことを否定できない。その理由として、第1・2号人骨土壌は第Ⅱ層＝黒褐色土層表面から掘り込まれており、土壌中を埋める土層は土壌壁と区別しにくい土壌が埋めているために、土壌本来の形態を掘りあげるのは困難な作業であるという点があげられる。同じことは第4号人骨の土壌についてもいえることと思われる。

第1・2号人骨についての第2の問題は、本章第2節において同一土壌内における合葬としている点である。幼児、即ち第2号人骨の下肢骨に混じって第1号人骨の左手指骨が検出されたとしている点は重視する必要がある。第1号人骨左手指骨本来の位置と第2号人骨下肢骨の位置とでは約40cmの距離がある。そして、第1・2号人骨が埋葬時の原位置にあって保存状態もよく、2遺体を損傷するような後世の激しい攪乱を受けた事実もみられない。この両事実を併せ検討すると、第1号人骨左手指骨が第2号人骨下肢骨の位置まで移動しているという事実は、第2号人骨埋葬が第1号の人骨の一部を破壊して行なわれた結果とも考えられる。したがって、第1号・2号人骨の埋葬には時間の先後関係があることも予測する必要がある。

第5号・6号土壌＝番外第1号・同第2号人骨土壌の規模は、成人の埋葬にとってはたしかに狭小であるが、若年層の埋葬は充分可能な規模である。そして、番外1号・2号人骨が細片であることから、同例に再葬墓の可能性のみられることを指摘している。縄文時代に再葬の行為があったことは否定できないし、磐田市西貝塚2号人骨例（麻生1961）などは遼江における縄文時代改葬の一例である。しかし、番外第1号・第2号人骨を、再葬例として扱うのはやや性急な推論と思われる。なぜならば、第4号人骨は原位置にありながら保存不良で頭骨など人類学上の観察・検査の資料としては十分な役割を果たさなかった例である。第1号・第2号人骨にみられたように、大畑遺跡においては小規模な貝層が伴存するだけでも人骨の保存はきわめて良好である。一方、第4号人骨のように全く貝層を伴わない場合には、埋葬時の原形を保っていても人骨の保存状態はきわめて悪い。番外第1号・2号人骨の細片化した状態は第4号人骨に等しいし、何らかの影響を受けた場合に人骨細片が集塊状を呈することも容易にうなずけることであって、再葬墓という結論だけに帰結することは短絡的のそりをまねがれないように

思う。

大畑集落内での住居跡・墓域の分布関係についても、ようやく見通しをたてうる資料が整いつつある。その点に関しては本篇第10章にのべたい。

出土遺物のうち、縄文土器は量・質共に良好な資料に恵まれたといえる。前節において中期＝Ⅰ群、後期＝Ⅱ群、晩期＝Ⅲ群土器に分類している。中期の土器は量的に多いとはいえないが、第4号・第5号住居跡出土資料によって中期末の、第6号住居跡出土資料からは後期末の型式組成の内容が分析的にとらえられたことは、そのうちでももっとも貴重な収獲としてあげることができよう。

石器については、もっとも多量に出土したのは石鏃であるが、前節においてはその一部だけを紹介した。それに反して石斧類の貧弱さは対蹠的といえよう。その他の石器としては石錘がかなり目立つ程度に出土していることは注目してよいと思われる。多量の石鏃、相当量の石錘の出土など、本篇第4章の加藤芳朗氏による立地環境の論考、あるいは第9章第2節の金子浩昌氏による自然遺物の論考などと考え合わせると、大畑遺跡における生産活動の特性を良く現わしていると思われる。

以上、本章第1節・第2節において不十分な点を補って本章のまとめに代えたい。

(市原寿文)

参 考 文 献

- 市原寿文編 1978年 「袋井市大畑遺跡—1977年度の発掘調査—」 袋井市教育委員会
麻生 優樹 1961年 「西貝塚」 磐田市教育委員会
向坂 鋼二 1962年 「第四 埋葬」 『姫塚遺跡—総括篇—』 浜松市教育委員会

第9章 自然遺物

第1節 昭和55年度出土の人骨

山口 敏

昭和55年度の調査では墓嶺が6基発見されたが、人類学的調査が可能な程度に保存されていた人骨は、F4-a4・b4グリッドに合葬されていた第1号・第2号人骨と、D4-d1グリッドの第3号人骨の、計3体である。

第1号人骨（推定壮年ないし熟年女性）（図版Ⅸ・X）

第2号人骨と共通の墓嶺内で、東頭位仰臥屈葬の状態で発見された。上腕は体軸と平行に体側に位置し、肘関節が左右とも完全に曲げられ、手は顔面の近くに置かれている。大腿は伸展位より、約45°曲げられ、左右はほぼ平行して右側へ倒され、膝関節はほぼ完全に曲げられている。

この人骨は、第2号人骨とともに、出土状態そのままに、墓嶺ごと遺跡から切り出されて保存されているため、計測および形態観察の可能な部位はかなり限定されている。

頭蓋 前頭鱗から頭頂骨にかけての頭蓋冠上部は耕作によって失われている。脳頭蓋の大きさは、正確な計測はできないが、縄文時代人女性平均をやや下回るようである。頭蓋示数は求められないが、上面観の印象では、長頭蓋型ではなく、中ないし短頭蓋型に属すると思われる。主縫合のうち観察できるのは、左冠状縫合の一部、矢状縫合の後端部、および人字縫合に限られるが、外板の閉鎖箇所は認められない。しかし内板では部分的に閉鎖が進行している可能性がある。人字縫合の走行はやや複雑である。ラムダ小骨はない。側面観における眉間の隆起程度はⅡ段階。後頭上縁の彎曲突隆は弱い。頭蓋冠下部と頭蓋底は土中において観察できない。ナジオンから上方約5mmにわたって縫合残存が認められるが、それより上は骨が失われているため、前頭縫合の有無は判断できない。眉間、眉弓ともに隆起は弱く、ナジオン部の陥凹も浅い。眼窩上縁の破損が著しく、眼窩形は明らかでない。鼻骨は左側のみ保存されている。幅広く、中等度に隆起している。鼻骨に接する上顎骨前頭突起の面も、前頭位に対して約45°の傾きを示す。顔面頭蓋は土圧によってつぶれているため、顔面示数などを求めることはできないが、頬骨、上顎骨の形態から判断して、幅の広い低顔型に属すると推測される。梨状口下縁は鋭い単一の稜で画されている。上顎骨の頬骨下縁は多少上方に彎入する切痕型を呈する。歯槽突起は低い。下顎骨はオトガイ部が失われており、観察できるのは左側の後半部に限定される。下顎体はきわめて低い。下顎枝の幅は約32mm。下顎角には咬筋粗面が明瞭にみられ、やや外反している。角前切痕はない。歯については、上顎の左右第1切歯以外、ほとんど観察できない。上顎切歯は、左右とも歯冠の約2分の1が磨耗している。

体幹骨 頸椎は1個しか観察できないがその椎体縁に骨棘形成の傾向がみられる。胸椎以下の椎骨はすべて椎体前面が破損しており、椎弓は土中において、とくに記すべき所見は得られない。仙骨は破損が著しい。肋骨は大半が保存されているが、胸骨は見あたらない。

上肢骨 右鎖骨は外側半が土中に埋まっている。左は内側半のみが保存されている。肩甲骨も不完全ながら左右とも保存されている。関節窩は小さく、老年性変化はない。右上腕骨は近

位端を欠く。左は全形が保存されているが、中央で折れている。折れた状態のまま計測すると、左上腕骨最大長は約285mm、全長は約279mmである。これらの長径は縄文時代人男性平均に近いが、右骨幹中央で計測した最大径は22mm、最小径は14.5mmで、いずれも女性平均の方に近い。骨幹中央部は著しく扁平であり、断面示数は65.9である。大結節後がよく発達して三角筋粗面にまで続いており、橈骨神経溝も著明である。右に滑車上孔がみられる。左は不明。右遠位端の関節面に病的変化は認められない。

左尺骨は遠位半を欠くが、右は完全に保存されている。右最大長は243mm。右滑車切痕の関節面に骨性切痕面と軟骨性溝による二分傾向がみられるが、病的変化はない。骨幹の最大径は骨間線と後縁の間にあって16.5mm、同最小径は前縁と後面の間にあって、11.5mm。いわゆる真正扁平型である。なおマルチンの骨幹背掌径は12mm、横径は15.5mmである。これらの骨幹径も縄文時代人女性平均に近い。

桃骨も右は完全であるが左は遠位端だけが残っている。右最大長は224mm。関節面は両端とも異常を示さない。右骨幹の横径は14.5mm、矢状径は10.5mm、断面示数は72.4である。長径は縄文時代人男性平均の方に近いが、骨幹径は女性平均にきわめて近い。

左の手骨は頭蓋の左側に数点散在しているが、右の手骨は現状では見ることができない。

下肢骨 寛骨のうち恥骨は破損しているが腸骨は比較的良好に保存されており、大坐骨切痕の開き方は女性的である。また左右とも耳状面の前に著しく大きな耳前窩が認められる。

大腿骨は両側とも破損しており、左は遠位端、右は両端を欠く。右骨幹の径は上部で最大径29.5mm、最小径21.5mm、断面示数72.9。中央部で矢状径30.5mm、横径24mm、断面示数127.1である。これらの骨幹径の絶対値は縄文時代人女性の平均にきわめて近いが、上部の扁平性、中央部の柱状性は、縄文時代人女性平均よりもさらに著しい。転子下窩、外側稜は認められない。

膝蓋骨は左右とも見あたらない。

脛骨は左右とも近位端を欠く。遠位端は土中において観察できない。骨幹径の計測はできないが、中央部断面形は四辺形である。腓骨も左右とも不完全である。

足骨は左右とも部分的に保存されている。その大半が土中になかば埋まっているため観察することはできない。

性・年齢・身長 性は頭蓋の大きさ、四肢骨骨幹の径、腸骨の形態等から女性と推定することができる。年齢区分は、頭蓋骨縫合、歯、四肢骨骨端および関節面等の所見から、壮年の範囲と考えられるが、熟年の範囲にかかる可能性もないとはいえない。

左上腕骨最大長285mmを補正してえられる右上腕骨最大長推定値290.1mmと、右桃骨最大長224mmをもとにK. ピアソンの推定式 (b, d, g, h) によって身長を推定し、4式の推定値の平均を求めると、153.2cmとなる。上肢骨にもとづく推定は下肢骨にもとづくそれに比して精度がやや劣ると考えられるが、おそらくこの個体の身長は縄文時代後晩期人女性平均身長よりはやや大きかったものと思われる。

第2号人骨 (幼児) (図版XI)

第1号人骨の頭蓋から東へ約40cmへだてた、同じ墓室内の位置に、顔面を南に向け、底面を下にした頭蓋があり、その南に肋骨片、椎骨片、右上腕骨片などが散在し、その延長線上に腸骨翼、さらにその西側に右大腿骨、下腿骨の骨幹片が認められる。保存部位はきわめて断片的であるが、骨片の散らばりの状態から判断して、おそらく頭位を北にし、股関節と膝関節を強く曲げて右に倒した屈葬位で埋葬されたものと考えられる。

頭蓋冠の後半分は失われ、前半部も破損している。前頭縫合はナジオンから上約18mmを残して閉鎖している。頭蓋底および顔面はほとんど土中にあるが、わずかに上下顎の乳切歯を観察することができる。いずれも咬耗はわずかである。

保存されている四肢骨はいずれも不完全であるが、骨片の大きさ（右上腕骨骨幹遠位半部片の長さ53mm、同下端幅24mm、右大腿骨近位部片の長さ91mm、脛骨骨幹片の長さ70mm）などから推測して、本人骨の年齢区分は幼年前期（1～3歳）であろうと考えられる。

第3号人骨（推定壮年ないし熟年男性）（図版Ⅺ）

出土状態の写真および実測図に記録されている上・下肢骨の配置から判断して、この人骨の頭部はトレンチの外に位置していると考えられる。下肢骨は膝を強く曲げ、左右重ねて右側に倒した状態であった。しかし、とりあげられて最終的に筆者の調査に供されたのは、左脛骨骨幹片（T-517）、同遠位端片（T-531）、および左距骨（T-530）の計3点のみである。

脛骨骨幹片の全長は約16cm。ヒラメ筋線が明らかな隆起線をなし、その下、骨幹後面中央に縦稜が走るが、後者は骨幹中央付近では不明瞭になる。したがって中央部での骨幹横断面形は、ヘリチカの2型に属する。骨幹中央最大径は29mm、横径はマルチン法で19.5mm、パロワ法で18.5mm。断面示数はそれぞれ67.2、63.8で、やや扁平である。脛骨遠位端片はごく小さいが、下関節面前縁に上方への小延長（跗跖面）があり、それを上から囲む広い凹面も認められる。

左距骨は一部破損しているが、距骨滑車幅によって比較してみると、大きさは縄文時代人男性の平均にはば一致する。滑車前縁の外側部は前方に延長し、頭上の前後に凹する平滑面に接続し、さらにその前方に、表面のやや平滑な結節がみられる。観察できる範囲の関節面に病的变化はない。

おそらくは壮年ないし熟年の男性と考えられる。

要約

大畑遺跡昭和55年度調査に際して出土した第1号成人女性と第2号幼児の合葬骨格、および第3号成人男性部分骨格について記載をおこなった。

第2号の幼児は別として、第1号と第3号の成人骨には、鼻根部の隆起、低広形の顔面、角前切痕を伴わない下顎角、上腕骨、前腕骨、脛骨各骨幹の扁平性、相対的に長い前腕骨、大腿骨骨幹の強い柱状性、距腿関節における跗跖面の形成という、広く縄文時代の人骨に共通する形態的な特徴が認められた。

参考文献

加藤晋平・小林達雄・藤本強編 1982年「縄文文化の研究 1 縄文人とその環境」雄山閣

第2節 昭和55年度出土の動物遺体概要

金子浩昌

昭和55年度において発掘された動物遺体は貝類とともにすべてブロックで採集され、それらの水洗分別によって埋存する貝類の量的な比率、鳥獣魚骨の検出とその量差が調査された。

分析の詳細は動物遺体の正報告にゆずるとして、以下その概要をのべておく。

検出された動物種名表

I 軟体動物 Mollusca

腹足綱 Gastropoda

原始腹足目 Archaeogastropoda

ニシキウズガイ科 Trochidae

1. ダンベイキサゴ *Umbonium giganteum*
中腹足目 Mesogastropoda
ウミユナ科 Potamididae
2. カワアイガイ *Cerithideopsisilla djadjariensis*

二枚貝綱 Pelecypoda

翼形目 Pteriomorpha

イタボガキ科 Ostreidae

1. マガキ *Crassostrea gigas*
異歯目 Heterodonta
シジミガイ科 Corbiculidae
2. ヤマトシジミ *Cerbicula japonica*
マルスダダレガイ科 Veneridae
3. ハマグリ *Meretrix lusoria*

II 脊椎動物 Vertebrata

軟骨魚綱 Chondrichthyes

1. エイ目 Rajiformes
硬骨魚綱 Osteichthyes
ニシン目 Clupeiformes
1. ニシン科の一種 Clupeidae gen. et sp. indet.
コイ目 Cypriniformes
コイ科 Cyprinidae
2. コイ *Cyprinus carpio*

- ウナギ目 *Anguilliformes*
- ウナギ科 *Anguillidae*
- 3. ウナギ *Anguilla japonica*
- ボラ目 *Mugilliformes*
- 4. ボラ科の一種 *Mugillidae* gen. et sp. indet.
- スズキ目 *Perciformes*
- スズキ科 *Serranidae*
- 5. スズキ *Lateolabrax japonicus*
- タイ科 *Sparidae*
- 6. クロダイ *Acanthopagrus schlegelii*
- フグ目 *Tetraodontiformes*
- 7. マフグ科の一種 *Tetraodontidae* gen. et sp. indet.
- カレイ目 *Pleuronectiformes*
- 8. ウシノシタ科の一種 *Cynoglossidae* gen. et sp. indet.

両生綱 *Amphibia*

無尾目 *Anura* (Salientia)

鳥綱 *Aves*

種不明 sp. indet

哺乳綱 *Mammalia*

ウサギ目 *Lagomorpha*

ウサギ科 *Leporidae*

- 1. ノウサギ *Lepus brachyurus*

食肉目 *Carnivora*

イヌ科 *Canidae*

- 2. タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

偶蹄目 *Artiodactyla*

- 3. イノシシ科 *Suidae*

イノシシ *Sus scrofa*

シカ科 *Cervidae*

- 4. ニホンジカ *Cervus nippon*

大畑貝塚の貝類はヤマトシジミを主体としたものであるが、その中には僅かにハマグリ、ダンベイクサゴ、カワアイなどの鹹水貝種を含むものであった。ハマグリは破損標本が多かった

が、殻の大きなものもあり、意図的に採られ運ばれてきたものであろう。ダンベイクサゴは、さらに外海域に生息する貝であるところから、当時といえども遠距離を運ばれてきたものなのであろう。カワアイは内湾棲なので採取される機会はあったと思われるが、肉量の少ないことから多くは採られなかったものと思う。

脊椎動物の骨は多く出土していない。魚類では、大形になる種類はクロダイに限られたようで、かなり大きな前上顎、歯骨が出土している。そして、その中には昭和56年度調査資料にみたような小さい顎骨は含まれてなかった。小さな魚骨にはボラ類、ウナギ、ウシノシタ類があり、ボラはやや大きい個体のものも含まれていた。

なお、ブロックサンプリングされた資料中には微細な魚骨片がかなり含まれていた。ただし、それらの大多数は、破砕された骨片、鰭棘などの破片であり、それらはおそらく上記した種類の魚のものと考えられ、それらの漁獲が少なくなかったことを示すのであろう。

獣骨の埋存は多くはなかったようである。断片的なものは別として、歯牙あるいは種名の同定できる肢骨片はすべてイノシシおよびシカのものであった。

第10章 総 括

本篇に収載されている、昭和26年以来4次にわたる調査結果および各報告内容をふまえて、大畑遺跡の総括に代えたい。

静岡県西部、即ち遠江地域においては、大畑遺跡を東限として、蜷塚遺跡（後藤1957・1958 後藤代理編集委員会1960 編輯委員会1961）（浜松市）を西限とする約30kmの間に、西貝塚（麻生1961）、石原貝塚（市原1967）、見性寺貝塚（平野1974）（何れも磐田市）があり、これらは概括して遠江貝塚群とよばれている。これらの縄文貝塚は、遺跡立地や、自然遺物を含む出土遺物の性格から、沿岸性漁撈集落として性格を規定してきた（市原1967）。

その中に、縄文時代の貝層を伴う大畑遺跡だけは、他の貝塚遺跡と比較して貝層の規模も小さく、遺跡の立地点も小笠山丘陵の裾に接した段丘中位面の奥まった場所、即ち段丘下の西側に展開する沖積地からは距離的に隔たった位置を占位し、昭和26年度調査（岡本1955）においては貝層中より大量の獣骨が採集されるなど、沿岸性漁撈集落の中に入れて扱うにはやや疑問点が残されていたのである。

昭和55年度の調査は、それ以前の発掘調査と比較してやや広い範囲を発掘しえたこともあって、遺跡の性格に関する一定程度の解決を得るような資料を採集することもできた。

他の、遠江貝塚群を構成する遺跡においては、各遺跡の開始期を示す土器は大畑遺跡と同じく縄文中期であることが知られている（市原1967）。これらの縄文中期遺跡は、いずれの遺跡においても遺跡基盤層表面に癒着した状態で発見されるのが普通であり、量的にもきわめて少ない。要するに各遺跡における生活の開始期を示す資料にとどまり、中期の住居跡なり集落が営まれたことを示したような資料はまだ1例も確認されていない。

大畑遺跡の昭和55年度調査においては、第2号・4号・5号住居跡など、縄文中期末の堅穴住居跡例が検出され、大畑遺跡における縄文集落の起源を中期集落に求めうることは今や否定できない事実となっただけではなく、他の遠江貝塚群を構成する遺跡とはきわだって対象的な点といえることができる。

他地域とは異り、遠江においては縄文中期に貝塚は形成されていないし、大畑遺跡においても中期の遺物を包含する貝層が存在しないことはいうまでもない。

以上のように、中期末にすでに集落が出現した大畑遺跡においては、その後、後期に至っても遺跡立地を移動させることなく、中期的立地を踏襲し続けたといえることができる。言葉を変えて表現するならば、大畑遺跡においては、後期はもちろん晩期初頭に至るまで中期末以来の伝統的な集落立地の条件が墨守し続けられたということであろう。

にもかかわらず、後期の生活を示す内容としては小規模なヤマトシジミを主体とする貝層を残し、遠江貝塚群において漁具の一つに比定される石鏝を出土するなど、後期の生活に漁撈的

* 従来東貝塚（磐田市）は縄文時代の貝塚といわれてきたのであるが、現在は埋没したといわれており、全く遺跡の実態を知ることができないので除外した。

な要素が加わったことは否定しえない。

加藤芳朗氏によって本篇第4章に論及されている、大畑周辺の縄文時代古環境の復元と、ヤマトシジミの生棲条件などを勘案してみると、大畑遺跡から約1.5km南西の現沖積地まで行かなければヤマトシジミの採集あるいは内湾における漁撈活動は不可能であり、効率のよい生産活動とは思われない。

そして、昭和26年度調査(岡本1955)において確認されたように、後期の貝層中より貝の量に匹敵する量の獣骨が採集されたという事実、大畑遺跡における表面採集資料まで合めると、すでに数千点(概数で4000~5000点)の石鏃が採集されている事実などを整理してみると、大畑遺跡の性格はかなり明瞭にとらえられる。

大畑周辺の縄文遺跡の類例は、北北西2.8kmの地点で、昭和53~55年度にかけて袋井市教育委員会によって発掘された長者平遺跡(縄文中期後半)がある。これも集落遺跡であるが、小笠山丘陵の西縁を開析する小笠沢川流域の狭い段丘面上に立地する遺跡であり、狩猟活動に生活の重点を置いた縄文遺跡といえよう。

大畑遺跡での初源期(中期末)の住居跡を残した人々の生活は、長者平遺跡での生活に類似する形態であったといえよう。即ち、小笠山丘陵西南縁に立地する2つの縄文中期遺跡においては、同じパターンの生活を基盤とした遺跡といえる。

大畑遺跡後期の生活は、先にのべたように獣骨の多出、大量の石鏃などから判断されるように、中期以来の狩猟重点的生活を営みながら、一方において必ずしも効率がよかったとはいえない内湾の漁撈活動にまで生産活動を拡大していったということは許されよう。いわば、大畑遺跡後期における漁撈活動は、生活全体の中で副次的な位置を占めていたといえよう。

大畑遺跡に生活した縄文後期人が、遺跡立地を内湾沿岸に移動させることなく、後期に至っても相対的に狩猟重点的な生活を維持したのかは、後背地に小笠山丘陵のような恵まれた狩猟対象の生息地を控えていたからではないかと思われる。後期になって、他の遠江貝塚群を構成する遺跡と異なり、沿岸性漁撈集落としての完全な形態をとらなかった原因には、大畑遺跡をとりまく環境条件が大きな要素となっていたことをあげうるし、そうした背景が遠江貝塚群の中で1例だけ他の遺跡とは異なる立地条件を踏襲したことの原因としてあげることは許されよう。

こうした大畑遺跡の性格を言々する資料は昭和26年度(岡本1955)以来4回にわたる調査が実施され、昭和55年度調査においては遺跡を広域に発掘して遺跡の内容をかなり展望しうるに足る資料を収集することが実現できたからである。

本章における第2の問題としてあげうることは、集落の構造に関する点である。本篇第7章において、昭和53年度調査の一部としてボーリング調査を実施し、三ヶ月状に広がる遺物包含層を確認したことをのべている。その分布範囲と、昭和26年以來確認した9戸の住居跡によって、大畑遺跡に残る縄文集落の概形について知りえた点は第9章第3節にのべている。この範囲内に、4回の調査において確認した住居跡や埋葬例を位置づけて考察しておきたい。

現在までに、大畑遺跡の発掘調査が集中している区域は、H2~7のグリッド以北、-B列

グリッドのラインまであって、三ヶ月状範囲の北半に集中している。南半部は、O-2・-1、P-2・-1の4グリッドだけであり、8章にのべられているように縄文時代の溝状遺構は検出されてはいるものの、遺物包含層も北半ほど発達してはいない。

昭和26年度(岡本1955)以来、大畑遺跡において確認された住居跡・住居跡状遺構は、中期末のもの4例、後期前葉のもの2例、後期末葉のもの2例、晩期と思われるもの1例、の計9戸である。

埋葬人骨は11例あるが、各人骨の時期はいずれも後期の何れかに比定されることは疑いなく、第5・6号土壌などが晩期初葉まで降る可能性がある。

住居跡の分布をみると、B3-E4-B9グリッドを不整U字状につなぐ範囲内に分布する。同時期に併存したことが明らかな住居跡は中期末のもの4例だけであって、他の5例は時間的な新旧差がある住居跡ではあるが、昭和26年度～55年度にかけて発掘した住居跡は遺跡の北端に接して突出した小笠山丘陵裾の微高地を要として扇状にとり囲んでいるという。

先に指摘したように、昭和55年度第6号住居跡だけはこのサークルからやや南に離れて位置するが、微高地縁辺をとりまく住居跡群だけでなく別個のサークルが遺跡内に存在するかどうかは現在の資料だけでは予測しえない。

住居の分布と関連して今一ついえることは、埋葬例の分布域である。埋葬例の西縁は、現在の資料でD4グリッド西南に位置し、南端のものはE6グリッド南東に位置し、東縁はC7グリッド東端に位置する。要するに、埋葬人骨および人骨を埋葬したと判断される土壌はD4・C7とF4・C7グリッドを結ぶ、巾20m弱、長さ36mの東東南～西西北に続く帯状の地域に、微高地を囲んで不整U字状に分布する住居跡群の南半と重複して墓域を構成しているといえよう。

縄文時代の墓域が集落の一部と重複する例は多く、蛸塚遺跡(浜松市)にもみられたところである(内藤1962・向坂1962)。大畑遺跡の住居跡分布と墓域を比較してみると、きわだった違いを指摘することができる。蛸塚遺跡においては斜面貝層をのぞいて、台地上の3つの貝塚下を中心として住居跡と墓域が分布するのであるが、これらは台地上のわずかな高みを意識的に選定して営まれていた。大畑遺跡においては、微高地の縁辺、比高としてはわずかに低くなる位置に住居跡群、墓域が分布することになる。この違いは、同じ遠江貝塚群内の両遺跡にみられる対照的な点の一つであるが、その違いが何に起因するのかは現在明らかにすることはできない。

大畑遺跡の貝塚は、縄文後期の小規模な貝層または貝ブロックによって構成され、いわば地点貝塚的な構成のみられることは、本篇第5・8章の記述からいえることである。これらの貝層・貝ブロックの分布は、北端は昭和26年度発掘のB3グリッド、南端は昭和55年度発掘のE4グリッドにかけての範囲内に主として分布する。

この範囲は、先へのべた不整U字状に並ぶ住居跡群の西辺に重複すると共に、遺跡基盤層の微高地から三ヶ月状に分布する遺物包含層の西側斜面に位置する。貝層分布範囲の西約100m弱では、井戸ヶ谷西縁に達する。このことは、貝層・貝ブロックの分布状態が、一見分散的に

みえながら、集落に付随する地域として一定の秩序をもってすてられていると判断しうる事実である。

更に、昭和52・53年度発掘範囲での知見、昭和55年度発掘のB4～F4グリッドにおいては、貝ブロックはピット中に落ちこんだ例が2・3ヶ所にわたってみられるにとどまり、先史地表面に獣骨などの散乱する現象だけが確認されている。不整U字状に分布する住居跡群の西側は「貝塚」地域、南～南東地域は集落に接する作業あるいは屋外生活地域とでもいいうる範囲ということが可能のようにも思われる。

以上のような想定が許されるとすれば、昭和55年度発掘調査の内容は、大畑縄文集落の構造を復元的に把握するに当って、きわめて貴重な資料を収獲しえた調査であるといいうるであろう。

出土遺物に関しては、第8章第2節に詳述されているので省略したい。縄文土器によって確認しえた特徴的な点だけを指摘するならば、次の2点をあげうると思われる。

一つは、後期初頭に位置づけられ、Ⅱ群a類として山下、吉岡が分類した土器群の存在である。文様構成の特徴などから、関東における称名寺式土器との併行関係を指摘しうるものである。遠江貝塚群の中でも蛸塚遺跡で微量の資料が検出されるにとどまり、西貝塚・石原貝塚・見性寺貝塚などではほとんど見るることのできなかつた資料である。遠江貝塚群の一角において、このグループの土器を確認できたことは、同貝塚群の形成過程を知る上からも貴重な事実といえよう。

今一つの点は、後期末の土器群であって、山下、吉岡がⅡ群h・i・j類として分類している土器群についてである。そのうち、h類土器としているものの内容は、蛸塚遺跡においてV式土器（麻生1962）として整理された内容と一致する。

西貝塚においては同土器型式に安行Ⅱ式風の土器が伴出していることも確認されてきた。昭和55年度発掘においては、蛸塚V式土器と同類のⅡ群h類土器とi・j類土器の伴存関係が、第6号住居跡床面出土土器として確認されたという事実は貴重である。地方化しているとはいえ、i類土器は東海西部の寺津下層式に対比しうる土器であり、j類土器は中部山岳の上ノ段式土器に対比される土器である。遠江地域後期末の土器型式構成内容の複雑さを如実に示している土器群といえよう。

以上、昭和55年度発掘内容を軸にして、遠江貝塚群における大畑遺跡の特殊性、集落構造の特徴、土器型式から指摘しうる問題点等指摘して本篇の総括に代えたい。

昭和26年度発掘資料の公表を快諾された明治大学文学部考古学研究室と戸沢充則・向坂綱二両氏、自然科学上の調査・検査結果を寄せていただいた加藤芳朗氏（地学、地形学関係）、伊藤通玄氏（石器用材同定）、山口敏氏（人類学関係）、金子浩昌氏（動物遺存体関係）には深く感謝の意を表させていただくと共に、貴重な諸結果を総括の中で充分活用しえていない点をおわびしたい。

本論文製過程に、事務的な諸事務を分担された、袋井市教育委員会事務局の鈴木勲一教育長松本長平社会教育課長、長沼宜男係長諸氏、調査を許容していただいた土地所有者諸氏、発掘

作業に従事された岡崎・豊沢地区の諸氏に調査団を代表してお礼の言葉をのべさせていただきたい。

(市原寿文)

参 考 文 献

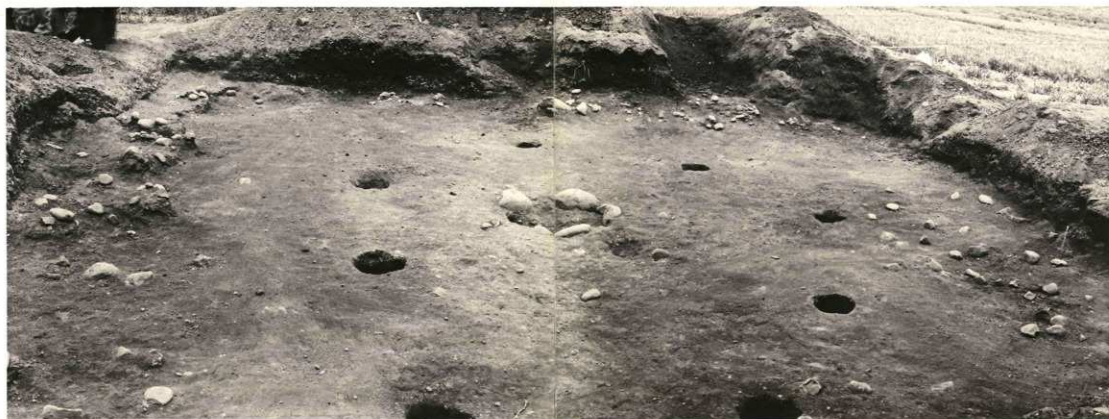
- 後藤守一編 1957年「観塚遺跡—その第一次発掘調査—」浜松市教育委員会
後藤守一編 1958年「観塚遺跡—その第二次発掘調査—」浜松市教育委員会
後藤守一代理編集委員会 1960年「観塚遺跡—その第三次発掘調査—」浜松市教育委員会
編輯委員会 1961年「観塚遺跡—その第四次発掘調査—」浜松市教育委員会
浜松市教育委員会編 1962年「観塚遺跡—総括篇—」浜松市教育委員会
麻生優編 1961年「西貝塚」磐田市教育委員会
市原寿文 1967年「遠江石原貝塚の研究—縄文後期における地域性の問題をめぐって—」『人文論集』18号
静岡大学人文学部
平野吾郎他 1974年「遠江見性寺貝塚の研究」磐田市教育委員会
岡本男 1955年「静岡県小笠原大塚遺跡」『昭和126年度日本考古学年報』日本考古学協会
市原寿文編 1978年『袋井市大畑遺跡—1977年度の発掘調査—』袋井市教育委員会
向坂嗣二 1962年「第四 埋葬」『観塚遺跡—総括篇—』浜松市教育委員会
内藤 晃 1962年「第三 住居」『観塚遺跡—総括篇—』浜松市教育委員会
麻生 優 1962年「第六 土器」『観塚遺跡—総括篇—』浜松市教育委員会



大畑遺跡遠景(南沖積地より)(矢印交点が遺跡の位置)



大畑遺跡遠景(北より)



昭和26年度 住居跡近景（西より）



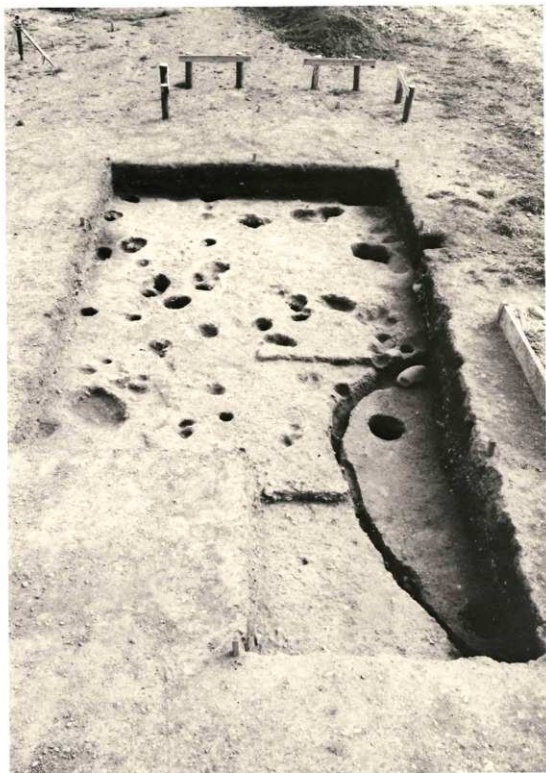
昭和26年度 住居跡近景（東より）



昭和26年度 貝層断面



昭和26年度 住居跡炉跡



昭和53年度 D6—C2 d2・3 e2・3 完掘状況（北より）



昭和55年度 第1号住居跡近景（北東より）



昭和55年度 第2・3号住居跡近景（北より）



昭和55年度 D4-b1 $c \approx e1 \cdot 2$ E4-a1・2グリッド第Ⅲa層上面遺構検出状況
(南より)



昭和55年度 D4-b1 $c \approx e1 \cdot 2$ E4-a1・2グリッド完掘状況 (南より)



昭和55年度 第4号住居跡近景（西より）



昭和55年度 第5号住居跡近景（東より）（左の埋葬は第1・2号人骨）



昭和55年度 G3・4 H2・3・4グリッド第Ⅲb層上面遺構検出状況



昭和55年度 第6号住居跡近景（西より）



昭和55年度 H2-a3～5 b3～5グリッド住居跡状遺構(基盤層表面)検出状況(北より)



昭和55年度 第1・2号人骨出土状況(西より)



昭和55年度 第1号人骨頭骨部分露出状況



昭和55年度 第1号人骨腰骨部分露出状況



昭和55年度 第2号人骨出土状況



昭和55年度 第3号人骨出土状況（北東より）



昭和55年度 第4号人骨出土状況（北東より）



昭和55年度 骨粉を埋葬した土壇(第5・6号土壇)完掘状況（北より）



昭和55年度 D4・c1グリッド第Ⅲa層上面貝塚検出状況（北より）



昭和55年度 B7・C7・D7グリッド完掘状況（北より）



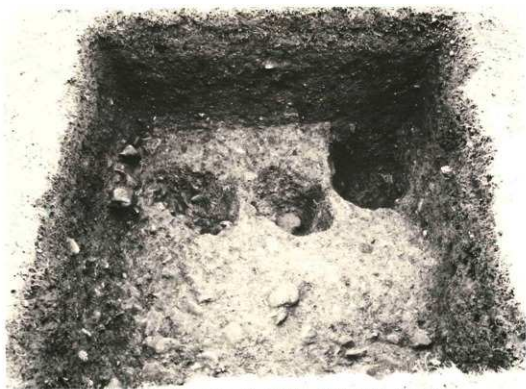
昭和55年度 F5-e1~4 G5-a1~4 b1~4 c1~4グリッド完掘状況（北より：写真中央より左上の落ちこみは土堰状遺構）



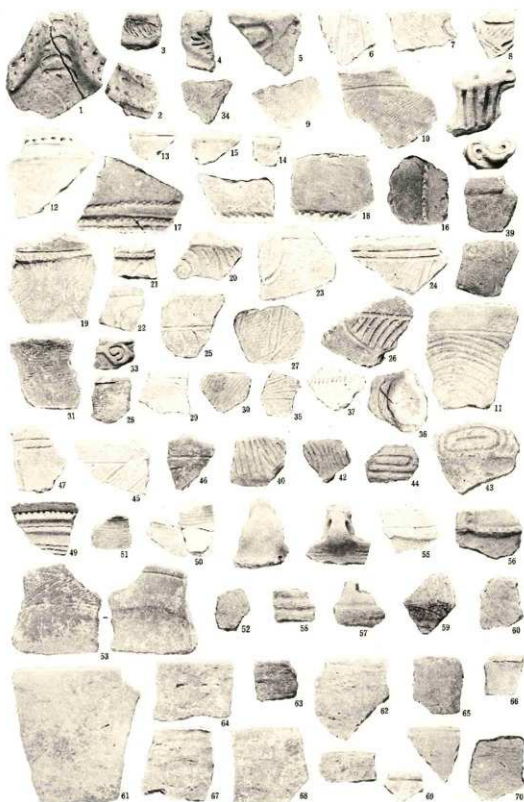
昭和55年度 B4-a1 b1 c1~3 d1~3 e1~3グリッド完掘状況（北より）



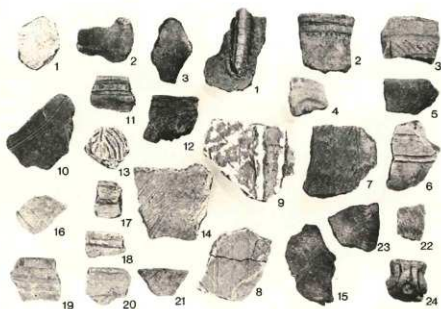
昭和55年度 O-2-a $\approx$ e4 $\cdot$ 5 P-2-a $\approx$ c4 $\cdot$ 5グリッド完掘状況（北より）



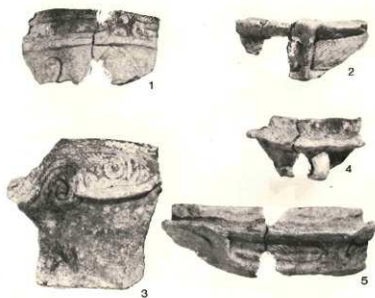
昭和55年度 G7-c2 $\cdot$ 3 d2 $\cdot$ 3グリッド完掘状況（北より）



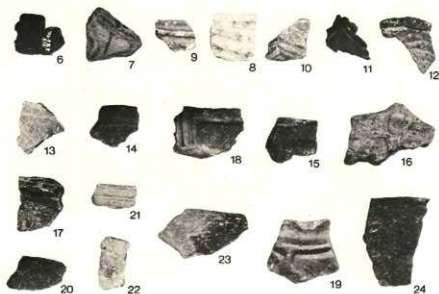
昭和26年度 出土土器



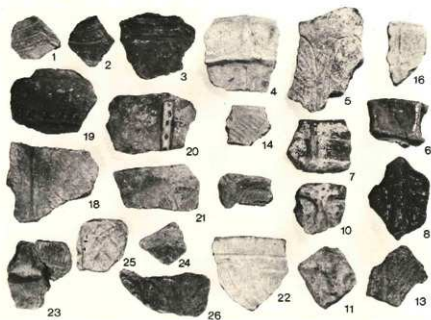
昭和55年度 第1・2・3号住居跡出土土器（挿図第15・17参照）



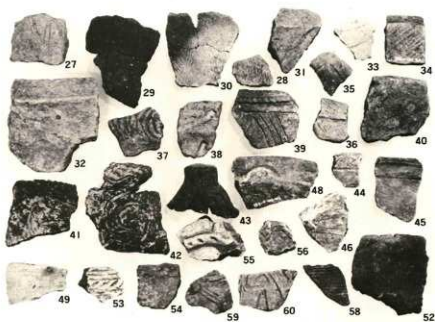
昭和55年度 第4号住居跡出土土器（挿図第19参照）



昭和55年度 第4号住居跡出土土器 (挿図第19参照)



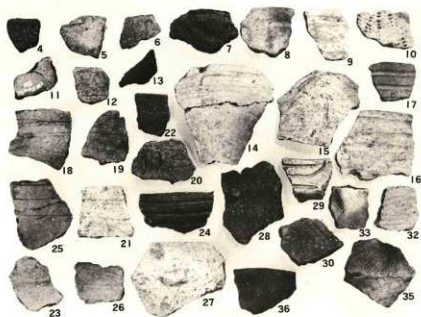
昭和55年度 第5号住居跡出土土器 (挿図第21参照)



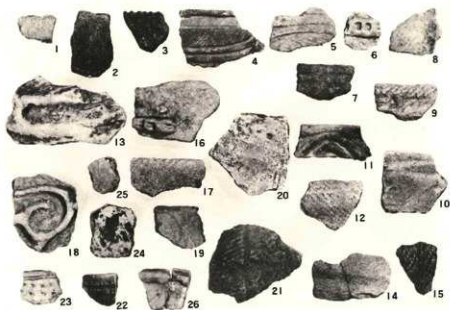
昭和55年度 第5号住居跡出土土器 (挿図第22・23参照)



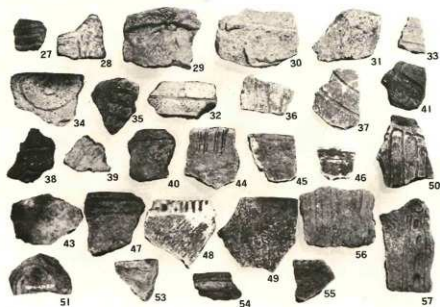
昭和55年度 第6号住居跡出土土器 (挿図第25参照)



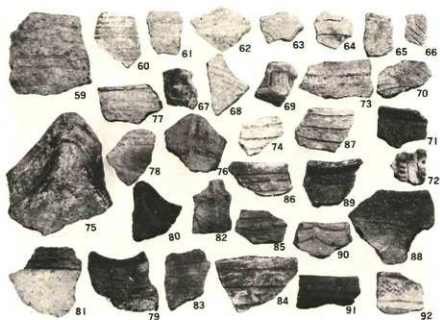
昭和55年度 第6号住居跡出土土器 (挿図第25・26参照)



昭和55年度 第I群土器 (挿図第28参照)



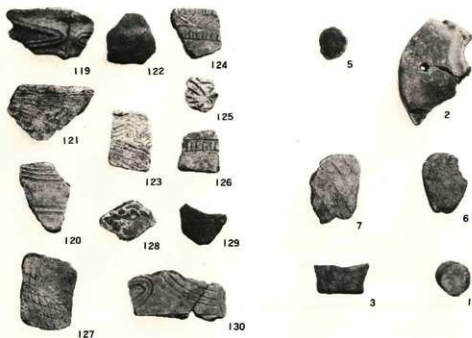
昭和55年度 第Ⅰ・Ⅱ群上器 (挿図第29参照)



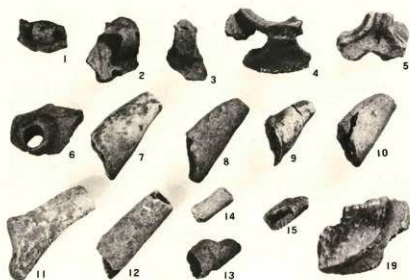
昭和55年度 第Ⅱ群上器 (挿図第30参照)



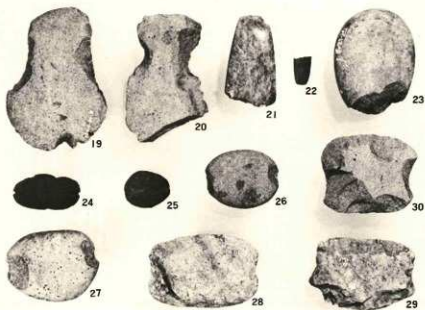
昭和55年度 第Ⅱ群土器 (挿図第31参照)



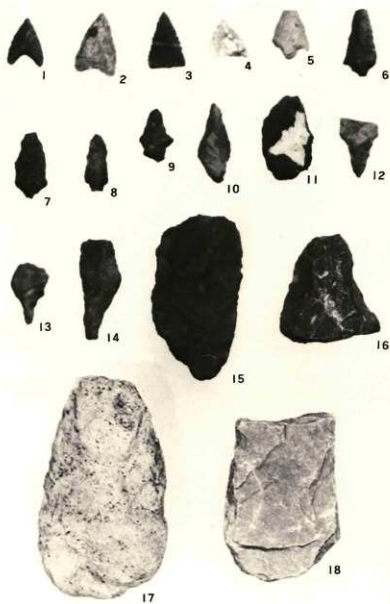
昭和55年度 第Ⅲ群土器およびその他の遺物 (挿図第32・40参照)



昭和55年度 把手・注口部・底部 (挿図第33参照)



昭和55年度 出土石器 (挿図第37～39参照)



袋井市大畑遺跡

—1951・1977・1978・1980年度の発掘調査

1981年3月31日

編集責任者 市原 寿文

発行 静岡県袋井市教育委員会◎

〒437 袋井市高尾754-1

印刷 開闢 明 堂 浜松市中沢町1-1

443